柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第 97 集

長嶺川田・長嶺江添の塚

―　新潟県柏崎市 長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査報告書 ―

２０２０
（令和２年）

柏 崎 市 教 育 委 員 会

長嶺川田・長嶺江添の塚

―― 新潟県柏崎市 長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査報告書 ――

２０２０
（令和２年）

柏 崎 市 教 育 委 員 会

序

本書は、柏崎市教育委員会が平成30（2018）年度に県営ほ場整備事業に伴い実施した長嶺川田遺跡と長嶺江添の塚の発掘調査報告書です。

長嶺川田遺跡は西山町長嶺に所在する遺跡で、別山川のほとりにあります。ここでは、古墳時代の中頃から鎌倉時代まで断続的に集落が営まれていました。集落の規模はそれほど大きくないですが、この土地を切り開いて農耕にいそしんだ人たちの集落であると考えられます。近年、別山川上流域の西山町地域では多くの遺跡が見つかっていて、その中でも古墳時代以降に遺跡の数が大きく増加しています。この頃から地域の開発が大幅に進展していき、人口が増加していったことの表れとみることができます。長嶺川田遺跡にも、この地域の発展に寄与した人々が暮らした集落であったと考えられます。

長嶺江添の塚は、長嶺地区の水田地帯の中央に築かれた小さな塚でした。塚の上には、「妙高山」と「米山薬師」の銘が刻まれた２基の石塔が据えられていました。塚が造営されたのは江戸時代の終わりころと考えられます。凶作や飢饉が頻発する先行きが不安な社会のなかで、霊山とされた妙高山や米山に対する信仰が深まり、遠くに米山を望むことができるこの場所に塚を築いて石塔を祀ったと考えられます。

これらの遺跡は、この地域で暮らしていた人々の暮らしや精神文化を現代に伝える貴重な成果をもたらしました。本書はこのような成果をまとめた調査報告書です。今後、地域の歴史を知るための一助として用いていただければ幸いです。

最後に、事業主体者である新潟県、調査に格別なる御協力と御配慮をいただいた地域の皆様、御指導をいただいた新潟県教育委員会、発掘調査に携わった皆様や関係各位に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

令和２（2020）年２月

柏崎市教育委員会

教育長　近　藤　喜　祐

例　　言

１．本報告書は、新潟県柏崎市西山町長嶺地内に所在する長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚で行われた発掘調査の記録である。

２．本発掘調査は、新潟県（担当：新潟県柏崎地域振興局農業振興部農村整備課）を事業主体とする経営体育成基盤整備事業 長嶺地区に伴い、事前調査として実施したものである。

３．本発掘調査は、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した。

４．本発掘調査に関する経費は92.5％を事業主体者、受益者負担分の7.5％を柏崎市が負担した。柏崎市の負担分については、国庫補助金・県費補助金の交付を受けている。

５．本発掘調査における現場作業は平成30（2018）年８月24日に着手し、基礎整理作業も含め平成31（2019）年２月28日まで実施した。整理作業及び報告書作成は令和元（2019）年６月20日から令和2（2020）年１月31日まで実施し、本報告書を刊行した。

６．本事業の発掘調査・基礎整理作業は、柏崎市が藤村ヒューム管株式会社 本社営業部 柏崎営業所に業務委託し、整理作業・報告書作成は、藤村クレスト株式会社 本社営業部 柏崎営業所に業務委託して実施した。（藤村ヒューム管株式会社は藤村クレスト株式会社に商号変更したため、以下、藤村クレスト株式会社で統一して記載する。）

７．本事業の整理作業における遺物の実測・トレースは、柏崎教育委員会　埋蔵文化財事務所において、担当職員を中心に同事務所のスタッフが行った。

８．本事業の現場作業における写真撮影および土層の分層、注記は長谷川知美、継実、岡本郁栄（藤村クレスト）が行い、平面図と断面図の作成は長谷川、継、岡本の指示のもと補助員が行った。

９．本報告書で使用した土層断面の注記内の土色の表記および遺物観察表中の土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。

10．本報告書で使用した方位は座標北、座標値は世界測地系（測地成果2011）である。

11．出土遺物には遺跡名の略号として、長嶺川田遺跡は「ナガカワ」、長嶺江添の塚は「エゾエ」と注記し、遺構名・グリッド・層序を併記した。

12．本報告書の執筆は、第Ⅰ章1を中島義人（柏崎市教育委員会）、第Ⅱ章を継実、長谷川知美、丹俊詞（藤村クレスト）、第Ⅲ章を長谷川、丹、第Ⅳ章を継が行った。その他は丹が行い、編集は中島の監修のもと丹が行った。

13．本報告書では遺構の種別ごとに記号を用いて一連番号を付した。
柵列＝ＳＡ、掘立柱建物＝ＳＢ、溝＝ＳＤ、井戸＝ＳＥ、土坑=ＳＫ、ピット・柱穴＝Ｐ

14．本事業で出土した遺物ならびに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会が保管・管理している。

15．図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう。）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。

16．本発掘調査の準備段階から本報告書作成に至るまで、次の機関から御助力と御理解、ならびに御教示を賜った。ここに記して、厚く御礼を申し上げる。
相羽重徳（佐渡市産業観光部 世界遺産推進課）　公益社団法人柏崎市シルバー人材派遣センター
長嶺町内会　新潟県柏崎地域振興局　新潟県教育委員会　長嶺ほ場整備推進協議会（五十音順、敬称略）

目　　次

第Ⅰ章　序　　説…… 1
1　調査に至る経緯…… 1
2　発掘調査の経過…… 2
3　調査体制 …… 2

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境…… 3
1　遺跡の位置と地理的環境…… 3
1）柏崎平野概観…… 3　2）別山川流域と遺跡周辺の地形…… 3
2　遺跡周辺の歴史的環境…… 4
1）古墳時代…… 4　2）古代…… 5
3）中世…… 7　4）長嶺地区周辺の古代・中世の遺跡…… 7
5）長嶺江添の塚周辺の塚…… 8

第Ⅲ章　長嶺川田遺跡…… 10
1　調査概要…… 10
1）調査区とグリッドの設定…… 10　2）基本層序…… 10
3）調査の方法…… 10　4）整理作業の方法…… 12
2　遺　　構…… 12
1）遺構の概要と記述方法…… 12　2）遺構各説…… 13
3　遺　　物…… 14
1）遺物の概要と記述方法…… 14　2）遺物各説…… 14
4　ま と め …… 16
1）遺構…… 16　2）遺物…… 17
3）まとめ…… 17

第Ⅳ章　長嶺江添の塚…… 18
1　塚の現況…… 18
2　塚の形態…… 18
3　構 築 土…… 18
4　遺　　物…… 19
1）遺物各説…… 19　2）石塔…… 20
5　ま と め…… 20
1）米山／妙高山信仰について…… 23　2）妙高山塔と造立主の山田庄九郎について…… 24
3）まとめ…… 24
≪引用・参考文献≫ …… 25
≪附　　表≫ …… 27
≪報 告 書 抄 録≫ …… 巻末

図版目次

［図面図版］

図版1　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚 位置図 …… 31
図版2　長嶺川田遺跡 全体図 …… 32
図版3　長嶺川田遺跡 分割図1 …… 33
図版4　長嶺川田遺跡 分割図2 …… 34
図版5　長嶺川田遺跡 東壁・南壁断面図 …… 35
図版6　長嶺川田遺跡 遺構個別図1 …… 36
図版7　長嶺川田遺跡 遺構個別図2 …… 37
図版8　長嶺川田遺跡 出土遺物1 …… 38
図版9　長嶺川田遺跡 出土遺物2 …… 39
図版10　長嶺川田遺跡 出土遺物3 …… 40
図版11　長嶺江添の塚 位置図 …… 41
図版12　長嶺江添の塚 遺構個別図1 …… 42
図版13　長嶺江添の塚 遺構個別図2 …… 43
図版14　長嶺江添の塚 出土遺物1 …… 44
図版15　長嶺江添の塚 出土遺物2 …… 45

［写真図版］

図版16　長嶺川田遺跡 調査区1 …… 46
図版17　長嶺川田遺跡 調査区2、遺構1 …… 47
図版18　長嶺川田遺跡 遺構2 …… 48
図版19　長嶺川田遺跡 遺構3 …… 49
図版20　長嶺川田遺跡 遺構4 …… 50
図版21　長嶺川田遺跡 遺構5 …… 51
図版22　長嶺川田遺跡 出土遺物1 …… 52
図版23　長嶺川田遺跡 出土遺物2 …… 53
図版24　長嶺川田遺跡 出土遺物3 …… 54
図版25　長嶺江添の塚 調査区 …… 55
図版26　長嶺江添の塚 遺構1 …… 56
図版27　長嶺江添の塚 遺構2 …… 57
図版28　長嶺江添の塚 遺物 …… 58

［挿図目次］

第 1 図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚の位置と柏崎の地形 …… 4
第 2 図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚と周辺の遺跡分布図 …… 6
第 3 図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚と周辺の塚（石塔）分布図 …… 9
第 4 図　調査区グリッド設定図 …… 10
第 5 図　土層柱状図 …… 11

［挿表目次］

第 1 表　新潟県内及び柏崎市内の米山塔造立年次頻度 …… 21
第 2 表　長岡市内の米山塔造立年次頻度 …… 21
第 3 表　年次別一揆・騒擾など発生件数一覧表 …… 22
第 4 表　年次別一揆・騒擾など発生件数グラフ …… 22

Ⅰ　序　説

1　調査に至る経緯

長嶺川田遺跡と長嶺江添の塚は、柏崎市西山町長嶺に所在する。柏崎市西山町は柏崎平野の北部に位置し、区域の中央を鯖石川の支流である別山川が北北東から南南西へ貫流してその両岸に肥沃な沖積地帯が形成され、ここに水田地帯が広がっている。長嶺地区はその右岸に位置し、その西側には日本海への道を隔てるように西山丘陵が横たわっている。ここで、新潟県を事業主体とする経営体育成基盤整備事業長嶺地区が計画された。市教育委員会は、事業を担当する新潟県柏崎地域振興局農業振興部農村整備課と埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて平成 26（2014）年度から協議を開始した。当時は事業予定地内で周知化されている埋蔵文化財包蔵地は長嶺前田遺跡だけであった。しかし、事業対象地が広大なこと、長嶺地区では広範囲を対象とした分布調査や試掘調査を行ったことがないことから、事前に遺跡の有無を確認することとした。平成 28（2016）年 4 月に事業予定地全域を対象に分布調査を行って、遺物の散布範囲を確認し、この時に長嶺江添の塚の存在を把握した。また、補給ポンプ場の建設では用水池のための大規模な掘削工事を予定しており遺跡の有無を早期に確認する必要があった。そこで、同年 4 月に同予定地で試掘調査を実施し、長嶺川田遺跡を発見した［柏崎市教委 2017］。続いて、同年 10 月、当地域の稲刈りが完了するのを待ち、事業予定地全体を対象とした試掘・確認調査を行った。この調査で、長嶺前田遺跡と長嶺川田遺跡の範囲を確認し、また、長嶺江添遺跡と長嶺川田北遺跡を新たに発見した［柏崎市教委前掲］。

試掘・確認調査の結果を事業主体者へ提示し、これを基にほ場整備の設計が行われた。事前に遺跡の分布範囲や遺物包含層までの深度を把握できたため、面整備を行う大部分で遺跡は現状保存されることとなった。補給ポンプ場の貯水池、用水のパイプライン埋設部分、長嶺江添の塚については掘削及び削平を免れることはできなかったが、パイプライン埋設部は掘削幅が狭小なため、遺跡の取扱いは工事立ち合いとした。長嶺川田遺跡における貯水池の掘削と長嶺江添の塚における面整備のための削平は不可避となり、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。本発掘調査の時期は工事の進捗状況に合わせて実施することとし、平成 30（2018）年度の稲刈り後に行うこととなった。なお、長嶺川田遺跡について、前回の試掘調査成果の範囲が狭小であったため、本発掘調査の作業量の算出のための確認調査を平成 29（2017）年 10 月 19 日に行った［柏崎市教委 2018］。

各遺跡に対する文化財保護法に係る通知等は、第 94 条の通知を長嶺川田遺跡が平成 30 年 5 月 11 日付け柏振農 137 号、長嶺江添の塚が平成 30 年 5 月 11 日付け柏振農第 138 号で新潟県柏崎地域振興局長から新潟県教育委員会教育長へ提出した。また、第 99 条の通知を、長嶺川田遺跡は平成 30 年 8 月 29 日付け博第 567 号、長嶺江添の塚が平成 30 年 8 月 29 日付け博第 568 号で柏崎市教育委員会教育長から新潟県教育委員会教育長へ提出した。

2　発掘調査の経過

平成 30（2018）年 8 月 8 日に柏崎市と藤村クレスト株式会社本社営業部柏崎営業所が長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査業務委託契約を締結した。21 日に工程等の打ち合わせを埋蔵文化財事務所において行った。調査区周辺が水田のため、稲刈り終了後に表土剥ぎを実施できるよう事前準備を進めることなど、詳細な協議を行った。翌 22 日に町内会長及び近隣住民へ挨拶と調査の説明を行った。9 月 21 日～26 日にかけて、現場仮設物の搬入など、調査を実施するにあたっての事前準備を行った。26 日に調査区の現況写真を撮影し、ほ場整備計画図をもとに、調査区の設定を行った。現場業務を 10 月 4 日から 12 月 20 日までの期間において実施した。調査面積は長嶺川田遺跡が 508㎡、長嶺江添の塚が 104.9㎡である。

長嶺川田遺跡は、10 月 4 日から 9 日まで調査区の南東からバックホウにより表土剥ぎを実施した。9 日から作業員による開渠掘削、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削などの作業を開始した。12 月 3 日の午前に空中写真撮影を行い、その後、道具などを撤収し、調査を終了した。3 日の午後より調査区の埋め戻しを開始し、7 日に終了した。10 日に重機・機械類を搬出した。11 日～ 18 日にかけて敷鉄板を撤去した。20 日に現場仮設物の撤去を行い、現場業務を終了した。

長嶺江添の塚は、石塔移設の際に破損する可能性があったため、9 月 27 日に現況写真の撮影・測量、石塔の拓本採取などを行った。発掘調査は 11 月 9 日に開始した。調査では、近世陶磁器を主体とする遺物を少量検出し、12 月 11 日に調査を終了し、12 日に機材の撤収を行った。

基礎整理作業は、発掘作業と並行して現場事務所にて写真整理、遺物の洗浄、注記等を行い、調査終了後に図面編集、遺構観察表の作成、遺物の接合等の作業を行った。

3　調査体制

平成 30（2018）年度の現場作業から基礎整理作業を経て、令和元（2019）年度の整理作業・報告書刊行に至るまでの調査体制は次の通りである。

平成30(2018)年度	現場作業・基礎整理作業
調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 本間 敏博
所管	柏崎市教育委員会 博物館（担当：埋蔵文化財係）
総括	近藤 拓郎（教育部長）
	高橋 達也（博物館長）
監理	小池 久明（館長代理兼埋蔵文化財係長）
庶務	髙野 智佳（非常勤職員）
監督員	中島 義人（主任・学芸員）
調査組織	藤村ヒューム管株式会社 本社営業部 柏崎営業所（担当：埋蔵文化財調査部）
調査担当	長嶺川田遺跡：長谷川 知美（調査員）
	長嶺江添の塚：継　　実（主任調査員）
調査員	岡本 郁栄（調査員）
土木作業管理者	小見　一英
補助員	梅村 将盛、板谷 隆弘、春日 雅美、佐藤 稜斗、横田 喜代美、南波 章子、桒原 圭子
令和元(2019)年度	**整理作業・報告書作成**
調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 近藤 喜祐
所管	柏崎市教育委員会 博物館（担当：埋蔵文化財係）
総括	近藤 拓郎（教育部長）
	小黒 利明（博物館長）
監理	小池 久明（館長代理兼埋蔵文化財係長）
庶務	髙野 智佳（非常勤職員）
監督員	中島 義人（主任・学芸員）
調査組織	藤村クレスト株式会社 本社営業部 柏崎営業所（担当：埋蔵文化財調査部）
管理技術者	松原 和浩（次長）
調査担当	長嶺川田遺跡：長谷川 知美（調査員）、丹　俊詞（調査係長）
	長嶺江添の塚：継　　実（主任調査員）
調査員	春日 雅美、板谷 隆弘、梅村 将盛（調査員）

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1　遺跡の位置と地理的環境

1）柏崎平野概観

柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置する人口約８万３千人（令和元（2019）年 10 月現在）の地方都市で、地域区分では中越に属している。一般的に中越地方と呼ばれる地域は、魚沼郡域となる信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める南部と、長岡市などが所在する信濃川中流域から柏崎平野にかけての北部に大別することが可能である。

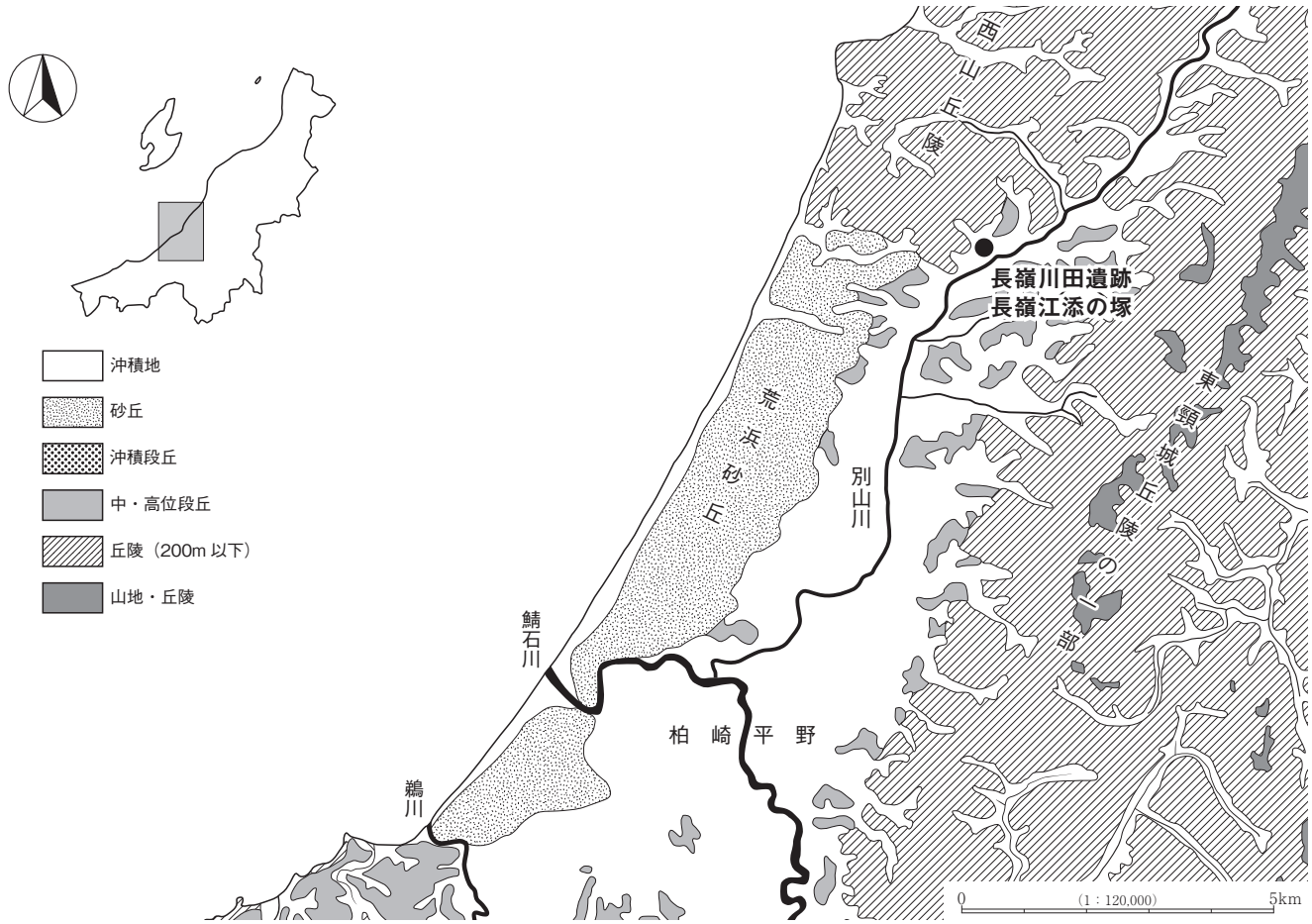
柏崎平野は、鯖石川と鵜川により形成された臨海沖積平野であり、北北東 - 南南西方向に幅約 7km、長さ約 18km にわたる。各河川は個々に独立した水系を持っており、信濃川水系により形成された越後平野や、関川水系により形成された頸城平野とは、丘陵や山塊による分水嶺によって隔され、一つの独立した平野を形成している。また、西山町を縦断する別山川は最終的に鯖石川に合流するが、約 17㎞の間で独自の水系をもつととらえることができる。

柏崎平野一帯は、丘陵地を北流する鵜川・鯖石川によって、東部・中央部・西部に３分され、それぞれ八石山・黒姫山・米山を頂点とする。東部は、北東方向の背斜軸に沿って、丘陵が北から並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。中央部は黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯は広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がっている。西部は米山を頂点とした傾斜の強い山塊で、現在も隆起を続けているとされており［市史編さん委員会 1990］、これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸まで達して米山海岸を形成する。米山海岸の沿岸部は段丘による断崖が顕著で、沖積地は少なく、海辺は漂石海岸で、砂浜もほとんど見られないことが特徴である。米山海岸とは対照的に、柏崎平野の北西部は海岸に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわっており、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は砂丘後背地として湿地性が強く、鵜川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

柏崎平野北部には、東に東頸城丘陵、西の海岸側に西山丘陵が位置する。両丘陵は褶曲構造が発達したもので、この褶曲構造は石油鉱床の集積に適し、その背斜軸に沿って吉井・西山等の油田とガス田（中央油帯）を形成する要因のひとつとなった［市史編さん委員会 1990］。両丘陵は、柏崎市と三島郡の境付近で間隔を狭め、分水嶺を形成する。この分水嶺より、北東に向かって信濃川水系の島崎川、南西に向かって鯖石川水系の別山川が流れる。柏崎平野を流れる鵜川、鯖石川、別山川とこれらの支流は、丘陵地帯を浸食して、各河川の上流域で開析谷を発達させており、沖積面と丘陵の境は複雑な樹枝状をしている。

2）別山川流域と遺跡周辺の地形

別山川流域は、２つの丘陵地帯とその間にある狭隘な沖積地からなる。別山川は延長 17.4km の２級河川で、鯖石川の最大の支流である。柏崎市と三島郡の境付近の分水嶺より始まり、鎌田川や坂田川、妙法寺川等の支流を合わせて、柏崎市上原付近で鯖石川に合流する。流域には、縄文時代後期以降に堆積した沖積層が広がり、ほとんどを後背湿地が占めている。そのため、自然堤防の発達は顕著ではない。



第 1 図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚の位置と柏崎の地形

流域の区分は定まっておらず、ここでは便宜的に旧西山町域を上流域、刈羽村域を中流域、鯖石川との合流点からの旧柏崎市域を下流域とする。上流域では、中位段丘などが河川の浸食を受け樹枝状をしているが、中流域ではやがて独立した小丘陵となり、海岸沿いが砂丘に変化する。下流域まで行くと低地が広がる。

長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚は、別山川右岸の二田小学校の東側の水田地帯に立地する。遺跡の周辺は、別山川流域に形成された狭小な沖積地で、随所に独立した微高地や小丘陵が点在する。北側には、水田を挟んで西山丘陵があり、南側に別山川が東北東から南南西に向かって流れている。現在は直線的な流路になっているが、河川改修前は東側から南側にかけて大きく蛇行していたため、大雨の際には幾度も被害を受けたとされる。そのため、水田にある塚に治水を祈願する民話も残っている［西山町 2001］。さらに元禄 13 年（1700 年）ごろの干ばつや水害によって甚大な被害が出ており、農業用のため池を作り神社を建立した記録が残っている［西山町誌編纂委員会 1963］。

2　遺跡周辺の歴史的環境

1）古墳時代

長嶺地区周辺の古墳時代の遺跡の分布は、弥生時代後期の流れを受け継ぎ、段丘上や尾根等の高台に立地するものが残る。野崎遺跡（18）や坪之内遺跡（16）がその例であるが、一方で、沖積地にも遺跡が立地する例も見受けられる。別山川左岸では、支流の二田川流域の二田沖遺跡（9）で後期の遺物が一

定量出土している。坂田川流域では、右岸側の独立した丘陵の麓に町口遺跡（13）があり、左岸には坂田遺跡（14）がある。上澤田遺跡（15）では、北側の調査区より、古墳時代の居住域が確認されている。町口遺跡では前期と後期の遺物が確認され、坂田仲沢遺跡（12）では中期の遺物が確認されている。妙法寺川流域の宮ノ前遺跡（23）と畠田遺跡（22）は出土した遺物の状況から、一連する集落遺跡と考えられる。別山川右岸では、西山丘陵の支尾根の麓に長嶺前田遺跡（5）がある。前期を中心とした遺構・遺物が確認されており、周溝を伴う建物と建物を囲むように大量の土器が廃棄されていた。その他、後期の遺物も一定量確認されている。

2）古　代

越後国を含む古代北陸道の諸国は、それまでの越国が分割されて成立したが、それは持統 4（690）年の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている［坂井 1983］。成立当初の越後国とは現在の阿賀野川以北の地であり、柏崎市域等は越中国に属していた。現在のような越後国の国域は、大宝 2（702）年に越中国の 4 郡（蒲原・古志・魚沼・頸城）が越後国へ編入され［米沢 1976］、和銅 5（712）年に出羽国が分置されて確定されることとなった。

奈良時代の柏崎市・刈羽村域は、柏崎市西部の旧頸城郡域や魚沼郡域であった旧刈羽郡小国町域（現長岡市）などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡に属していた。当時の古志郡は、長岡市（旧三島郡和島村）の八幡林遺跡や下ノ西遺跡付近に、郡衙や大家駅等の中枢施設が所在したものと推定されている。その後、柏崎平野一帯は 9 世紀前葉に三嶋郡として分置・独立したとされている［米沢 1980］。ただし、この地域と柏崎平野とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的な隔たりがみられる。三嶋郡の分郡以前からも分割されて郡務が行われており、郡の大領と少領がそれぞれの地域を専当的に担当していたとする説もある［相沢 1998］。なお、三嶋郡の中心は箕輪遺跡（枇杷島）付近と考えられる。「上殿」と記された墨書土器、「駅家村」と記された木簡や黒色漆塗りの鐙などが出土しており、近隣に三嶋郡衙や三嶋駅が存在した可能性が指摘され、郡衙的施設と駅家は近接していたと考えられている［新潟県教委ほか 2015］。

三嶋郡内の郷としては、承平年間（931 ～ 938 年）成立の『倭名類聚鈔』に、「三嶋」・「高家」・「多岐」の 3 郷が記されている。また、延長 5（927）年に完成した『延喜式』には、兵部省の諸国駅伝馬に北陸道の越後国駅馬のうち三嶋郡内に比定されるものとして「三嶋」と「多太」がある。これら 2 史料に記された地名や記載順あるいは式内社などの分布からすれば、三嶋駅が三嶋郷に、多太駅は別山川流域の多岐郷内に推定され、多多神社の名称から曾地峠の麓に推定されている。しかし、のちの荘園分布などを参考とすれば、鵜川下流域に三嶋郷、鯖石川中流域と長鳥川流域に高家郷、別山川中上流域に多岐郷をおおまかに想定できる。また、別山川上中流域で古代の遺跡が数多く確認されていることや三嶋駅と多太駅、大家駅の比定地との距離を考えると現在の推定地よりやや上流についても検討する必要があると考える。三嶋駅と大家駅の中間地点には、二田物部神社（柏崎市西山町二田）が存在し、三嶋郡内の式内社として六座が記されているうちの一つである物部神社に比定されている。そこから南西に古墳時代から中世にかけての遺跡が集中している等のことから、この周辺に駅があった可能性がある。

柏崎平野で確認されている古代の遺跡の多くは平安時代のものである。別山川流域の諸遺跡では古墳時代中・後期の遺跡が複合している例があるものの、奈良時代の遺跡は発見例が少ない。奈良時代の遺構・遺物が確認されているのは箕輪遺跡（枇杷島）［新潟県教委ほか 2015］、音無瀬遺跡（北条）［柏崎市教委 2012・同 2013］、萱場遺跡（吉井）［柏崎市教委 1985、同 1990］、戸口遺跡（吉井）［柏崎市教

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	長嶺川田遺跡	古墳・平安・中世	10	外前田遺跡	平安・中世	19	大割遺跡	弥生・古墳・平安
2	長嶺江添の塚	近世	11	マイグリ遺跡	古墳	20	番ヶ表遺跡	不明
3	長嶺川田北遺跡	平安	12	坂田仲沢遺跡	弥生・古墳・古代・中世	21	城ヶ崎遺跡	平安
4	長嶺江添遺跡	平安	13	町口遺跡	古墳・古代・中世	22	畠田遺跡	古墳・平安
5	長嶺前田遺跡	古墳・古代・中世	14	坂田遺跡	弥生・平安・中世	23	宮ノ前遺跡	古墳・平安
6	黒部古屋敷	古代	15	上澤田遺跡	平安・中世	24	妙法寺袖浦城跡	不明
7	木ノ下遺跡	平安	16	坪之内遺跡	縄文			
8	扇田遺跡	古墳・古代・中世	17	五日市前田遺跡	古代・平安			
9	二田沖遺跡	古墳	18	野崎遺跡	縄文・古墳・平安			

第２図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚と周辺の遺跡分布図

委 1990］、刈羽大平遺跡［柏崎市教委 1985］のほか、後述の製鉄遺跡などが知られている程度である。9 世紀になると柏崎平野でも河川流域に発達した自然堤防などに集落遺跡が展開するようになるが、遺跡数の増加率は同じ古志郡であった旧和島村・出雲崎町周辺や八丁潟周辺よりも高い［新潟県教委ほか 2015］。このほか、鵜川流域の藤橋・軽井川・堀付近の丘陵では、軽井川南遺跡群・藤橋東遺跡群といった製鉄遺跡が展開する。最古の製鉄遺構は、下ヶ久保Ｄ遺跡の長方形箱型炉で、8 世紀後半である［柏崎市教委 2010］。

3）中　世

『吾妻鏡』文治 2（1186）年 3 月 12 日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として、柏崎平野南部に位置する宇河（鵜河）荘、佐橋（鯖石）荘、比角荘の 3 つの荘園が記されている。これらは寄進地系荘園として 11 世紀末から 12 世紀中葉には成立したと考えられる［荻野 1983］。

一方で、柏崎平野北部の別山川流域には、荘域の拡大や荘園が形成された様子は見受けられず、郷や保が点在していた［柏崎市 1990］。野崎保・神田保・赤田保・原田保・武町保・吉井保・埴入保等の国衙領が点在していたとみられるが、詳細は不明である。

野崎保は柏崎市西山町五日市周辺と考えられるが、後世の天和 3（1683）年の『刈羽郡寺尾村検地帳』に野崎保という名称が記されている以外、詳細は不明である。その他、神田保は天正 8（1580）年頃の『毛利安田氏所領注文』に「神田保惣領分　神余方」と記され、また、『本領之日記』に「かう田　かなまり方　知行」とあり、柏崎市西山町甲田周辺が比定されている。そして、赤田保は刈羽村赤田地区周辺、原田保は刈羽村花田地区周辺、武町保は刈羽村上高町・下高町周辺、吉井保は柏崎市大字吉井周辺、そして埴入保は柏崎市大字宮川周辺がそれぞれ比定されている［市史編さん委員会 1990］。以降は、室町時代に赤田保を支配していた斎藤氏の記録や、康安 2（1362）年に原田保の一部が藤原為顕から原田正寿寺に寄進したことなどが明らかになっている［市史編さん委員会 1990］。

柏崎平野のこうした荘園や郷、保は古代では三嶋郡に属していたが、正平 12（1357）年の鎌倉二階堂覚音寺領文書では「苅羽郡」となっている［西山町誌編纂委員会 1963］。以降は苅羽郡と称され、江戸時代以降に現在の「刈羽郡」が用いられるようになる。

4）長嶺地区周辺の古代・中世の遺跡

本遺跡周辺では、古墳時代以降の遺跡は別山川左岸域に集中する。宮ノ前遺跡では、平安時代の大型の掘立柱建物を中心に井戸・土坑・溝等が確認された。この掘立柱建物は同一箇所で建て替えが行われ、これと軸を合わせた建物も複数確認された。遺物では灰釉陶器が多量に出土しており、これらの成果から、開発領主層に関連する集落と考えられる。少量ではあるが飛鳥・奈良時代の遺物が出土し、中世では 11 世紀～ 16 世紀ごろまでの遺構や遺物が出土しており、特に 13 世紀後半～ 14 世紀のものが多く確認できる。坂田遺跡の調査においても、平安時代の須恵器や土師器、掘立柱建物の可能性がある柱穴や、耕地と考えられる溝状遺構が検出されている。植物珪酸体が非常に多く確認されていることから、水田の存在が指摘されている。町口遺跡では、少数ではあるが飛鳥・奈良時代の遺物が出土し、中世の堀状遺構が検出され、屋敷地を囲む堀と推測される。遺物では 13 世紀～ 16 世紀ごろの遺物が出土しており、土器、国産陶磁器、木製品、漆器、輸入陶磁器や鍛冶関連遺物、鉄製品、石製品など多種に渡る。上澤田遺跡では、南側の調査区から中世の鉄関連の遺物を伴う居住域が確認されている。

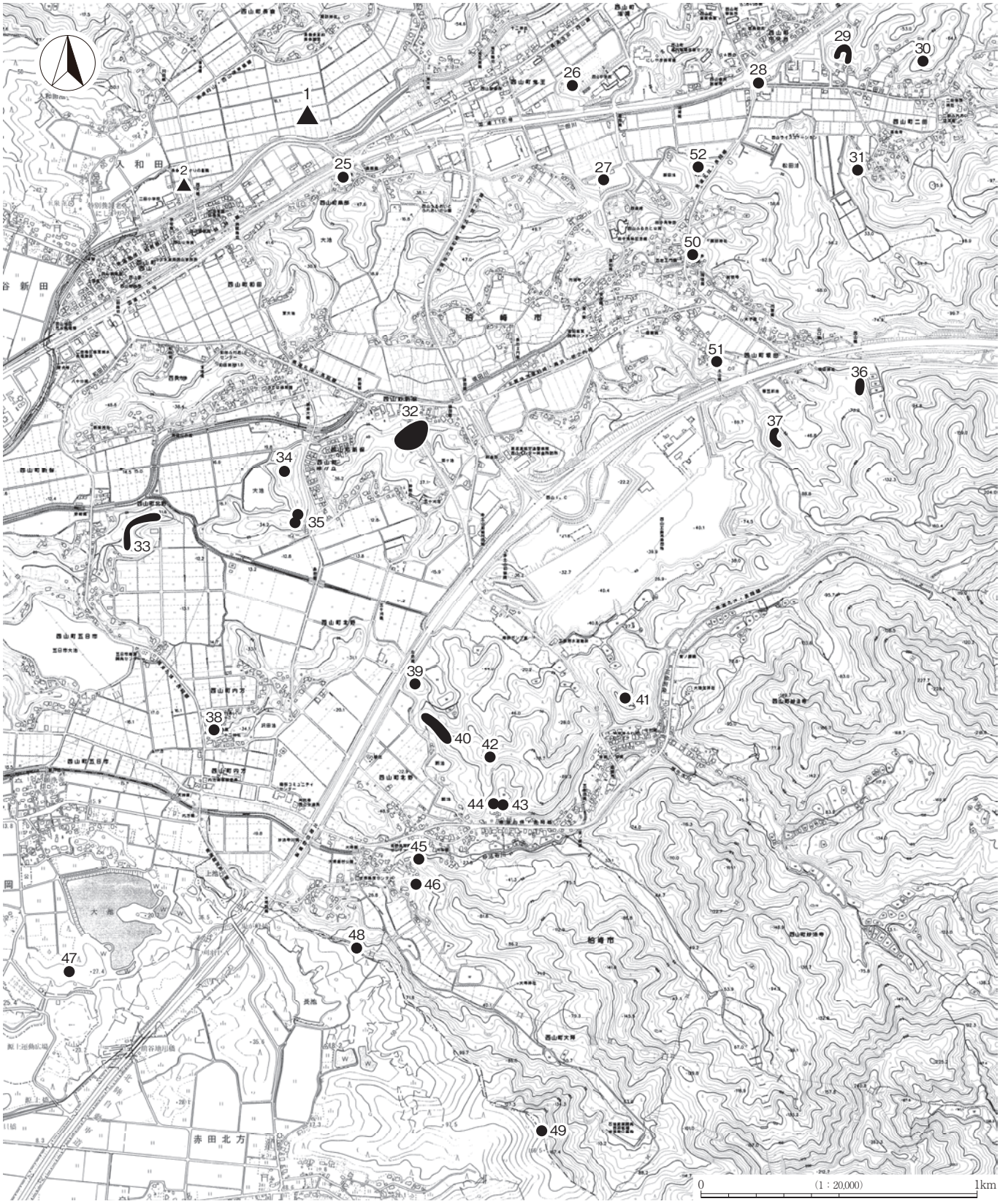
5）長嶺江添の塚周辺の塚

本塚周辺で確認されている塚の多くは内陸側に分布しており、沿岸部では椎谷から石地にかけての丘陵上に少数が確認されているに過ぎない。長嶺地区で確認されているのは本塚 1 基のみである。第 3 図に示したように、塚の大半は丘陵尾根や独立段丘上に立地しており、平地で確認されているのは膝附の塚（28）1 基のみである。

柏崎市内における塚については、1980 ～ 90 年代における品田高志氏の精力的な研究活動によって［品田 1989・1990・1991・1993］丘陵の尾根筋や道路沿いに分布することが判明しており、本塚周辺でもこれに即した分布傾向を示す。すなわち、国道 116 号線（北国街道）沿い（2・25 ～ 30）、県道礼拝 - 長岡線が走る妙法寺川流域（38 ～ 46）、県道柏崎 - 高浜 - 堀之内線が走る坂田川流域（32 ～ 37）などに分布の集中がみられる。また、この範囲は古墳時代～中世の遺跡が濃密に分布する地域でもあり、二田地区には延喜式内社である二田物部神社も存在するなど古くから地域の拠点的な場所であったものとみられる。

次に群構成についてみてみると、分布図に示した塚の大半が複数の塚で構成されており、北野の塚群（40）などは 15 基もの塚が群を成している。一方、単独塚は本塚（2）のほかに膝附の塚（28）、車田の塚（31）、新保向山の塚（34）、妙法寺の大塚（41）、谷地ノ入の塚（45）、西小路の塚（46）、脇之多の塚（48）の 8 か所があり、45・46・48 は比較的狭い範囲にまとまっている。このように、分布や群構成といった属性はおおよそ明らかになっているものの、性格や時期といった塚の根源的な属性については発掘調査の機会が少なく、不明なものが大半を占める。

柏崎市域の塚や石塔については、民俗学の見地から柏崎市立博物館の渡邉三四一氏が精力的に研究活動を行っており、山岳信仰塔には米山塔・妙高山塔のほかに出羽三山塔・高尾山塔・富士講碑・御嶽山塔・苗場山塔・複数の山岳名を刻した山岳信仰塔などがあることが分布調査で明らかとなっている［柏崎市立博物館 1991］。数の上で圧倒的に多いのは米山塔の 38 基で、次いで出羽三山塔 7 基、富士講碑 5 基、妙高山塔 4 基、ほか各 1 基となっている（第 2 表）。山岳信仰塔の分布は、曽地丘陵の長鳥川流域と鯖石川・別山川に面した側、鵜川河口部にまとまった分布を示すほかは点的である。西山町・高柳町域については分布調査が柏崎市と合併する前に実施されたため未調査であるが、西山町域については今回調査した 2 基のほかに、別山川流域の坂田地区・別山地区、沿岸部の石地～大崎地区の 3 か所を中心に出羽三山塔 3 基・米山塔 2 基・富士講碑 2 基・妙高山塔 1 基、柏崎市域では確認されていない栃木県古峯ヶ原（古峯神社）を信仰対象とした講碑 2 基などの存在が知られている。このほか、西山町には地蔵像の形態で京都の愛宕山信仰に関わるもの 2 体が存在する［西山町教委 1988、新潟県教委 1993］。



No.	遺　跡　名	時　　期	No.	遺　跡　名	時　　期	No.	遺　跡　名	時　　期
1	長嶺江添の塚	近世	33	小橋の塚群1～8号塚	不明	43	光徳寺の宝篋印塔群	不明
2	長嶺川田	古墳・平安・中世	34	新保向山の塚	不明	44	光徳寺の塚群1～3号塚	不明
25	狐山の塚群1・3号塚	不明	35	桑田の塚群1・2号塚	不明	45	谷地ノ入の塚	不明
26	礼拝の塚1～6号塚	不明	36	善五郎の塚群1～7号塚	不明	46	西小路の塚	不明
27	丑田の塚群1・2号塚	不明	37	石甲塚群1～3号塚	不明	47	向山の塚群1～3号塚	不明
28	膝附の塚	不明	38	内方神社の塚群1・2号塚	不明	48	脇之多の塚	不明
29	六百刈の塚群1～9号塚	不明	39	カヤ場の塚群1～4号塚	不明	49	大三十刈の塚群1・2号塚	不明
30	西ヶ入の塚群1・2号塚	不明	40	北野の塚群1～15号塚	不明	50	米山供養塔・妙高山供養塔	近世
31	車田の塚	不明	41	妙法寺の大塚	不明	51	古峯ヶ原講碑	近世
32	坪之内の塚群1～11号塚	不明	42	峰の塚群1～3号塚	不明	52	富士講碑	近世

第３図　長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚と周辺の塚（石塔）分布図

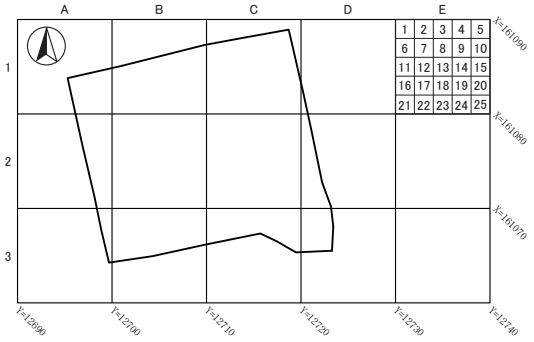
Ⅲ　長嶺川田遺跡

1　調査概要

1）調査区とグリッドの設定

今回の調査は、経営体育成基盤整備事業の補給ポンプ場建設に伴う掘削により失われる範囲を記録保存することを目的として発掘調査を行った。南北方向に最大約 23m、東西に約 23m、面積約 508㎡を調査区とした。なお､確認調査の結果から調査面は 1 面とした。

グリッドは大小 2 種類を用いた（第 4 図）。大グリッドは、北西隅を基準とする 10m方眼を 1 グリッドとし、南北方向に算用数字、東西方向にはアルファベットをあて、両者を組み合わせて「A1」などと表した。小グリッドは、大グリッドを 2m方眼で 25 等分し、1 ～ 25 の算用数字をあてた。北西隅を 1、南東隅を 25 とし、大グリッドの後に小グリッドをつけて「B2-15」などとした。



第 4 図　調査区グリッド設定図（1：800）

なお、座標値は世界測地系（測地成果 2011）を使用し、測量に必要な基準杭を 2 カ所に設置した。

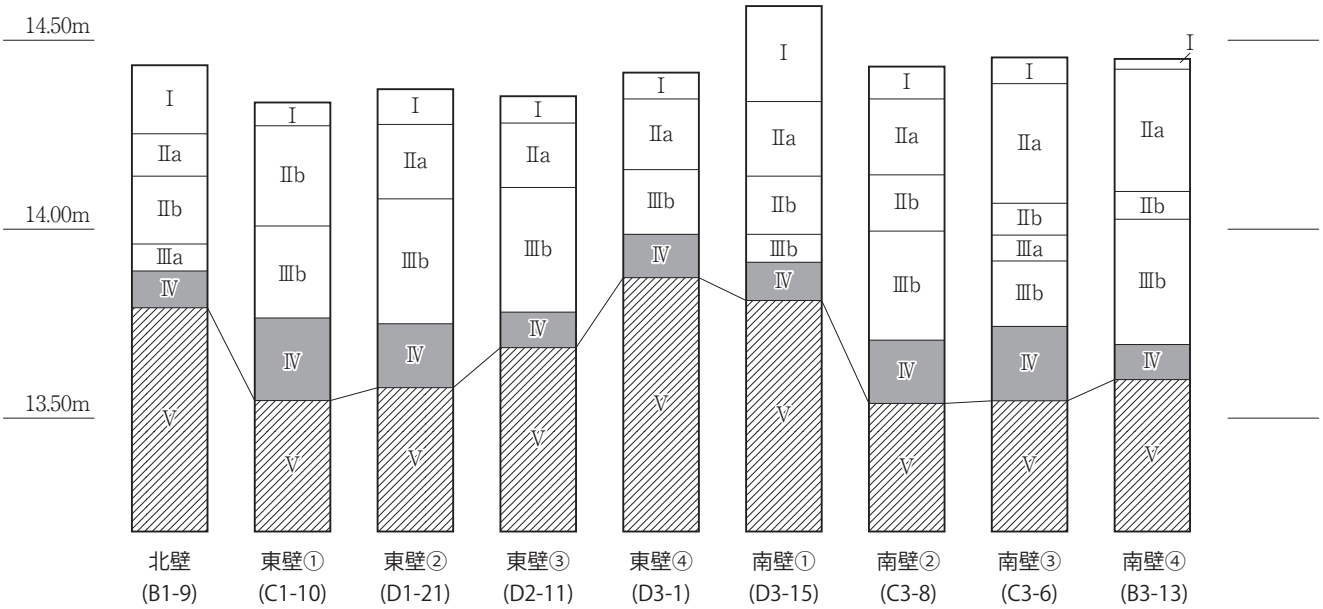
2）基本層序

基本土層は、調査区の東壁、南壁の計 2 カ所で観察し土層断面図（図版 5）を作成し、それをもとに柱状図を作成した（第 5 図）。堆積土は基盤層（Ⅴ層）を含め 5 層で構成される。Ⅰ層は現代の畑の耕作土層である。Ⅱ層は現代の畑に転用される以前の現代の水田であり、2 層に細分することができる。Ⅱａ層は水田の耕作土、Ⅱｂ層は水田の床土である。Ⅲ層は、昭和 30 年代のほ場整備以前の水田耕作土と考えられる。2 層に細分することができ、Ⅲａ層は近代以前の水田耕作土、Ⅲｂ層は近代以前の水田床土である。Ⅳ層は古代（平安時代）・中世以降の包含層で、土師器、須恵器、近世陶磁器の破片などを確認した。Ⅴ層は古代以前の基盤層である。

3）調査の方法

ａ．表土掘削

調査区は現代の耕作土が約 0.5 mの厚みで堆積しており、作業の効率化を図るため、バケット容量 0.45 ㎥のバックホウ 1 台を用いて調査区南東端より掘削を行った。排土は 6t 積キャタピラー式運搬車（クローラーダンプ）を用いて農道を挟んで隣接する水田にシートを敷いた上に置いた。掘削は調査担当の指示の下に行い、遺物が出土した場合は、出土位置を小グリッドで記録し適時取り上げた。調査区は沖積地で傾斜があり、低地では常時湧水があるため、表土掘削後に開渠掘削を行った。調査区の隅に水中ポンプを設置するための枡を掘り、水中ポンプを設置した。



Ⅰ 表土。畑地化した際の耕作土。
Ⅱa 灰色粘質土(N6/) 粘性があり、しまりがある。
Ⅱb 灰色粘質土(N6/) 粘性があり、しまりがある。酸化が明瞭である。
Ⅲa 灰色粘質土(N6/) 粘性があり、しまりがある。
Ⅲb 灰色粘質土(N6/) 粘性があり、しまりがある。酸化が明瞭である。
Ⅳ 褐灰色粘土(10YR4/1) 粘性があり、しまりが弱い。1mmの炭化物を微量含む。
Ⅴ 明青灰色粘質土(5B7/1) 粘性があり、しまりがある。炭化物を中量含む。

Ⅰ層 耕作土
Ⅱ層 現代の水田
Ⅲ層 近代水田（昭和 30 年代ほ場整備時の水田）
Ⅳ層 古代（平安時代）・中世以降の包含層
Ⅴ層 地山

第５図 土層柱状図

b．遺構検出

遺構検出は基盤層であるⅤ層上面で行った。柔く検出面を傷める可能性が高いため、出来る限りコンパネを敷いた上で作業を行い、遺構の検出を行った。作業は表土掘削と同様に南東端から行い、遺構検出が終了した部分から、遺構の略測分布図を作成した。検出した遺構はブルーシートで覆い、検出面の乾燥と風雨等による確認面の汚れにより検出状況が分からなくなることを防いだ。

c．遺構発掘

遺構は半截して覆土の状況を観察した。遺構はすべて遺構カードに略図、土層等を記入してから覆土の写真撮影を行い、記録が終了したのちに完掘し、完掘状況の写真撮影を行った。半截方向は基本的に長軸方向としたが、柱痕や遺物を伴う場合は、埋設状況を最も有効に記録できる方向とした。土層断面や遺物の出土状況等の遺構図面は、調査員の指示により、補助員が手実測で記録した。平面図や断面図計測ポイントなどの測量は、トータルステーション（TOPCON LN-100）と地形図作成システム TraceMasterMultiX（株式会社ピー・エス・トラスト）を用いて調査員の指示のもと、補助員が行った。

d．写真撮影

現場業務における写真撮影は、調査員による手持ち、三脚撮影とラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。調査員による撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルム（フジカラー PROVIA 100F）、デジタル一眼レフカメラ（NIKON D610 2,426 万画素）を用いた。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影では、35㎜カラーリバーサルフィルム（フジカラー PROVIA 100F）、デジタル一眼レフカメ

ラ（CANON EOS Kiss X3 1,510 万画素）などを用いた。なお、空中写真撮影は、受託業者の藤村クレスト株式会社がJ・T空撮と株式会社アイテックに再委託して行った。

4）整理作業の方法

a．基礎整理

具体的な作業としては、出土遺物の洗浄、接合・補強復元、図面や遺構カードの整理と校正、写真整理、遺構観察表、各種台帳類の作成などを行った。作業は現場業務中から開始し、荒天時など外作業ができない時に作業を進めた。遺物の注記にあたっては遺跡名を「ナガカワ」と表記し、遺構やグリッド、層位といった位置情報を続けて記入した。接合にはセメダインCを使用し、必要な部位にはバイサム（有限会社新成田総合社）で補強した。図面や写真は番号と撮影タイトルなどを付けてケースやアルバムに収納し、あわせて台帳を作成した。

b. 報告書作成

報告書の作成は、令和元（2019）年度に長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査報告書作成業務委託として藤村クレスト株式会社本社営業部柏崎営業所が受託し、同社の埋蔵文化財調査部の整理室で令和元（2019）年6月20日から令和2（2020）年1月31日まで作業を行った。作業内容は、遺構断面図のデジタルトレース、遺物写真撮影、遺構・遺物の図面図版作成と写真図版作成、遺物の観察及び観察表作成、遺構観察表作成、原稿執筆、挿図表作成、報告書の編集・校正などである。

なお、遺物写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（NIKON D610 2,426 万画素）を使用して個別に撮影した。デジタルトレース、図版、挿図の作成についてはAdobe Illustrator CC、写真の編集にはAdobe Photoshop CCを使用した。原稿執筆はMicrosoft Wordを使用し、挿表はMicrosoft Excelで作成したものをAdobe Illustrator CCで編集し作成した。

c. 遺物実測・トレース

遺物の実測・トレースは、柏崎市教育委員会埋蔵文化財事務所の職員が行った。

2　遺構

1）遺構の概要と記述方法

検出した遺構の総数は63基で、内訳は柱穴6基、ピット51基、土坑2基、溝3条、井戸1基である。柱穴の配列から、掘立柱建物1棟、柵列2列を復元した。ピットについては柱痕を伴うものを柱穴、伴わないものをピットと称した。A1グリッドを頂点とし、南東のD3グリッド方面に向かって標高が低くなっている。低地のCグリッドは常に湧水があり、Ⅴ層が還元化していた。遺構はⅤ層上面で検出した。遺構は標高の高い部分で確認でき、低いC1の東半分とC2～3グリッドでは確認できなかった。

遺構種別は略称を用い、掘立柱建物「SB」、柵列「SA」、柱穴・ピット「P」、土坑「SK」、井戸「SE」、溝「SD」とした。遺構番号はすべて通し番号とし、現場で付した番号をそのまま使用して遺構種別の後ろに付した。掘立柱建物は、これとは別に「1」から番号を付し、遺構種別と併せて「SB1」とし、柵列も「1」から番号を付し遺構種別と併せて「SA1」とした。なお、欠番になったものは欠番のままとした。本文及び遺構観察表の記載は、和泉A遺跡［新潟県教委ほか1999］、青田遺跡［新潟県教委ほか2004］の分類に準拠して表記を行った。なお、遺構の詳細や属性については遺構観察表（附表1）を参照されたい。

2）遺構各説（図版６・７）

ａ．掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ１　B2 グリッドに位置している。梁間１間×桁行２間の建物で、北から P26・28・27・30・64・33 の柱穴６基で構成される。桁行の柱間は西面が北から 0.82ｍ－ 1.47ｍ、東面が 1.05ｍ－ 1.4ｍ、梁間は北面 1.4ｍ、南面 1.3ｍを測る。平面形は長方形で、床面積は 3.43㎡である。桁行方位はＮ－ 37°－W、梁行方位はＮ－ 60°－Ｅを指す。SB1 を構成する柱穴の平面形は、直径 25 ～ 50㎝の円形及び楕円形、深度は確認面から 43 ～ 71㎝で、柱痕は確認できなかった。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

ｂ．柵列（ＳＡ）

覆土が類似した直線的に並ぶピットを２列復元した。SA1 と SA2 は軸方位、構成するピットの数、規模が類似する。

ＳＡ１　B1 グリッドに位置し、西から P21・19・18 の３基で構成される。方位はＮ－ 56°－Ｅを指す。柱間は西から 1.4ｍ－ 1.6ｍ、全長は 3ｍである。構成する柱穴は、平面形が直径 24 ～ 32㎝の円形、深度は確認面から 40 ～ 50㎝の台形状及びＵ字状である。柱痕は確認できなかった。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

ＳＡ２　B1・C1 グリッドに位置し、西から P36・20・39 の３基で構成される。方位はＮ－ 62°－Ｅを指す。柱間は西から 1.7ｍ－ 1.9ｍ、全長は 3.6ｍである。構成する柱穴は、平面形は直径 24 ～ 31cm の円形、深度は確認面から 50cm、P39 は浅く 35㎝である。断面形は台形状及びＵ字状で、柱痕は確認できなかった。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

ｃ．柱穴・ピット（Ｐ）

SB1、SA1、SA2 を構成する柱穴以外で、柱痕や木製品が確認でき柱穴と確認できたのは P1、9、16、30、41、43 の計６基である。確認できた柱痕の幅は 10 ～ 12cm である。ピットはＶ層上面で合計 51 基を確認し、遺構規模は直径 14 ～ 51cm、深度は確認面から５～ 63cm である。遺構の平面形の割合は、円形５割、楕円形３割、長方形と不整形２割である。柱穴・ピットは B1 ～ B2 グリッドに集中して検出したが、掘立柱建物等との関連性を窺えなかった。

ｄ．土坑（ＳＫ）

SK10　C1-11・12 グリッドに位置する。直径 82cm、深度 79cm で、平面形は円形、断面形は台形状である。覆土は暗青灰色土の単層である。１層から土師器の破片が出土しているが、摩耗が激しく、詳細な時期は不明である。

SK60　A1-25・A2-5・B1-16・21・B2-1 グリッドに位置する。最大幅 2.5ｍ、最大深度 0.4ｍで平面形は不整形、断面形は弧状である。覆土は１、２層が灰白色土、３層が青灰色土のレンズ状堆積である。遺物は床面で古墳時代中期の鉢（1）、甕（２～５）や土器の小片がまとまって多数出土している。SD54、55 と重複しているが、遺構の境が不鮮明であり新旧関係は不明である。

ｅ．井戸（ＳＥ）

SE47　D3-6 グリッドに位置する。直径 99cm、深度 91cm で、平面形は円形、断面形は台形状である。覆土はレンズ状堆積で砂が混じる。３～４層からは約２～ 5㎝の礫が出土した。遺物は珠洲の甕（57）、硯（58）、木製品（59、60）が出土した。

ｆ．溝（ＳＤ）

SD53 ～ 55　A1-25・A2-4・5 グリッドに位置し、調査区西壁からＮ－ 6°－Ｅ方向に伸びている。覆土は紫灰色土の単層である。SK60 と重複しているが、遺構の境が不鮮明であり新旧関係は不明である。

3　遺物

1）遺物の概要と記述方法

長嶺川田遺跡から出土した遺物の総量は、破片数で約 1600 点である。遺物包含層であるⅣ層と基盤層であるⅤ層から出土している。遺物の内容は、古墳時代中期の土師器、古代（平安時代）の土師器と須恵器、中世の珠洲、近世の肥前陶磁と瀬戸、時期不明の鉄製品、石製品、木製品である。遺構から出土した遺物は少なく、ほとんどが包含層から出土している。このうち、図化が可能な 66 点を掲載し、時代ごとに遺構出土のもの、遺物包含層から出土したものの順で述べる。個別の詳細な情報については遺物観察表（附表 2）に掲載した。

土器･陶磁器類の器種分類･年代観については、『新潟県の考古学』［新潟県考古学会 1995］、『箕輪遺跡』［新潟県教委ほか 2015］、『中世須恵器の研究』［吉岡 1994］、『肥前陶磁』［大橋 1989］など、既存の編年観に準拠した。

2）遺物各説

ａ．古墳時代の遺物（図版 8）

SK60　覆土から出土した土師器の鉢 1 点（1）、甕 4 点（2 ～ 5）の 5 点を図化した。いずれも古墳時代中期のものと考える。1 はほぼ完形で、身が浅い椀型の鉢である。焼成がやや不良であり、歪みが大きい。内弯して立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。調整は内外面とも摩耗が著しく不明である。2 は底部から胴部が残存しており、外面にはハケメ、内面にはヘラナデが施されている。胴部の一部にススが付着している。底径が約 3㎝の平底である。3 ～ 5 は口縁部が外側へ屈曲する「く字甕」で、端部が面取りされていないものである。3 の口縁部はやや厚みがあり、口縁端部は丸みを帯びている。摩耗が著しく調整は不明である。4 は口縁部の外側への屈曲が緩やかなものである。口縁部には内外面ともにナデが施されている。5 の調整は摩耗が著しく不鮮明であるが、口縁部は内外面ともにナデが施されている。

包 含 層　Ⅴ層から出土した土師器の坏の口縁部 2 点（6、7）、高坏の坏部 1 点（8）、脚部 1 点（9）の 4 点を図化した。6、7 の調整は摩耗が著しく不明である。6 はやや内弯して口縁部に至り、口縁端部は丸みを帯びる。7 は底部から直線的に外傾して口縁部に至り、口縁部は上方に傾き、口縁端部は丸みを帯びる。8、9 は高坏の脚部と受部であるが、小片で摩耗が著しく詳細は不明である。

ｂ．古代の遺物（図版 8・9）

P9　覆土の 1 層から出土した須恵器の有台坏 1 点（10）を図化した。口縁から体部が残存しており、胴部が直線的に外傾して口縁部に至り、口縁端部はやや丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施される。佐渡小泊窯産と考えられる。

包 含 層　包含層のⅣ層と、遺構確認の際にⅤ層上面より出土した 46 点の遺物を図化した。須恵器の甕（32、33）以外は、胎土がきめ細かく白色粒を含み、器面の凹凸が顕著で器壁が薄いため、佐渡小泊窯産と考えられる。

須恵器　大半は破片であるが、完形品を含め全体の器形が把握できる 24 点を図化した。

無台坏　口縁から底部にかけての 2 点（11、12）、口縁部 6 点（13 ～ 18）、底部 6 点（19 ～ 24）の 14 点を図化した。11 はほぼ完形品である。口径が 11.8㎝とやや小さく、口縁端部は丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施され、底面にはヘラ切りの後にナデが施されている。12 は口径が 12.4㎝でありやや大きい。口縁端部は丸みを帯び、内外面ともロクロナデが施され、底面にはヘラ切り痕がみられる。13、14 は口縁部の小片で、内外面ともロクロナデが施されている。15 ～ 18 は体部がおおむね直線的に開いて口縁部に至るもので、口縁端部は丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施されている。19 ～ 24 は無台坏の底部である。すべて内面にはロクロナデが施され、底面にはヘラ切り痕がみられる。19 ～ 22 はヘラ切りの後にナデが施されている。

有台坏　口縁部 2 点（25、26）を図化した。体部が直線的に外傾して口縁部に至り、口縁端部はやや丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施されている。

坏　蓋　坏蓋 4 点（27 ～ 30）を図化した。4 点とも調整は内外面ともにロクロナデが施され、27 はボタン状のつまみ部である。内外面ともにロクロナデが施されている。焼成がやや不良である。28、29 は全体的に甲盛状に丸みを帯びているものである。外面にはヘラケズリが施されている。28 の内面には墨が付着しており、転用硯と考えられる。30 は外面中央が窪み、屈曲して口縁部に至るものである。

盤　口縁から底部にかけての 1 点（31）を図化した。口径が 13.8㎝と大きく、器高が 2.0㎝と小さい。体部はやや内弯しながら外傾して口縁部に至り、口縁端部はやや膨らんで丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施され、底面にはヘラ切り痕が見られる。

甕　胴部 2 点（32、33）を図化した。32 は肩部が球状に張り出す甕である。32、33 ともに外面には平行叩き目が見られ、33 は平行叩き目の後にカキメが施されている。内面には同心円の当て具痕が見られる。

壺　胴部に把手を貼り付けている壺 1 点（34）を図化した。胴部と把手の一部しか残存していないため詳細は不明である。双耳壺や水注などの可能性もある。内外面ともにロクロナデが施され、把手部は直径約 2㎝の厚みのある把手を貼り付けており、ナデにより成形されている。外面の一部に自然釉が見られる。

土師器　大半は破片であるが、完形品を含め全体の器形が把握できる 22 点を図化した。

無台椀　完形品 1 点（35）、口縁部 2 点（36、37）、底部 4 点（38 ～ 41）の 7 点を図化した。35 は内面にロクロナデが施され、外面は体部から口縁部にロクロナデ、底部付近の胴部はロクロケズリが施されている。底部に回転糸切り痕がみられる。底部から内弯しながら立ち上がり、口縁端部は厚みがある。36 は底部から直線的に外傾して口縁部に至り、口縁部は上方に傾く。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。37 は底部から直線的に口縁部に至り、口縁端部は丸みを帯びる。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。38 ～ 41 は底部で、調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。40、41 の底面は不鮮明であるが回転糸切り痕が見られる。

甕　口縁部 3 点（42 ～ 44）、胴部 3 点（53 ～ 55）、底部 7 点（47 ～ 52、56）の 13 点を図化した。42、43 は口縁端部に平坦面を持ち内側に摘み上げられ、44 は外側にもつまみ出されているものである。43 は内外面ともにロクロナデが施されている。47 ～ 52 は平底の甕の底部と考えられ、52 には回転糸切り痕がみられる。53 ～ 55 は長胴甕の胴部片ですべて同一個体とみられる。外面に擬格子状の叩き目が見られる 56 は、丸底で、内面はヘラナデが施される。

鍋　口縁部２点（45、46）を図化した。いずれも口縁端部に平坦面をもつものである。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。

ｃ．中世の遺物（図版 10）

SE47　覆土の１層から出土したもので、壷１点（57）、硯１点（58）、木製品２点（59、60）の４点を図化した。57 は珠洲の壺である。口縁部は内外面ともにナデが施され、胴部外面は平行叩き目、内面には無文の当て具痕がみられる。口縁は外傾し、口縁端部は平坦面を持つ方頭である。58 は墨と考えられる黒い部分が確認できたことから硯と考える。硯の種類は不明である。59、60 は板状の木片で、断面から板目取りが確認できたが用途については不明である。

包 含 層　遺構確認の際にＶ層上面から出土した２点（61、62）を図化した。61 は珠洲の片口鉢の底部である。外面はロクロナデが施されている。内面には幅 3㎝あたり６条の卸目がみられる。底部は砂底である。62 は瀬戸の小皿の口縁部である。

ｄ．近世の遺物（図版 10）

東側壁面のⅡ層より出土した１点（63）を図化した。肥前陶磁の皿の底部である。見込部と高台に砂目積みの痕跡が確認できた。破片のため詳細な時期は不明だが、砂目積みが主体になる 17 世紀以降と考えられる。

ｅ．時期不明の遺物（図版 10）

P1 から出土した木製品１点（64）、包含層のⅣ層から出土した２点（65、66）、を図化した。64 は削り出し加工と考えられる。端部の片側は面取りされ、もう片方は折れたような形状である。そのため、柱を抜く途中で折れたのではないかと考えられる。65 は B3-3 グリッドから出土した。断面から削り出しと考えられ、形状から杭の一部と考えられる。66 は C1-19 グリッドから出土した。表面にガラス質の滓が付着し、表面には気泡が浮き出ているため、鍛冶滓と考える。

４　まとめ

1）遺構

柱穴・ピット・井戸・溝など計 63 基を検出し、掘立柱建物１棟（SB1）、柵列２列（SA1、SA2）を復元した。遺構から出土した遺物が少なく、小破片のものが多いため、時期を特定できるものが少ない。

SB1 は梁間１間×桁行２間、床面積は 3.43㎡の小型の掘立柱建物である。SB1 に伴う付帯施設などは確認できなかった。しかし、SA1・SA2 の軸方位が SB1 と同じであり、覆土も類似していることから関連性が考えられる。SB1 を構成する柱穴から遺物が出土していないため時期は不明であるが、今回の調査で出土した遺物の多くが古代のものであり、古墳時代や中世のものがほとんど出土していないことから、SB1 は古代の建物ではないかと考えられる。

SK60 は床面から古墳時代の遺物が出土している。他に古墳時代の遺物が出土した遺構は確認できなかったが、包含層からも古墳時代の遺物が出土している。周辺の別山川右岸域では約 1㎞上流に古墳時代前期と後期の遺構と遺物が確認できた長嶺前田遺跡が存在しており、この支尾根に囲まれたやや広い沖積地に古墳時代から中世の集落が存在していたと推測する。

2）遺物

遺構から出土したものは少なく、ほとんどがⅣ層の遺物包含層かⅤ層の遺構検出面から出土したものである。遺物の時期は古墳時代から近代と幅広く、その中で古代の遺物が大半を占める。SE47 のみ、珠洲の壺の口縁部が出土しており、13 世紀中頃～後半のⅢ期に比定した。

古代の遺物の主体は須恵器であり、大半が佐渡小泊窯産のものと考えられる。新潟県内の編年研究によれば、Ⅴ期は越後国内へ佐渡産須恵器が流入する時期で、Ⅵ期にはそれ以前からある在地系窯のものは減少する［春日 1999］。このことから、長嶺川田遺跡の時期はⅤ～Ⅵ期と考えられる。

また、近年では同じ柏崎平野にあって三嶋郡の中心に位置付けられている箕輪遺跡での土器編年案が提示されている［春日第Ⅶ章 1A 2015］。この編年案の 3 期は、須恵器技法を用いない土師器食膳具がほとんど確認できなくなり、食膳具の大半を須恵器が占めるようになる。そして須恵器はこれまで主体を占めていた高田平野に所在する須恵器窯跡群産に加え、佐渡小泊窯産が確認できるようになる。これらのことと器形等の特徴から、出土した須恵器や土師器は全体的に箕輪遺跡の須恵器の 3 期（新）～ 4 期（古）に相当する。箕輪遺跡 3 期はⅤ期に併行するが、Ⅴ期が 8 世紀末まで上がる可能性は低く、Ⅵ期は 9 世紀第 3 ～ 4 四半期を中心とする時期に位置付けられている。このことから、Ⅴ期は 9 世紀前半となり、3 期（新）はその後半段階となることから、長嶺川田遺跡の主体となる時期は 9 世紀中葉段階と捉えておきたい。

3）まとめ

出土遺物から、長嶺川田遺跡は古墳時代から断続的に集落が展開し、古代が主要な活動時期と考えられる。調査区の南東部分が低く傾斜し、ぬかるんだ状況で別山川へ向かい、遺構や遺物がほとんど確認できなくなることから、長嶺川田遺跡の調査範囲は集落の外縁部に位置していると考えられる。確認した遺構と遺物の分布状況や地理的条件として調査区の南側に別山川、北側に西山丘陵が位置していることから、調査区の北側や西側に古墳時代から古代にかけての集落の中心地があるのではないかと推測する。中世以降の遺物が希薄なのは、活動の中心地が別山川左岸の丘陵地帯に集中するためと考える。

別山川左岸の丘陵地帯は古墳時代から遺跡が集中しており、古代の開発領主層に関連する集落と考えられる宮ノ前遺跡、古代の耕地や水田の存在が指摘されている坂田遺跡、中世の屋敷地とみられる堀が確認された町口遺跡、中世の鍛冶関連の遺物を伴う居住域が確認されている上澤田遺跡などが存在する。しかし、今回の調査により別山川右岸の他の遺跡と含め、別山川流域の変遷を解明する一端になったと考えられる。別山川が激しく蛇行し、幾度も水害に見舞われたであろうこの場所に古墳時代以降、様々な時代に繰り返して人々の営みが行われてきたことが明らかになった。近年では別山川上流域で古墳時代以降の集落遺跡が見つかっており、その多くで充実した遺物内容の調査成果が出ている。古代は箕輪遺跡周辺を中心とした郡衙等により柏崎平野の開発が主導されていった中で、狭隘な平野部となる別山川流域でも多くの遺跡が成立しており、この地域の生産性の高さと地理的重要性が認識されていた結果とみることができるであろう。

Ⅳ　長嶺江添の塚

1　塚の現況

塚は別山川と右岸の丘陵間に広がる水田域に単独で存在する。頂部は南に向かって緩く下降する平坦面となっており、北端には「妙高山」「米山薬師」と銘が刻まれた２基の石塔が据えられている。石塔は諏訪神社を背にして妙高・米山方向を向いており、その周辺にはサクラやニワトコ、ツツジなどが植栽されている。妙高山塔は小礫をセメントで固めた台座に固定されており、最下部の原形は台座に埋もれて窺えない。調査時には塚全体が雑草に覆われており、米山塔も北西に向かって倒れているなど荒れた状況であった。

塚は田面と田面の境界に位置しており、現在は塚を避けて耕作が行われている。後述のように塚の造営は 19 世紀後半とみられるが、造営時の周辺環境は資料がなく不明である。

2　塚の形態（図版 12・13）

平面形は南北にやや長い隅丸方形を呈し、断面形は丸みの強い台形状を呈する。基底部は存在せず、黄橙色～褐灰色の基盤層（標高 15.85 ～ 15.95 m）に盛土して塚を構築している。塚の規模は、裾部が南北約 7.7 m、東西約 5.8 m、妙高山塔が据えてある頂部の高さは約 1 mを測る。頂部は南北約 2.5 m×東西約 3 mの隅丸方形を呈する平坦面で、北側に寄る。塚を避ける形で水田が営まれている関係上、塚の縁辺部は原形を失っていると考えられ、周溝の有無は確認できなかった。

3　構築土

調査に着手した時点で塚を覆っていたのは、しまりや粘性に欠ける褐灰色土（1 層）である。1 層は塚全体に 5 ～ 20cm の厚さで堆積しており、斜面が急な北側は堆積が厚い。土中には、ガラスや飲料缶などから古代の須恵器といった幅広い時代の遺物が含まれており、これらの点から近現代の植栽に伴う盛土と判断した。これを除去して露呈した 2 層はよくしまっており、近現代の遺物も含まれないことから、2 層以下を塚に由来する土層と判断した。これらは 14 層に分層できるが、土色から 4 種類に大別できる。すなわち、灰黄褐色の 2・3 層、にぶい黄褐色の 4 ～ 7 層、褐灰もしくは暗褐色の 8 ～ 10 層、にぶい黄褐色の 11 ～ 14 層である。いずれも乾いて酸化しており、土質は水田耕作土とまったく異なっている。また、出土遺物にも塚と無関係な古代～中世のものが含まれており、こうした点から塚の盛土は周辺丘陵部からの客土であろうと考えている。

1）11 ～ 14 層

黄色味の強い土で、しまり・粘性とも強い。特に 13・14 層はしまりが強固で、人為的に突き固められている可能性が高く、山状に盛られていることもあって塚の基礎か造営当初の姿と考えられる。遺物は石

製品（火鉢・鍋の類であろうか）の小片が 1 点出土したのみである。

2）8 ～ 10 層

有機質を含んでやや黒ずんだ土色で、堆積は限定的である。植栽の影響を受けたものか、旧い時期の塚表土の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

3）4 ～ 7 層

黄色味の強い土で、粘性強く、しまりはやや強い。植栽の影響を受けたものか、土色はわずかに黒ずむ。頂部及び南半部分に多く堆積する。基本的には造営時の盛土と考えているが、11 層以下には遺物が 1 点しか含まれていないことを考えると、盛土の積み増しか二次堆積の可能性も考えられよう。遺物は近世陶磁器のほか、石塔の破片と思われる砂岩の小片、砥石、土師器（古代）や珠洲の小片が出土している。

4）2 ～ 3 層

ほぼ塚全体を覆っており、植栽の影響を受けて部分的に土色が黒ずむ。基本的によくしまっているが、北側を中心に木根の攪乱を受ける部分がある。18 ～ 19 世紀の陶磁器が含まれており、4 ～ 7 層同様、盛土の積み増しか二次堆積の可能性も考えられる。遺物は陶磁器のほか、石塔の破片と思われる砂岩の小片、鎌・刀子といった鉄製品、古代の須恵器などの小片が出土している。

4　遺物

1）遺物各説（図版 14・15）

構築土中から出土した遺物はわずかな量で、完形品はない。遺物の内容は、現代の飲料缶、近現代のガラス・陶器各 1 点、近世の国産陶磁器 13 点、中世の珠洲 3 点、古代の土師器 1 点・須恵器 3 点、時期不明の鉄製品（鎌・刀子）各 1 点、石製品（砥石・火鉢／鍋ヵ）各 1 点・石塔台座と思われる製品 1 点、石塔もしくは台座破片数十点などである。出土層位は、近現代～現代の遺物が 1 層、近世遺物が 1・2・4・6・7・11 層、中世遺物が 1・4・7 層、古代遺物が 1・2・7 層、鉄製品が 2 層、砥石が 4 層、火鉢か鍋と思われる石製品が 11 層、石塔台座と思われる製品が 1 層、石塔もしくは台座破片が 1・2・4 層である。このうち、図化が可能な 16 点を図示した。

67 ～ 70 は肥前系磁器碗である。67 は体部内外面に網目文が施される製品で、18 世紀前半～中頃の製品と思われる。なお、近世陶磁器の器種や年代観については、佐渡市産業観光部世界遺産推進課の相羽重徳氏にご教示頂いた。68 ～ 69 も外面に絵付けされるが、意匠は不明である。68 ～ 69 は、いわゆる「くらわんか茶碗」で、18 世紀後半～ 19 世紀初頭の製品と思われる。69 は二次的な被熱により釉調が澱む。70 は体部が急激に立ち上がる器形で、筒型碗ではないかと考えられる。時期は 18 世紀後半か。71 は京・信楽系陶器鉄絵灰釉徳利で、器厚は約 2㎜と薄手である。19 世紀中頃の製品であろう。72 は肥前系陶器で呉器手碗と思われる。釉調は淡黄色で、全体に貫入が認められる。17 世紀後半の製品と思われる。

73 ～ 75 は珠洲の甕、76 ～ 78 は古代の須恵器である。これらは表土だけでなく盛土中からも出土している。76 は底部回転ヘラ切りの無台坏、77 は壺、78 は甕である。

79・80 は鉄製品（鎌・刀子）である。いずれも 2 層から出土しているが、時期は不明である。

81 は砥石である。側面は 4 面ともよく使用されている。82 は石塔の台座であろうか。扁平な自然石の中央に長方形の孔を穿った製品で、孔以外に人為的な調整はみられない。寸法は、長辺 27.5cm 以上、短辺 23.5cm、厚さは約 5cm である。長方形孔の寸法は、長辺 12.5cm 以上、短辺 7.7cm、深さ約 2.5cm である。米山塔の下部に近い位置で出土しており、関連性が窺える。石材は米山塔と同様、板状に剥離する砂岩であるが、粒子はやや細かい。

2）石　塔

石塔に関しては、調査に際して長嶺諏訪神社の前にある公園への移設が決まっていたので、移設前に現地で銘文の拓本採取と計測を行った。

a．妙高山塔

84 は高さ 96cm 以上、幅 85cm、厚さ 10cm 前後を測る舟形の石塔である。正面は平坦に仕上げられ、銘文が刻される。背面及び側面は自然面で、ボーリング・シェル（穿孔貝）が開けた小穴が多数みられる。石材は板状に剥離する微粒砂岩である。西山丘陵に分布する椎谷層は、砂岩と泥岩の互層を主体とすることから［大野 1991］、本塚の石塔は地元に産出する石材を用いているものと考えられる。銘文は、頂部に阿弥陀三尊を配し（左からサク（勢至菩薩）・中央にキリーク（阿弥陀如来）・右は剥離して読めないが、恐らくサ（観音菩薩）であろう）その下に妙高山、右に慶応二（1866）年山田□（庄か、以下は剥離により不明）・石（以下は剥離により不明）、左に丙寅六月日（1866 年 6 月）・長峯・講中と刻む。造立主と思われる山田□は、この時期に長嶺の庄屋を勤めていた山田庄九郎であろうか。

b．米山塔

83 は高さ 63cm 以上、幅 46cm、厚さ 10 ～ 15cm を測る自然石である。正面は平坦、背面も比較的平坦で、断面形は隅丸方形を呈する。正面下半は表面が剥離する。石材は板状に剥離する中粒砂岩で、貝穴は右上方側面に一つだけ確認できる。銘文は頂部に横書きで米山、中央に薬師とある。

5　まとめ

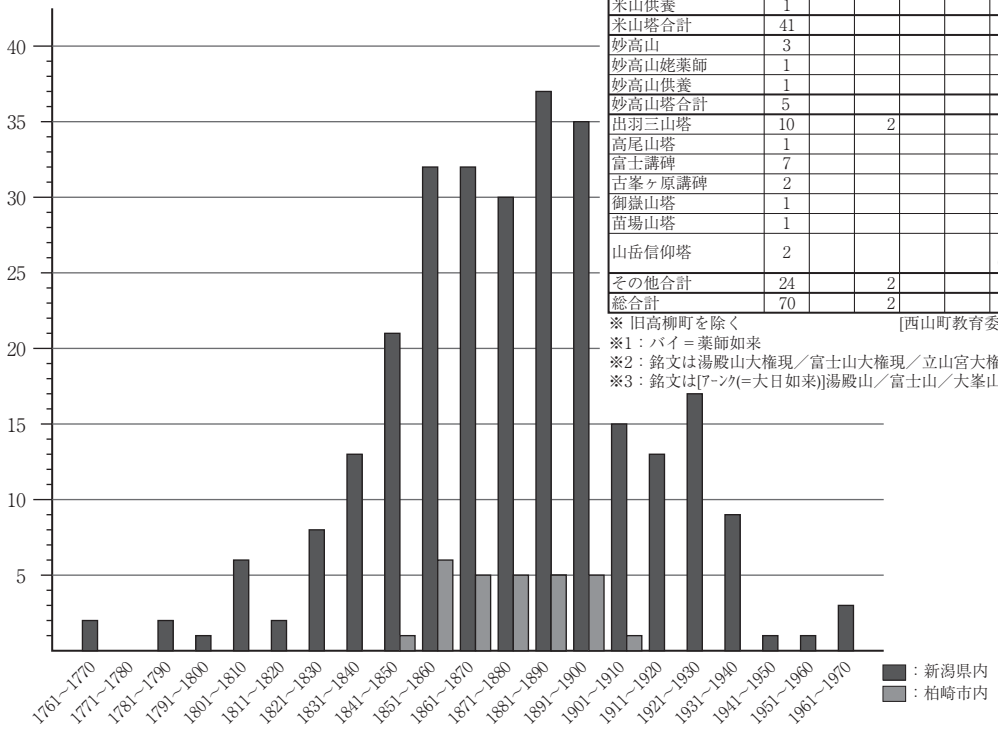
出土遺物や石塔の年代から、塚は 18 ～ 19 世紀に構築されたものとみられる。構造的には、基盤層上に黄橙色土を山状に盛って基礎とし、その上に黄橙色の盛土をして構築していると判断したが、基礎とした部分は造立時の姿である可能性も考えられる。いずれにせよ、塚本体や基底部に付帯遺構や埋納遺物といったものは認められず、墳墓や経塚などのように塚自体が固有の性格をもつものではない。

石塔 2 基は塚頂部北寄りに置かれており、正面には遠く米山を望むことができる。中央に置かれた妙高山塔は台座で固定されていたが、向かって左側に置かれた米山塔は調査に着手した時点で北側に倒れ、表面は風化や破損して遺存状態はあまり良いものではなかった。どちらも地元で産出する砂岩を用いており、米山塔はあまり人為的な調整は施されていないが、妙高山塔は正面を平坦に加工している。大きさも米山塔のほぼ 2 倍と大きく立派である。石塔の造立主についてみてみると、妙高山塔は長嶺の庄屋であった山田（庄九郎？）、米山塔は長峯（長嶺）講中とあり、個人と集団という違いがある。こうした特徴からみると、これらは他所から集められてきた可能性も否定できないが、少しでも多くの稲を植えたい水田域にわざわざ石塔を運んできたとは考え難く、当初から石塔の造立地として本地点が選択され、造立施設として塚を築いたと判断する。妙高山塔の紀年銘からみて、その時期は 1866 年前後であろう。同時

柏崎市内の山岳信仰塔

石塔銘文	基数	1801～1810	1811～1820	1821～1830	1831～1840	1841～1850	1851～1860	1861～1870	1871～1880	1881～1890	1891～1900	1901～1910	時期不明
米山薬師如来	2							1				1	
米山塔	19						2	1	2	2	3		9
米山	7						1	2	1	1			2
[ﾊﾞｲ]米山塔（※1）	1										1		
[ﾊﾞｲ]米山（※1）	4						2	1	1				
米山薬師	5								1	2	1		1
薬師如来	1					1							
米山三	1												1
米山供養	1						1						
米山塔合計	41					1	6	5	5	5	5	1	13
妙高山	3							1					2
妙高山姥薬師	1												1
妙高山供養	1					1							
妙高山塔合計	5					1		1					3
出羽三山塔	10		2			4					1		3
高尾山塔	1										1		
富士講碑	7									1	1	2	3
古峯ヶ原講碑	2												2
御嶽山塔	1							1					
苗場山塔	1										1		
山岳信仰塔	2					1 (※2)							1 (※3)
その他合計	24		2			5		1		1	4	2	9
総合計	70		2			7	6	7	5	6	9	3	25

※ 旧高柳町を除く　　[西山町教育委員会1988][柏崎市立博物館1991]を基に加筆・作成
※1：バイ＝薬師如来
※2：銘文は湯殿山大権現／富士山大権現／立山宮大権現
※3：銘文は[ｱｰﾝｸ(=大日如来)]湯殿山／富士山／大峯山／妙高山／立山

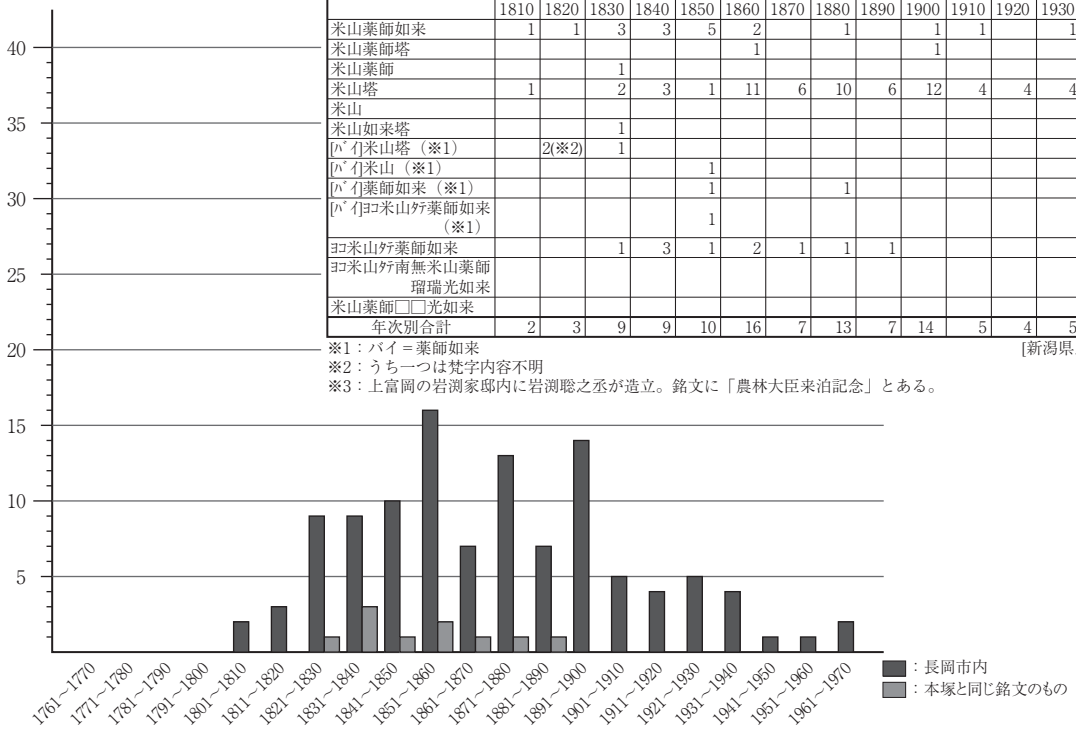


[渡邉 1989] 挿図を基に加筆・作成

第１表　新潟県内及び柏崎市内の米山塔造立年次頻度（10 年単位）

石塔銘文	1801～1810	1811～1820	1821～1830	1831～1840	1841～1850	1851～1860	1861～1870	1871～1880	1881～1890	1891～1900	1901～1910	1911～1920	1921～1930	1931～1940	1941～1950	1951～1960	1961～1970	時期不明	合計
米山薬師如来	1	1	3	3	5	2		1		1	1		1					2	21
米山薬師塔						1				1									2
米山薬師			1															1	2
米山塔	1		2	3	1	11	6	10	6	12	4	4	4	3	1(※3)	1	2	12	71
米山																		2	2
米山如来塔			1																1
[ﾊﾞｲ]米山塔（※1）		2(※2)	1																3
[ﾊﾞｲ]米山（※1）					1													1	2
[ﾊﾞｲ]薬師如来（※1）					1			1											2
[ﾊﾞｲ]ﾖｺ米山ﾀﾃ薬師如来（※1）					1													1	2
ﾖｺ米山ﾀﾃ薬師如来			1	3	1	2	1	1	1										10
ﾖｺ米山ﾀﾃ南無米山薬師瑠璃光如来														1					1
米山薬師□□光如来																		1	1
年次別合計	2	3	9	9	10	16	7	13	7	14	5	4	5	4	1	1	2	19	131

※1：バイ＝薬師如来　　[新潟県立大手高校歴史クラブ1973]を基に作成
※2：うち一つは梵字内容不明
※3：上富岡の岩渕家邸内に岩渕聡之丞が造立。銘文に「農林大臣来泊記念」とある。



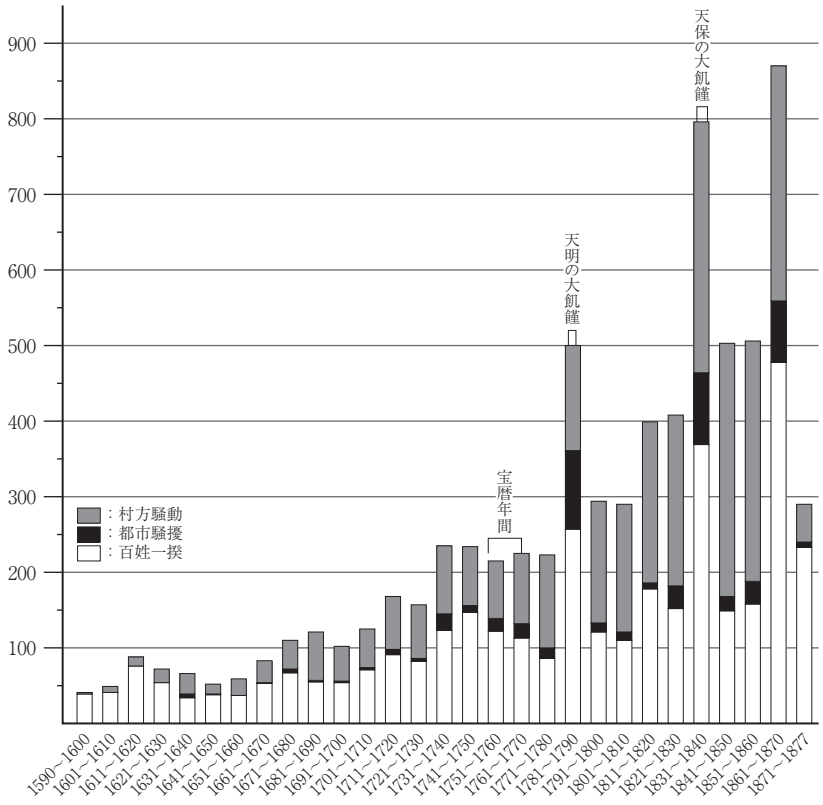
[新潟県立大手高校歴史クラブ 1973] を基に作成

第２表　長岡市内の米山塔造立年次頻度（10 年単位）

年号		百姓一揆	都市騒擾	村方騒動	年次別合計
西暦	元号				
1590-1600	天正/文禄/慶長	39	0	2	41
1601-1610	慶長	41	0	8	49
1611-1620	慶長/元和	76	0	12	88
1621-1630	元和/寛永	54	0	18	72
1631-1640	寛永	34	5	27	66
1641-1650	寛永/正保/慶安	38	1	13	52
1651-1660	慶安/承応/明暦/万治	37	0	22	59
1661-1670	寛文	53	1	29	83
1671-1680	寛文/延宝	67	5	38	110
1681-1690	天和/貞享/元禄	55	2	64	121
1691-1700	元禄	54	2	46	102
1701-1710	元禄/宝永	71	3	59	133
1711-1720	正徳/享保	91	7	70	168
1721-1730	享保	82	4	71	157
1731-1740	享保/元文	123	22	90	235
1741-1750	寛保/延享/寛延	147	9	78	234
1751-1760	宝暦	122	17	76	215
1761-1770	宝暦/明和	113	19	93	225
1771-1780	明和/安永	86	14	123	223
1781-1790	天明/寛政	257	104	139	500
1791-1800	寛政	121	12	161	294
1801-1810	享和/文化	110	11	169	290
1811-1820	文化/文政	178	8	213	399
1821-1830	文政	152	30	226	408
1831-1840	天保	369	95	332	796
1841-1850	天保/弘化	149	19	335	503
1851-1860	嘉永/安政	158	30	318	506
1861-1870	万延/文久/元治/慶応/明治	478	81	311	870
1871-1877	明治	233	7	50	290
種別合計		3588	508	3193	7289

[青木虹二 1971]を基に作成

第３表　年次別一揆・騒擾など発生件数一覧表（10 年単位）



[青木虹二 1971]を基に作成

第４表　年次別一揆・騒擾など発生件数グラフ（10 年単位）

に、これは 19 世紀中～後期にピークを迎える柏崎市内における山岳信仰塔の造立活動に即した動きといえる（第 1 表）。米山塔についてはさらに、「米山薬師」と銘のあるものは 19 世紀後半に多いという［渡邉 1989］。ただし、水田近くに造立される山岳信仰塔は、米山塔がわずかに確認されているに過ぎず［渡邉前掲］、水田に立地するものは管見の限り類例を知らない。また、塚を伴う山岳信仰塔についても同様である［品田 1991・1993］［柏崎市立博物館 1991］。そうした意味では、本塚の存在は特異である。

1）米山／妙高山信仰について

山岳信仰塔が水田域に存在する理由としては、米山・妙高山信仰との関わりが考えられる。米山は、古くから薬師如来を祀る修験の山として信仰を集めてきた。米山薬師は和銅 7（712）年、泰澄禅師によって開かれたと伝えられており、現在、米山寺密蔵院に安置されている薬師如来像も泰澄の作と伝えられている。近世になると、米山薬師は農業神として中越地方を中心に信仰を集めるようになるという［大関 1978］。大関は、越後における新田開発の進展に伴い多くの農村が出現したことをその一因に揚げており、渡邉三四一氏は農村の増加に加え凶作や飢饉との関連にも注目し、宝暦年間（1751-1764 年）をその萌芽期と捉えている［渡邉 1993］。このように、米山は農業神として絶大な信頼を集めるようになり、「講（米山講）」を組織して米山薬師に代参者を送ったり、米山信仰塔を造立するといった活動が盛んに行われるようになった［渡邉前掲］。明治時代に入ると、米山講は上・中越を中心に 600 以上も存在したという［大関前掲］。米山薬師の縁日である 4 月 8 日や田植えを済ませた頃に代参者は米山山頂の薬師堂に参拝して講銭を納め、神札・黒札・あられなどを受け、土産として「当帰（トウキ）」という植物の茎葉を持ち帰る。これらは講中に分配され、黒札はトウキと共にヨシや竹に挟み田の水口に立て、豊作と虫除けの呪いとした。こうした行為は農薬が普及する昭和前半期まで盛んに行われたという［渡邉前掲］。こうした活動に伴って、米山塔も上・中越を中心に 400 基前後、柏崎市内でも 40 基近くが造立されている（第 1・2 表）。新潟県内で確認されている最古の米山塔は、加茂市花立峠にある宝暦 13（1763）年造立のものである。宝暦年間（1751 ～ 1764 年）は、東日本を中心に相次ぐ天候不順に見舞われており、その後も天明の大飢饉（1782 ～ 1787 年）、天保の大飢饉（1833 ～ 1839 年）、越後国では文政 11（1828）年に三条を中心とする大地震も起きるなど、自然災害が続くこととなる。全国的な一揆・騒擾発生件数をみると（第 3・4 表）、宝暦年間前後から増加傾向に拍車がかかり、天明・天保の大飢饉と明治維新といった全国規模の事件が発生した時期には激増する。特に村方騒動とした村と村・村人と庄屋といった生活圏における争いの増加率が激しいのが特徴的で、18 世紀末葉から明治維新にかけては一揆を凌駕する件数の騒動が起きている。このような社会騒乱と米山塔を中心とした山岳信仰塔の造立数は一致した動きをみせており、飢饉に代表される大規模な自然災害を契機とする山岳信仰の隆盛に伴って石塔の造立活動も活発化し、幕末の政情不安が活動の高まりにより一層の拍車をかけたとみることができよう。明治維新を過ぎると社会的な騒乱も米山塔の造立も下火となり、柏崎市内では米山塔の造立は終わりを迎えるようであるが、新潟県内では第二次世界大戦が始まる 1930 年代末まで活発な造塔活動が続く。

米山同様、妙高山も古くから霊山として民衆の信仰を集めてきた。山麓にある関山神社は、江戸時代には天台宗の寺院であり、山頂の阿弥陀堂をはじめとする堂を山中に有していた。堂内に安置される阿弥陀如来像は鎌倉末より室町時代にかけての時代に製作されたもので［大場 1978］、6 月 22 日から 7 月 5 日の阿弥陀堂ご開帳期間には、県内各所から道者・信者が参拝に訪れる。妙高山は頸城平野を潤す水源であるだけでなく、水に関わる伝承も数多くあり、こうしたことから農業神としても信仰を集めている［安達

1978]。中世には、西の妙高山には阿弥陀如来を安置して西方極楽浄土と見なし、薬師如来を祀る東方の米山を東方薬師浄瑠璃世界と見なしたという［鈴木 2001］。

柏崎市内には、今回調査したもののほかに 5 基の妙高山塔が知られている［西山町教委 1988］［柏崎市立博物館 1991］。個々の所在は、西山町坂田に 1 基、柏崎市横山に 1 基、石川峠（現 長岡市小国町八王子）に 2 基、柏崎市東の輪に 1 基で、坂田の石塔には嘉永 7（1854）年 5 月、横山の石塔には文久元（1861）年の紀年銘がある。このほかに、現在は消息不明であるが、久米村（現 柏崎市久米）にはかつて五位与左衛門という人物が建立した妙高社が存在し、妙高山供養塔（寛政 12（1800）年造立）が祀られていたという［小島 2011］。

2）妙高山塔と造立主の山田庄九郎について

山田家は、庭山家・宇津野家と並ぶ長嶺の庄屋であり、大正時代に群馬へと移ったらしい。長嶺諏訪神社の山門脇に居を構えていた。大正 3（1914）年に刊行された刈羽郡二田村郷土誌［前澤・加藤 1914］には、父祖の道を継承して神道御嶽派の神職であると紹介されている。明治 2（1869）年に山田家が与板役場に出した諏訪神社の由緒書には、「社守　山田庄九郎」の名がみえる［西山町誌編纂委員会 1963］。現在、諏訪神社の山門をくぐったところに置かれている弘化四丁未（1847）年五月吉日の紀年銘が刻まれる双体道祖神も、弘化元（1845）年に庄九郎が領主の井伊候から金千疋を頂戴した記念に造立したものであり、庄九郎の信仰心に満ちた人柄が窺える。

3）まとめ

以上、述べてきたように、新田開発が進み農村が増加した江戸時代には、山岳信仰は農業神としての信仰に変容する。米山塔を主体とする山岳信仰塔の造立活動は、凶作や飢饉が頻発するようになる 18 世紀後半となると活発化し、本塚の妙高山塔が造立された 19 世紀中～後葉にピークを迎える。本塚の周辺も別山川の度重なる氾濫に見舞われたようで、氾濫を鎮めるために村人が塚を築き、そこに棲みついたつがいの蛇が水害から村を守ったという塚にまつわる伝承がある［西山町 2001］。社会的にも、天保の大飢饉や幕末へと向かう政情不安を反映するように一揆や騒乱が頻発し、柏崎でも大塩平八郎の乱に触発された生田万が貧農民救済のために荒浜村庄屋や鵜川河口にあった桑名藩陣屋を襲撃する事件を起こしている（生田万の乱）。そうした先行き不安な社会を背景に長嶺江添の塚は構築され、阿弥陀如来・薬師如来への信仰の象徴として石塔が建てられたのであろう。そして、その造立には長嶺の庄屋山田家が深く関わっているものとみられる。

≪ 引用・参考文献 ≫

相沢央 1998 「八幡林遺跡と郡の支配」『新潟史学』第 40 号　新潟史学会
青木虹二 1971 『百姓一揆総合年表』三一書房
安達恩 1978 「第四篇　戸隠・妙高の山岳信仰と修験道　妙高山信仰と年中行事」『富士・御嶽と中部霊山』
山岳宗教史研究叢書 9　鈴木昭英編　名著出版
大関政子 1978 「第五篇　越後・佐渡の山岳宗教と修験道　米山薬師と米山講」『富士・御嶽と中部霊山』
山岳宗教史研究叢書 9　鈴木昭英編　名著出版
大野隆一郎 1991 「柏崎の地石ー地質学の視点からー」『柏崎の石仏ー石が語るもう一つの歴史ー』第 20 回特別展図録
柏崎市立博物館
大場厚順 1978 「第四篇　戸隠・妙高の山岳信仰と修験道　妙高山信仰の変遷と修験行事」
『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書 9　鈴木昭英編　名著出版
小島正巳 2011 「第三章　久米村大先達五位与左衛門と柏崎地区の妙高山岳信仰塔」『妙高火山の考古学』岩田書院
柏崎市 1990 『柏崎市史　上巻』
柏崎市教育委員会 1985 『吉井遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
柏崎市教育委員会 1985 『刈羽大平・小丸山』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
柏崎市教育委員会 1987 『帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書（試掘確認調査報告書・吉井水上Ⅰ・戸口遺跡）』
柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 8 集
柏崎市教育委員会 1990 『千古塚』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 11 集
柏崎市教育委員会 1990 『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
柏崎市教育委員会 1997 『前掛り』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 26 集
柏崎市教育委員会 1999 『角田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 32 集
柏崎市教育委員会 2001 『宮之下遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 35 集
柏崎市教育委員会 2007 『坂田遺跡群Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 50 集
柏崎市教育委員会 2008 『坂田遺跡群Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 53 集
柏崎市教育委員会 2009 『坂田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 56 集
柏崎市教育委員会 2010 『坂田遺跡群Ⅲ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 58 集
柏崎市教育委員会 2012 『柏崎市の遺跡 21』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 66 集
柏崎市教育委員会 2012 『音無瀬Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 68 集
柏崎市教育委員会 2013 『柏崎市の遺跡 22』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 71 集
柏崎市教育委員会 2012 『音無瀬Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 72 集
柏崎市教育委員会 2013 『下境井』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 73 集
柏崎市教育委員会 2014 『黒部古屋敷』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 74 集
柏崎市教育委員会 2015 『上原』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 78 集
柏崎市教育委員会 2015 『善根大坪』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 79 集
柏崎市教育委員会 2015 『柏崎の遺跡 24』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 80 集
柏崎市教育委員会 2016 『丘江』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 81 集
柏崎市教育委員会 2017 『磯部Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 85 集
柏崎市教育委員会 2017 『長嶺前田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 86 集
柏崎市教育委員会 2017 『磯部Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 87 集
柏崎市教育委員会 2017 『中田下川原』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 88 集
柏崎市教育委員会 2017 『角田 3』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 90 集
柏崎市教育委員会 2017 『柏崎の遺跡 27』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 92 集
柏崎市教育委員会 2018 『柏崎の遺跡 28』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 93 集
柏崎市教育委員会 2019 『布目・前谷地』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 94 集
柏崎市立博物館 1991 「第 2 部（報告編）」『柏崎の石仏ー石が語るもう一つの歴史ー』第 20 回特別展図録　柏崎市立博物館
柏崎平野団体研究グループ 1979 「柏崎平野の地形発達史と下谷地遺跡周辺の地形」
『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 19
春日真実 1997 「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号　北陸土器研究会
春日真実 1999 「第 4 章 2 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
春日真美 2015 「第Ⅶ章　まとめ　Ⅰ土器・陶磁器Ａ古代土器・陶磁器編年」
『箕輪遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
刈羽村教育委員会 1998 『払川・山ノ脇遺跡』刈羽村埋蔵文化財調査報告書第 3 集
刈羽村教育委員会 1999 『払川遺跡』刈羽村埋蔵文化財調査報告書第 4 集

川畑誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察ー掘立柱建物の平面プランを中心にしてー」
『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報 6』
坂井秀弥 1983 「歴史的背景と栗原遺跡」『栗原遺跡―第 6 次発掘調査概報―』新潟県教育委員会
品田髙志 1989 「柏崎平野における塚（群）の分布と立地についてー長鳥川流域を中心にー」『柏崎の民俗』第二号
柏崎民俗の会
品田髙志 1990 「塚の群構成とその類型ー柏崎平野における塚（群）の事例からー」『柏崎の民俗』第三号 柏崎民俗の会
品田髙志 1991 「単独塚の類別とその諸相ー柏崎市域における単独塚の検討ー」『柏崎の民俗』第四号 柏崎民俗の会
品田髙志 1993 「塚と石仏・石塔ー塚（群）造営の終焉をめぐってー」『柏崎の民俗』第五号 柏崎民俗の会
品田髙志 1993 「柏崎平野の古代鉄生産雑感ー藤橋東遺跡群の発見とその意義ー」『新潟考古学談話会会報』第 12 号
新潟考古談話会
品田髙志 1994 「古代三嶋郡と古代時の様相ー柏崎平野における古代史理解に向けてー」『柏崎市立博物館館報』№8
柏崎市博物館
品田髙志 1997 「馬場・天神腰遺跡」『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』北陸中世土器研究会編・桂書房
鈴木昭英 2004 『越後・佐渡の山岳修験』修験道歴史民俗論集 3 宝蔵館
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
中尾七重 2012 「古渡路遺跡の中世掘立柱建物について-架構等の復元とその特徴-」
『文化学園大学紀要 服装学・造形学研究』第 43 集
新潟県教育委員会 1979 『狐山塚群』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 17
新潟県教育委員会 1993 『北国街道Ⅱ』新潟県歴史の道調査報告書 第 5 集
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 『和泉 A 遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 93 集
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 133 集
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 『箕輪遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 254 集
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 『宝田遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 252 集
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 『宝田遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 264 集
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018 『宝田遺跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 273 集
新潟県考古学会 1999 『新潟県の考古学』古志書院
新潟県考古学会 2009 『新潟県の考古学 2』新潟県考古学会
西山町 2001 『広報にしやま』第 3 号
西山町 2001 「にしやままちの民話と伝説 25ー江添の塚ー」『西山町伝説集』
西山町誌編纂委員会 1963 『西山町誌』
西山町教育委員会 1988 『黙して語るー西山町の野の仏たちー』
西山町教育委員会 2003 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』西山町文化財調査報告書第 7 集
西山町教育委員会 2005 『坪之内塚群・坪之内遺跡発掘調査報告書』西山町文化財調査報告書第 8 集
萩野政博 1983 「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第 16 号 新潟中学会
前澤新二・加藤靖之 編 1914 『刈羽郡二田村郷土誌』二田村役場
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
米沢康 1976 「古代北陸道の伝間制について」『信濃』第 28 巻 5 号 信濃史学会
米沢康 1980 「大宝 2 年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻 6 号 信濃史学会
和島村教育委員会 1991 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 1 集
和島村教育委員会 1993 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 2 集
和島村教育委員会 1994 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 3 集
渡邉三四一 1989 「米山信仰論ー「米山塔」からの視点ー」『柏崎市立博物館 館報』No. 3
渡邉三四一 1993 「修験者の米山代参ー資料紹介と若干の分析ー」『柏崎の民俗』第五号 柏崎民俗の会

附表１　長嶺川田遺跡　遺構観察表

土層の凡例　◎多量　○中量　◇少量　△微量　×無
◎非常に強い　□強い　○やや強い　▲普通　◇やや弱い　△弱い　×無

略号	遺構番号	図面図版	写真図版	グリッド	種別	平面形	長径(m)	短径(m)	深度(m)	堆積状況	断面形	柱痕有無	土層 色調・土質	粘性	しまり	炭化物	焼土	地山土	備考	備考
P	1		19	B1-10	柱穴	—	0.30	0.11	0.24	斜位	U字状	有	1 灰色粘質土(N6/)	◎	○	△	×	×		
													2 青灰色粘質土(5P6/1)	◎	△	△	×	×		
P	2		19	C1-23	ピット	円形	0.34	(0.17)	0.46	単層	U字状	無	1 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	◎		
P	3			C2-3	ピット	楕円	0.29	0.23	0.37	レンズ状	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 明青灰色粘質土(5P7/1)	◎	△	×	×	△		
P	4			C2-3	ピット	円形	0.29	0.25	0.22	単層	漏斗状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	5			C2-2	ピット	楕円	0.51	0.18	0.14	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△		
P	6			C2-1	ピット	円形	0.23	0.21	0.14	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	7			B1-24･25,B2-4･5	ピット	円形	0.28	0.26	0.45	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	×	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	×		
P	8		19	B2-4	ピット	円形	0.19	(0.10)	0.40	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	×		
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	×		
P	9		20	B1-25	柱穴	楕円	0.42	0.14	0.54	柱痕	U字状	有	1 暗灰色粘質土(N2/)	◎	○	×	×	△	地:還元化	柱根残存
													2 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	△	△	×	△	炭:φ1mm,地:還元化	
SK	10	7	21	C1-11･12	土坑	円形	0.82	0.78	0.79	単層	半円状		1 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	×	地:φ1～2mmブロック,炭:φ2～3cmブロック	
P	11		20	B2-5	ピット	長方形	0.24	(0.13)	0.53	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		
													2 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		
													3 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	○	◇	×	×	炭:φ1mm	
	12			B2-15	欠番															
P	13			C2-1	ピット	円形	0.18	0.17	0.54	レンズ状	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△		
													2 灰色粘質土(N4/)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	14			B1-20	ピット	円形	0.16	0.15	0.32	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗灰色粘質土(N3/)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	15			B1-23･24	ピット	円形	0.18	0.16	0.16	水平	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		
													2 明青灰色粘質土(5P7/1)	◎	○	×	×	○		
P	16		20	B1-23	柱穴	楕円	0.26	(0.13)	0.47	柱痕	U字状	有	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	×		
													3 灰白色粘質土(10YR8/2)	◎	○	×	×	×	1･2層ブロック:φ1～2mm	
P	17			B1-23	ピット	円形	0.19	(0.10)	0.17	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	×		
P	18	6	19	B1-18･23	柱穴	円形	0.30	0.26	0.48	水平	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		SA1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	△	×	×	炭:φ1mm	
P	19	6	19	B1-22	柱穴	楕円	0.27	0.23	0.51	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SA1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	×		
P	20	6	19	C1-11	柱穴	楕円	0.31	0.25	0.50	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SA2
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	21	6	19	B1-22	柱穴	円形	0.32	0.29	0.40	水平	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	○	×	△	炭:φ1mm	SA1
													2 紫灰色粘質土(5P5/1)	◎	△	×	×	×	炭:φ1mm	
P	22	6	19	B1-22	ピット	楕円	0.25	0.21	0.36	水平	漏斗状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	○	×	△	炭:φ1mm	
													2 紫灰色粘質土(5P5/1)	◎	△	×	×	×	炭:φ1mm	
P	23			B1-21･22,B2-1･2	ピット	楕円	0.19	0.15	0.56	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	24		20	B1-23	ピット	楕円	0.18	(0.09)	0.54	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	×	炭:φ1mm,2層ブロックφ5～10mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	25			B1-23	ピット	円形	0.16	0.16	0.35	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	○	×	△	炭:φ1mm	
													2 紫灰色粘質土(5P5/1)	◎	△	△	×	×	炭:φ1mm	
P	26	6	18	B2-3	柱穴	円形	0.28	0.25	0.57	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	φ1mm炭化物、地山混在	SB1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	27	6		B2-9	柱穴	円形	0.25	0.23	0.43	水平	漏斗状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm,2層ブロック:φ1～10mm	SB1
													2 紫灰色粘質土(5P5/1)	◎	△	×	×	×		
P	28	6		B2-8	柱穴	楕円	0.37	0.29	0.46	水平	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SB1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	○		
P	29		20	B2-2	ピット	円形	0.20	0.17	0.42	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	30	6	18	B2-8	柱穴	方形	0.23	0.18	0.52	柱痕	階段状	有	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SB1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	31			B2-7･8	ピット	円形	0.17	0.16	0.36	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	32			B2-13	ピット	不整形	0.23	0.19	0.12	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	33	6	18	B2-13	柱穴	楕円	0.50	0.35	0.71	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SB1
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	×	×	◎	地:φ1mm～10mm･還元化	
P	34		20	B2-9	ピット	楕円	0.42	0.25	0.50	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	△	×	△	炭:φ1mm	
P	35			B2-2	ピット	円形	0.20	0.19	0.12	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	36	6	19	B1-20	柱穴	円形	0.29	0.27	0.51	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	SA2
													2 暗青灰色粘質土(5B3/1)	◎	△	×	×	×		
P	37		20	B1-25,B2-5	ピット	円形	0.22	0.19	0.13	単層	台形状	無	1 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	○	×	×	◎	地:還元化	
P	38		20	B1-25,B2-5	ピット	楕円	0.14	0.10	0.05	単層	弧状	無	1 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	○	×	×	◎	地:還元化	
P	39	6	19	C1-12	柱穴	楕円	0.30	0.24	0.35	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	×	×	△		SA2
													2 暗青灰色粘質土(5B3/1)	◎	△	×	×	△	地:還元化	
P	40			B1-25	ピット	楕円	0.22	0.20	0.44	単層	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	41		20	C1-12･13	柱穴	楕円	0.48	(0.18)	0.37	柱痕	U字状	有	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	柱根残存
													2 青灰色粘質土(5P6/1)	◎	△	○	×	×	3層の土,炭:φ5mm	
													3 明青灰色粘質土(5B7/1)	◎	△	×	×	△		
P	42			B2-5･10	ピット	楕円	0.18	(0.15)	0.42	水平	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	△	×	△	炭:φ1mm	

略号	遺構番号	図面図版	写真図版	グリッド	種別	平面形	長径(m)	短径(m)	深度(m)	堆積状況	断面形	柱痕有無	土層 色調・土質	粘性	しまり	炭化物	焼土	地山土	備考	備考
P	43		20	B2-10	柱穴	楕円	0.33	0.17	0.49	柱痕	U字状	有	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 明青灰色粘質土(5B7/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													3 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													4 明青灰色粘質土(5B7/1)	◎	△	△	×	△	炭:φ5mm	
P	44			B2-4	ピット	円形	0.32	0.27	0.15	単層	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	45			B3-6	ピット	不整形	0.41	0.40	0.40	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	46			B2-24	ピット	円形	0.21	0.20	0.29	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
SE	47	7	21	D3-6	井戸	円形	0.99	0.94	0.91	レンズ状	台形状		1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	◇	×	△	炭:φ1mm	中世
													2 明青灰色粘質土(10BG7/1)	◎	△	△	×	×	炭:φ1mm	
													3 青灰色粘質土(10BG6/1)	◎	△	△	×	×	炭:φ1mm	
													4 青灰色粘質土(10BG5/1)	◎	△	×	×	×	φ20mm～30mmの礫、シルト質ブロック、砂混在	
													5 青灰色粘質土(10BG5/1)	◎	△	×	×	×	シルト質ブロック混在(7層より多量に含む)	
													6 暗灰色粘質土(N3/)	◎	△	◎	×	×	炭化物集積層	
													7 青灰色粘質土(10BG5/1)	◎	△	×	×	×	シルト質ブロック混在	
P	48			B3-2	ピット	円形	0.36	0.37	0.62	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	49			A2-25,B2-21	ピット	円形	0.40	0.39	0.25	単層	台形状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	50			B2-16・21	ピット	円形	0.34	0.30	0.29	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△		
P	51			B2-10	ピット	楕円	0.30	(0.18)	0.59	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	52			C2-3	ピット	円形	0.37	0.32	0.17	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
SD	53	7	21	A1-25,A2-4・5	溝		(1.41)	0.33	0.17	単層	半円状		1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	◇	×	△	炭:φ1～3mm	
SD	54	7	21	A1-24・25,A2-4・5	溝		(2.59)	0.62	0.15	単層	半円状		1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	◇	×	△	炭:φ1～5mm	
SD	55	7	21	A1-24・25	溝		(2.53)	(0.68)	0.12	単層	半円状		1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	◇	×	△	炭:φ1mm	
P	56			B1-23	ピット	楕円	0.27	0.08	0.22	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	57			B1-22	ピット	円形	0.24	0.22	0.63	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	58			B2-20	ピット	楕円	0.51	0.40	0.54	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	59			B2-15・20	ピット	円形	0.38	0.36	0.21	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
SK	60	7	21	A1-25,A2-5,B1-16・21,B2-1	土坑	不整形	(2.99)	2.47	0.39	レンズ状	弧状		1 灰白色粘質土(10YR8/2)	◎	○	○	×	◎	炭:φ1mm	古墳時代中期～後期
													2 灰白色粘質土(10YR8/2)	◎	○	×	×	◎		
													3 青灰色粘質土(5B5/1)	◎	○	×	×	◎		
P	61			B1-24	ピット	円形	0.18	0.16	0.17	単層	半円状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	62			B2-19	ピット	円形	0.20	0.19	0.20	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
P	63		20	C1-16・17	柱穴	不整形	0.35	0.32	0.37	水平	階段状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	△	×	△	炭:φ1mm	
													2 暗青灰色粘質土(5B4/1)	◎	△	△	×	△	炭:φ1mm	
P	64	6	18	B2-9	柱穴	楕円	0.29	0.15	0.60	単層	U字状	無	1 紫灰色粘質土(5P6/1)	◎	○	◇	×	△	炭:φ1mm,地:還元化	SB1

掘立柱建物

遺構名	図面図版	写真図版	グリッド	構造	方位(桁行)	桁行	梁行	床面積	構成ピット 柱穴	柱痕	平面形	長径(m)	短径(m)	深度(m)	断面形	ピット間隔(m)	
SB1	6	17 18	B2	2間×1間	N-37°-W	2.46m	1.43m	3.4㎡	P26	無	円形	0.28	0.28	0.57	箱状	P26-P27	1.05
									P27	無	円形	0.25	0.23	0.43	台形状	P27-P64	1.42
									P28	無	楕円	0.37	0.29	0.46	漏斗状	P28-P30	0.82
									P30	無	方形	0.23	0.18	0.52	漏斗状	P30-P33	1.47
									P33	無	楕円	0.50	0.35	0.71	階段状	P26-P28	1.44
									P64	無	楕円	0.29	0.15	0.60	階段状	P30-P27	1.64
																P33-P64	1.31

柵列

遺構名	図面図版	写真図版	グリッド	方位(桁行)	全長	構成ピット 柱穴	柱痕	平面形	長径(m)	短径(m)	深度(m)	断面形	ピット間隔(m)	
SA1	6	17	B1	N-56°-E	2.99m	P18	無	円形	0.30	0.26	0.48	台形状	P18-P19	1.59
						P19	無	楕円	0.27	0.23	0.51	U字状	P19-P21	1.40
						P21	無	円形	0.32	0.29	0.40	漏斗状		
SA2	6	17	B1	N-62°-E	3.65m	P20	無	円形	0.31	0.25	0.50	台形状	P20-P39	1.92
						P36	無	楕円	0.29	0.27	0.51	漏斗状	P36-P20	1.66
						P39	無	円形	0.30	0.24	0.35	U字状		

附表２　長嶺川田遺跡 出土遺物観察表

土器・陶磁器類

胎土：（多◎ やや多○ 含む● やや少△ 少▲ 微◇）

報告番号	図面図版	写真図版	遺構種別	遺構名	グリッド	層位	種別	器種	残存部位	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高(残存高)	調整 外面	調整 内面	調整 外面	調整 内面	焼成	胎土	備考
1	8	22	SK	60	A1･A2･B1･B2	2	土師器	鉢	口縁～底部	12.2	3.0	5.2	にぶい黄橙色（7.5YR7/4）	にぶい黄橙色（7.5YR7/4）			やや不良	砂粒◎	ゆがみが大きい
2	8	22	SK	60	A1･A2･B1･B2	2	土師器	甕	胴部下半～底部	—	4.0	（16.3）	灰白色（2.5Y8/2）	灰白色（2.5Y8/2）	縦方向のハケメ	ヘラナデ	やや不良	砂粒▲白色微粒子◇	外面にスス付着
3	8	22	SK	60	A1･A2･B1･B2	1	土師器	甕	口縁部	16.0	—	（3.0）	にぶい橙色（5YR7/4）	にぶい橙色（5YR7/4）			良好	砂粒◎白色微粒子◇	
4	8	22	SK	60	A1･A2･B1･B2	1	土師器	甕	口縁部	11.8	—	（6.0）	にぶい橙色（7.5YR7/3）	にぶい橙色（7.5YR7/3）	ナデ	ナデ	良好	砂粒◎	
5	8	22	SK	60	A1･A2･B1･B2	2	土師器	甕	口縁部	15.0	—	（10.9）	淡橙色（5YR8/3）	淡橙色（5YR8/3）	ナデ	ナデ	良好	砂粒◎	
6	8	22			B2-19	Ⅴ	土師器	坏	口縁部	11.0	—	（2.8）	にぶい橙色（7.5YR6/3）	にぶい黄橙色（7.5YR6/4）			良好	砂粒◇白色微粒子◇	
7	8	22			C2-11	Ⅳ	土師器	坏	口縁部	16.0	—	（2.8）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
8	8	22			C1-16	Ⅳ	土師器	高坏	坏部	—	—	（2.4）	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（7.5YR8/3）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
9	8	22			C1-23	Ⅳ	土師器	高坏	脚部	—	—	（2.7）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）			良好	砂粒○	
10	8	22	P	9	B2-23	1	須恵器	有台坏	口縁～体部	11.2	—	（3.7）	灰白色（N8/ ）	灰色（N5/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◎黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
11	8	22			B2-19	Ⅴ	須恵器	無台坏	口縁～底部	11.8	7.2	3.2	灰色（N6/ ）	灰色（N6/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色粒子○	佐渡小泊窯産
12	8	22			B2-15	Ⅴ	須恵器	無台坏	口縁～底部	12.4	6.2	3.4	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇ 黒色微粒子◇微砂粒○	佐渡小泊窯産
13	8	22			C1-17	Ⅳ	須恵器	無台坏	口縁部	11.6	—	（2.4）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子●黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
14	8	22			C3-2	Ⅴ	須恵器	無台坏	口縁部	12.0	—	（2.1）	灰色（N6/ ）	灰色（N6/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子◇	佐渡小泊窯産
15	8	22			C1-6		須恵器	無台坏	口縁～体部	12.2	—	（2.8）	灰色（N6/ ）	灰色（N6/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	やや不良	砂粒◇白色微粒子●黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
16	8	22			C1-8	Ⅳ	須恵器	無台坏	口縁部	11.9	—	（2.6）	灰色（N6/ ）	灰色（N6/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇白色微粒子▲黒色微粒子◇	北側開渠、佐渡小泊窯産
17	8	22			C1-8	Ⅴ	須恵器	無台坏	口縁部	12.8	—	（2.6）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	黒色微粒子●	佐渡小泊窯産
18	8	22			B1-24	Ⅴ	須恵器	無台坏	口縁部	12.9	—	（2.8）	灰色（N8/ ）	灰色（N8/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	黒色微粒子◇	佐渡小泊窯産
19	8	22			C1-13	Ⅳ	須恵器	無台坏	底部	—	6.5	（2.2）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇ 白色微粒子◇黒色微粒子●	佐渡小泊窯産
20	8	22			B3-4	Ⅳ	須恵器	無台坏	底部	—	6.6	（0.8）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子●	佐渡小泊窯産
21	8	22			C1-17	Ⅳ	須恵器	無台坏	底部	—	5.8	（1.1）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇ 白色微粒子◇黒色微粒子●	佐渡小泊窯産
22	8	22			A1-20	Ⅴ	須恵器	無台坏	底部	—	7.2	（1.4）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒▲ 白色微粒子●黒色微粒子◇	佐渡小泊窯産
23	8	22			B3-8	Ⅳ	須恵器	無台坏	底部	—	8.7	（1.3）	灰白色（N7/ ）	灰色（N6/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇ 白色微粒子●黒色微粒子◇	佐渡小泊窯産
24	8	22			C1-16	Ⅴ	須恵器	無台坏	底部	—	8.4	（1.3）	灰白色（N7/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子◇	佐渡小泊窯産
25	8	22			B1-24	Ⅴ	須恵器	有台坏	口縁～体部	10.9	7.8	（3.9）	灰色（N8/ ）	灰色（N8/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子●	佐渡小泊窯産
26	8	22			C1-17	Ⅳ	須恵器	有台坏	口縁～体部	14.3	—	（3.9）	灰白色（N8/ ）	灰白色（N7/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇白色微粒子◇黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
27	8	22			C1-14	Ⅳ	須恵器	蓋	つまみ部	—	—	（1.7）	灰白色（N6/ ）	灰白色（2.5Y8/1）	ロクロナデ	ロクロナデ	やや不良	砂粒◇白色微粒子○黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
28	8	22			—		須恵器	蓋	体部	—	—	（2.1）	灰白色（2.5Y8/1）	灰白色（2.5Y8/1）	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子◇	西側開渠、転用硯、佐渡小泊窯産
29	8	22			B2-19	Ⅴ	須恵器	蓋	体部	—	—	（1.8）	灰白色（2.5Y8/1）	灰白色（2.5Y8/1）	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	還元硬質	白色微粒子◇黒色微粒子◎	佐渡小泊窯産
30	8	22			C1-22	Ⅳ	須恵器	蓋	口縁～体部	13.0	—	（1.7）	灰色（N8/ ）	灰色（N8/ ）	ロクロナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇白色微粒子○黒色微粒子▲	佐渡小泊窯産
31	9	23			C3-2	Ⅴ	須恵器	盤	口縁～底部	13.8	10.0	2.0	灰色（N6/ ）	灰色（N5/ ）	ロクロナデ 底面：回転ヘラ切り	ロクロナデ	還元硬質	白色粒子○	佐渡小泊窯産
32	9	23			C1-7･16･21･22	Ⅴ	須恵器	甕	胴部	—	—	36.0	灰色（10Y7/1）	灰色（10Y5/1）	平行叩き目	同心円状当て具痕	還元硬質	白色微粒子◇	
33	9	23			B1-21	Ⅴ	須恵器	甕	胴部	—	—	（7.9）	灰白（N7/ ）	灰色（N5/ ）	平行叩き目→カキメ	同心円状当て具痕	還元硬質	砂粒▲白色微粒子▲黒色微粒子◇	開渠
34	9	23			C1-11	Ⅳ	須恵器	壺	胴部	—	—	（9.5）	灰色（N6/ ） 釉薬：暗緑灰（7.5GY3/1）	灰色（N6/ ） 釉薬：暗緑灰（7.5GY3/1）	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒◇小礫◇ 白色微粒子◇黒色微粒子▲	一部に自然釉付着、把手が貼り付けられている、佐渡小泊窯産
35	9	23			B2-19	Ⅴ	土師器	無台椀	口縁～底部	16.0	6.4	4.8	浅黄橙色（7.5YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	ロクロナデ、ロクロケズリ 底面:回転糸切り	ロクロナデ	良好	砂粒△白色微粒子◇	
36	9	23			C1-20	Ⅳ	土師器	無台椀	口縁部	12.6	—	（3.9）	浅黄橙色（7.5YR8/4）	浅黄橙色（7.5YR8/4）			良好	砂粒●白色微粒子▲	
37	9	23			C1-11	Ⅳ	土師器	無台椀	口縁部	13.0	—	（3.1）	淡橙色（5YR8/3）	淡橙色（5YR8/3）			良好	砂粒▲白色微粒子◇	
38	9	23			C2-11	Ⅳ	土師器	無台椀	底部	—	6.0	（1.6）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）			良好	砂粒▲白色微粒子▲	
39	9	23			C2-5	Ⅳ	土師器	無台椀	底部	—	7.0	（2.5）	灰白色（7.5YR8/2）	灰白色（7.5YR8/2）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
40	9	23			B2-23	Ⅴ	土師器	無台椀	底部	—	6.0	（1.5）	灰白色（2.5Y8/2）	灰白色（2.5Y8/2）			良好	砂粒△白色微粒子◇	
41	9	23			C2-24	Ⅴ	土師器	無台椀	底部	—	6.0	（1.6）	灰白色（2.5Y8/2）	灰白色（2.5Y8/2）	底面：回転糸切り		良好	砂粒●白色微粒子◇	
42	9	23			C1-9	Ⅳ	土師器	甕	口縁部	—	—	（3.1）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）			良好	砂粒◇白色微粒子◇	
43	9	23			C1-12	Ⅴ	土師器	甕	口縁部	—	—	（2.3）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）	ロクロナデ	ロクロナデ	良好	砂粒●白色微粒子◇	
44	9	23			廃土	-	土師器	甕	口縁部	—	—	（2.9）	淡黄色（2Y8/4）	淡黄色（2Y8/4）			良好	砂粒◇白色微粒子◇	
45	9	23			B2-19	Ⅳ	土師器	鍋	口縁部	—	—	（3.9）	にぶい橙色（5YR7/4）	にぶい橙色（5YR7/4）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
46	9	23			B2-21	Ⅳ	土師器	鍋	口縁部	—	—	（3.9）	橙色（5YR6/6）	橙色（5YR6/6）			良好	砂粒▲白色微粒子◇	
47	9	23			C1-5	Ⅳ	土師器	甕	底部	—	5.0	（2.1）	浅黄橙色（7.5YR8/3）	浅黄橙色（7.5YR8/3）			良好	砂粒△白色微粒子◇	
48	9	23			B2-24	Ⅳ	土師器	甕	底部	—	6.0	（2.1）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	橙色（2.5YR7/6）			良好	砂粒◇白色微粒子◇	
49	9	23			C1-8	Ⅴ	土師器	甕	底部	—	7.0	（2.0）	浅黄橙色（7.5YR8/3）	橙色（2.5YR7/6）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
50	9	23			B1-24	Ⅳ	土師器	甕	底部	—	7.0	（2.1）	淡橙色（5YR8/4）	橙色（2.5YR7/6）			良好	砂粒△白色微粒子◇	
51	9	23			B1-24	Ⅴ	土師器	甕	底部	—	7.0	（3.1）	淡黄色（2.5Y8/3）	淡黄色（2.5Y8/3）			良好	砂粒●白色微粒子◇	
52	9	23			B2-9	Ⅴ	土師器	甕	底部	—	6.6	（4.9）	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）	底面：回転糸切り		良好	砂粒●	
53	9	24			B2-9	Ⅴ	土師器	甕	胴部	—	—	（12.0）	にぶい黄橙色（5YR7/4）	にぶい黄橙色（5YR7/4）	擬格子状叩き目		良好	砂粒▲白色微粒子◇	
54	9	24			B2-9	Ⅴ	土師器	甕	胴部	—	—	（16.3）	にぶい橙色（5YR7/2）	にぶい橙色（5YR7/2）	擬格子状叩き目		良好	砂粒▲白色微粒子◇	
55	9	24			B2-9	Ⅴ	土師器	甕	胴部	—	—	（13.0）	にぶい黄橙色（5YR7/3）	にぶい黄橙色（5YR7/3）	擬格子状叩き目		良好	砂粒▲白色微粒子◇	
56	9	24			B2-19	Ⅴ	土師器	甕	底部	—	3.1	（7.6）	淡黄色（2.5Y8/3）	淡黄色（2.5Y8/3）	平行叩き目	ヘラナデ	良好	砂粒▲白色微粒子◇	外面にスス付着
57	10	24	SE	47	D3-6	1	珠洲焼	壺	口縁部～肩部	17.5	—	（7.8）	灰色（N5/ ）	灰色（N5/ ）	口縁：ナデ 肩部：平行タタキ	口縁：ナデ 肩部：無文の当て具痕	還元硬質	砂粒▲ 白色微粒子◎黒色微粒子◇	
61	10	24			C2-5	Ⅳ	珠洲焼	片口鉢	底部	—	15.0	（6.4）	灰白色（7.5Y5/1）	灰白色（10YR7/1）	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ	還元硬質	砂粒▲白色微粒子△黒色微粒子●	内面に6条の卸目
62	10	24			C2-5	Ⅳ	瀬戸焼	皿	口縁部	13.0	—	（2.1）	淡黄色（5Y8/3） 釉薬：浅黄色（5Y7/3）	淡黄色（5Y8/3） 釉薬：浅黄色（5Y7/3）			良好	黒色微粒子▲	
63	10	24			D2-16	Ⅱ	肥前陶磁	皿	底部	—	5.0	（1.9）	灰白色（2.5Y8/2） 釉薬：明緑灰（7.5GY8/1）	灰白色（2.5Y8/2） 釉薬：明緑灰（7.5GY8/1）		見込部：砂目積み	良好	黒色微粒子▲	

木製品

報告番号	図面図版	写真図版	遺構種別	遺構名	グリッド	層位	器種	木取り	法量(cm) 口径	底径	厚さ	備考
59	10	24	SE	47	D3-6	6	木片	板目取り	9.7	10.6	0.8	
60	10	24	SE	47	D3-6	7	木片	板目取り	13.1	3.8	0.5	
64	10	24	P	1	B1-9	2	柱	削り出し	53.5	12.4	12.0	
65	10	24			B3-3	Ⅳ	杭	削り出し	10.2	3.8	3.2	

金属製品

報告番号	図面図版	写真図版	遺構種別	遺構名	グリッド	層位	器種	法量(cm) 口径	底径	厚さ	重量(g)	備考
66	10	24			C1-19	Ⅳ	鍛冶滓	5.7	5.7	4.3	125.4	

石製品

報告番号	図面図版	写真図版	遺構種別	遺構名	グリッド	層位	器種	法量(cm) 口径	底径	厚さ	重量(g)	備考
58	10	24	SE	47	D3-6	1	硯	—	2.0	—	50.1	硯縁に墨

附表３　長嶺江添の塚 出土遺物観察表

土器・陶磁器類

報告番号	図面図版	写真図版	調査区画	層位	種別	器種	残存部位	法量(cm) 口径	底径	器高	残存高	色調	絵柄	調整・文様 外面	内面	焼成	鉱物	備考
67	14	28	5区	1	肥前系磁器	碗	口縁～体部	—	—	—	3.2	釉色:内外面灰白色(5GY8/1) 素地:灰白色(2.5Y8/1)	外面体部二重網目文、 内面網目文	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良	白色微粒子わずか	肥前磁器染付網目文碗、18世紀前半～中頃
68	14	28	6区	1	肥前系磁器	碗	体～底部	—	(4.2)	—	2.1	釉色:内外面明緑灰色(10GY8/1) 素地:灰白色(2.5Y8/1)	外面高台に二重圏線、 体部絵柄不明	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良	白色微粒子わずか	肥前磁器(波佐見)染付碗(くらわんか手) 18世紀後半～19世紀初頭、高台畳付に砂付着 外底面に銘款
69	14	28	4区	2	肥前系磁器	碗	体～底部	—	(3.6)	—	2.8	釉色:内外面灰白色(5GY8/1) 素地:灰白色(2.5Y8/2)	外面高台に二重圏線、 体部絵柄不明	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良	黒色微粒子	肥前磁器(波佐見)染付碗(くらわんか手) 18世紀後半～19世紀初頭、二次被熱
70	14	28	4区	6	肥前系磁器	碗	底部	—	(5.4)	—	2.3	釉色:内外面明青白色 素地:灰白色(N8/)		ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良	白色・黒色微粒子わずか	肥前磁器筒型碗(18世紀後半)ヵ
71	14	28	1区	2	京・信楽系陶器	徳利	体部	—	—	—	8.1	釉色:外面灰オリーブ色(7.5Y6/1) 素地:灰白色(5Y7/1)	外面に草花文 (崩れた山水文ヵ)	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良		京・信楽系陶器鉄絵灰釉徳利、19世紀中頃
72	14	28	5区	4	肥前系陶器		底部	—	(5.0)	—	1.9	釉色:内外面淡黄色(5Y8/3) 素地:灰白色(2.5Y8/1)		ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	良	白色微粒子わずか	肥前陶器呉器手碗、17世紀後半、内外面貫入
73	14	28	6区	1	珠洲焼	甕	胴部	—	—	—	—	外:灰色(7.5Y6/1) 内:灰色(7.5Y6/1)		斜行タタキ	押圧痕	良	白色・黒色微粒子少量、 長石微量、灰白色砂粒微量	
74	14	28	6区	7	珠洲焼	甕	胴部	—	—	—	—	外:灰色(10Y5/1) 内:灰色(10Y6/1)		斜行タタキ	押圧痕	良	白色・黒色微粒子少量、 長石微量、骨針微量	
75	14	28	5区	4	珠洲焼	甕	胴部	—	—	—	—	外:灰色(N6/) 内:灰色(N5/)		斜行タタキ	押圧痕	良	白色・黒色微粒子微量、 骨針微量	
76	14	28	5区	1	須恵器	無台坏	体部	—	(8.2)	—	0.8	外:灰色(10Y5/1) 内:灰色(10Y5/1)		ロクロナデ	回転ヘラ切り	良	白色微粒子少量、骨針微量、 砂粒微量	
77	14	28	6区	2	須恵器	壺	胴部	—	—	—	—	外:暗褐色(7.5YR3/4) 内:暗褐色(7.5YR3/4) 胎土:灰色		ナデ→沈線一条	同心円状の圧痕	良	白色・黒色微粒子少量	内外面自然降灰
78	14	28	1区	1	須恵器	甕	胴部	—	—	—	—	外:黒色(7.5Y2/1) 内:灰色(7.5Y6/1)		タタキ	ナデ、ハケメ	良	白色微粒子少量、砂粒微量	外面自然降灰

鉄製品

報告番号	図面図版	写真図版	調査区画	層位	種別	器種	残存部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
79	14	28	3区	2	鉄製品	鎌	刃部、口金	10.8+	3.45	0.5	90.3	中子:長さ4.1cm以上、厚さ0.7cm 口金:外径2.9～3.0cm、内径1.7cm
80	14	28	3区	2	鉄製品	刀子	刃部	3.6+	2.5	0.55	9.9	刃物以外の可能性あり

石製品

報告番号	図面図版	写真図版	調査区画	層位	種別	器種	残存部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
81	14	28	4区	4	砥石	凝灰岩	完形 もしくは破片	6.8+	4.1	4.0	166.5	砥面は4側面
82	15	28	3区	1	石塔台座ヵ	砂岩	破片	27.5+	23.5	4.8	4090	上面に長さ12.5cm以上、幅7.7cm 深さ約2.5cmの長方形孔あり

長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚　位置図

図版 1

【原図】1:5,000 国土基本図 Ⅷ-EE [平成 19(2007)年測量]

図版 2

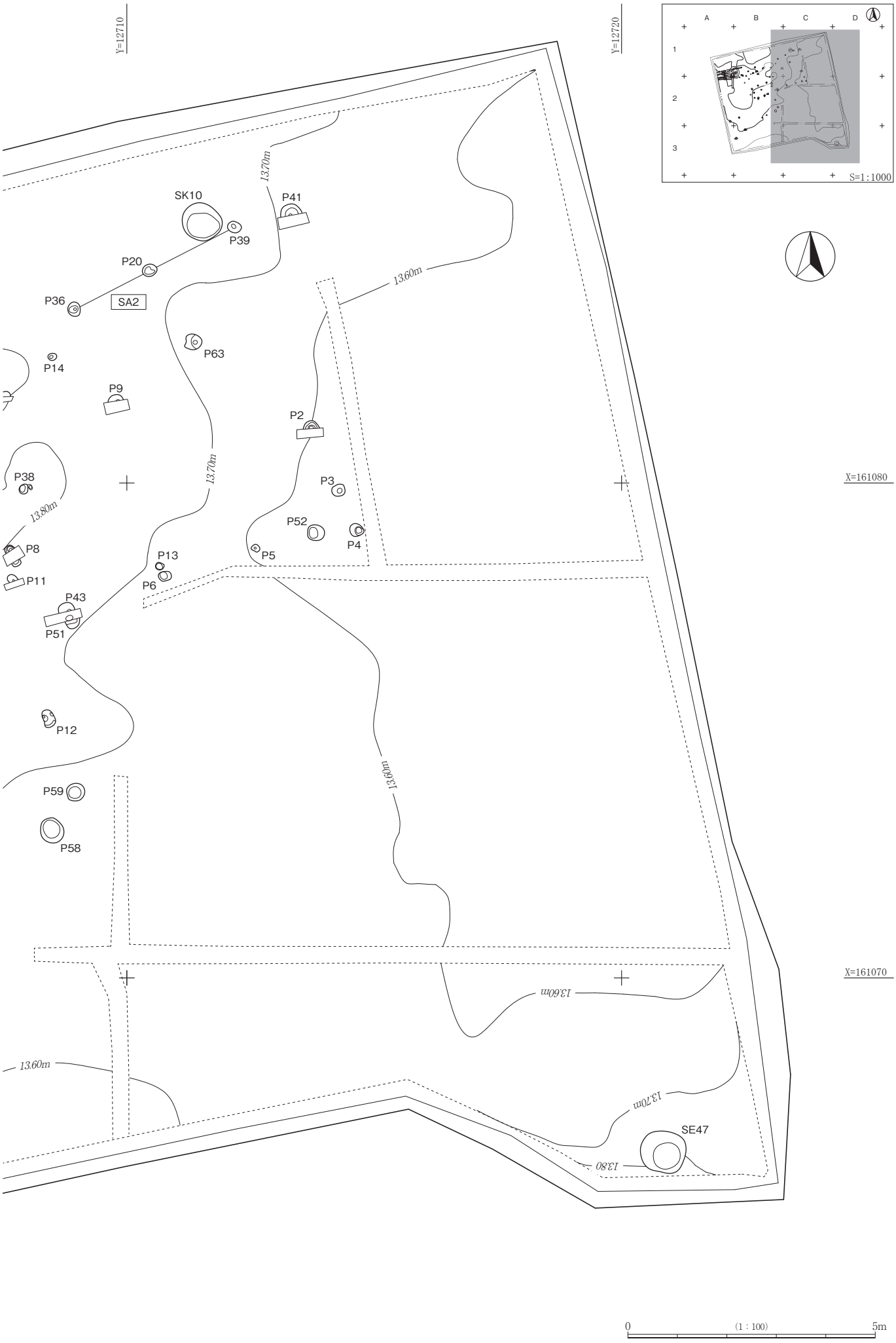
長嶺川田遺跡　全体図

長嶺川田遺跡　分割図 1

A
B
C
D
1
2
3
S=1:1000
Y=12700
Y=12710
X=161080
X=161070
P1
SK10
P20
P36
SA2
P63
P14
P9
13.80m
13.70m
13.80m
SK60
P18
P61
P15
P40
P19
P16
SA1
P24
P17
P56
P22
P25
SD55
T3
SD54
P21
P57
P7
P38
P37
P23
P35
SD53
T2
T1
P44
P8
P11
P29
P26
P42
P13
P6
P43
P28
P27
P51
P30
SB1
P34
P31
P64
P32
P33
P12
13.70m
13.80m
P59
P58
P62
P50
P46
P49
13.70m
P48
13.60m
P45
0
(1 : 100)
5m

図版４

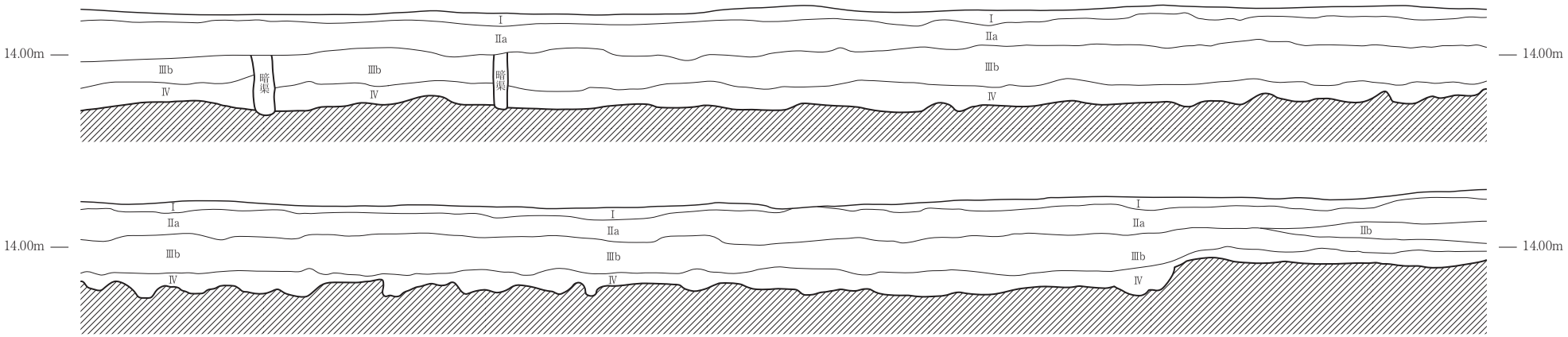
長嶺川田遺跡　分割図２



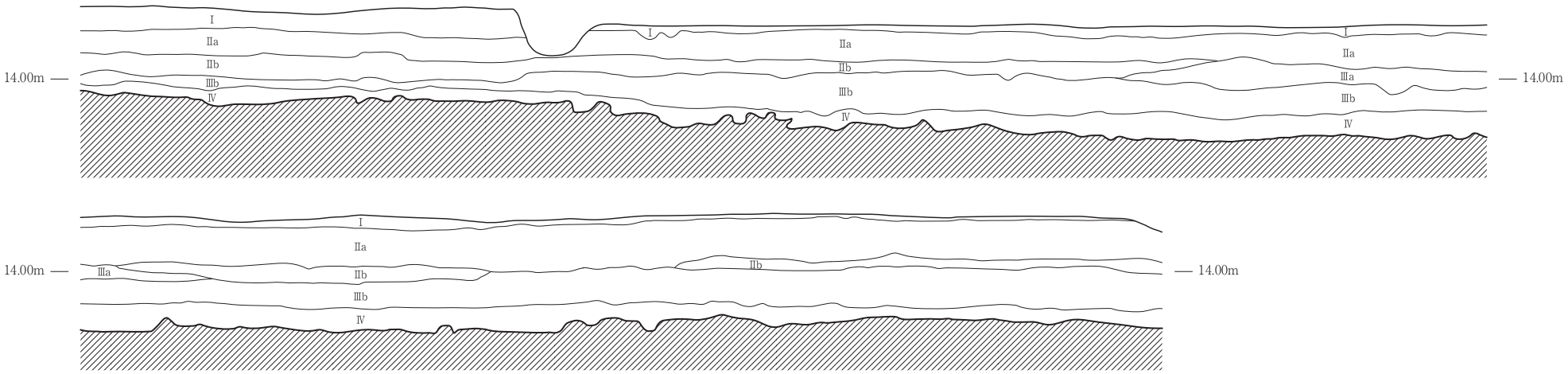
長嶺川田遺跡　東壁・南壁断面図

図版 5

東壁断面図



南壁断面図

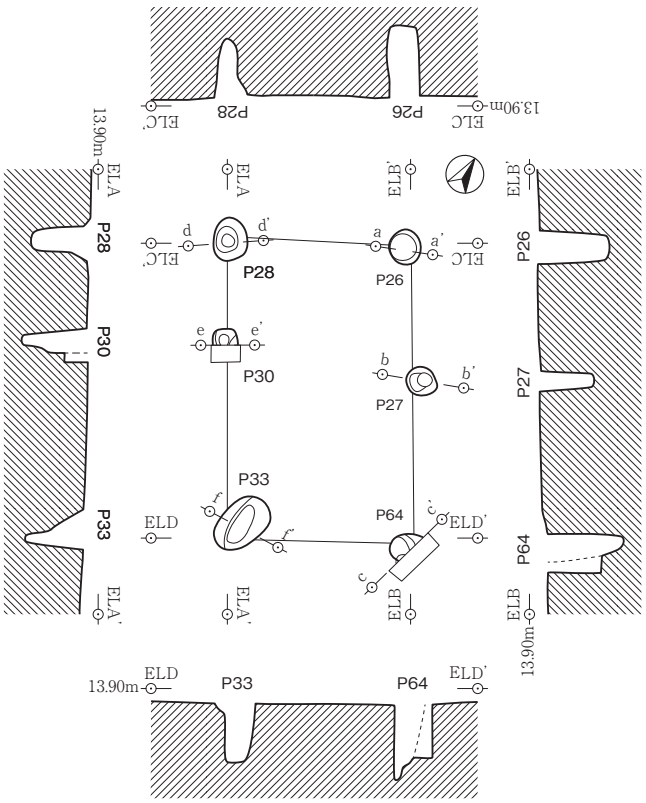


I　表土。畑地化した際の耕作土層。
IIa　灰色粘質土（N6/）
　　粘性があり、しまりがある。現代の水田耕作土を基本とする粘土層。
IIb　灰色粘質土（N6/）
　　粘性があり、しまりがある。現代の水田床土。酸化が明瞭である。
IIIa　灰色粘質土（N6/）
　　粘性があり、しまりがある。近代以前の水田耕作土である。
IIIb　灰色粘質土（N6/）
　　粘性があり、しまりがある。近代以前の水田耕作土である。酸化が明瞭である。
IV　褐灰色粘土（10YR4/1）
　　粘性があり、しまりが弱い。φ1mmの炭化物を微量含む。

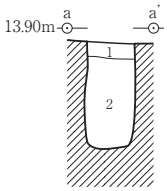
0　（1：50）　2m

長嶺川田遺跡　遺構個別図 1

SB1

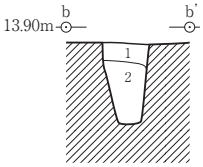


P26



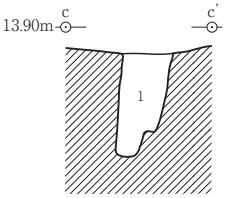
< P26 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。
　還元化した地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　還元化した地山混在。

P27



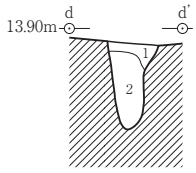
< P27>
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。
　地山混在。
2　紫灰色粘質土(5P5/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。

P64



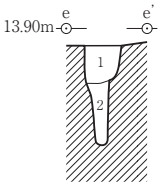
< P64>
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を
　少量含む。
　還元化した地山混在。

P28



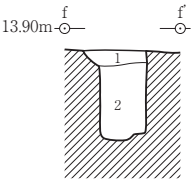
< P28 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。
　地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　還元化した地山が少量混在。

P30



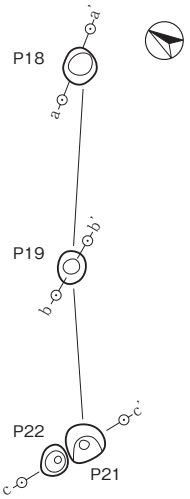
< P30 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を
　微量含む。地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりが
　かなり弱い。
　還元化した地山が微量混在。

P33

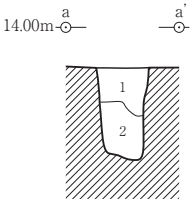


< P33 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。
　地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mm～10mmの還元化
　した地山が多量混在。

SA1

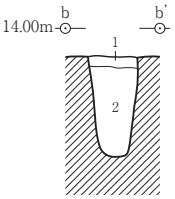


P18



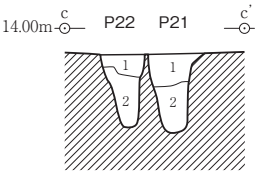
< P18 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　還元化した地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。

P19



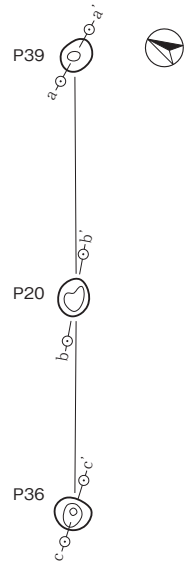
< P19 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を含む。
　地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。

P21･P22

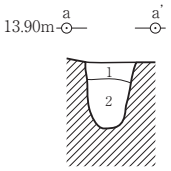


< P21･P22 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を中量含む。
　地山混在。
2　紫灰色粘質土(5P5/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。

SA2

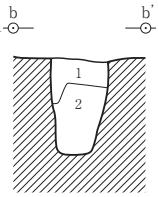


P39



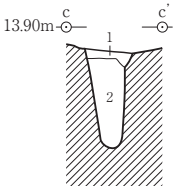
< P39 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　還元化した地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B3/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　還元化した地山が微量混在。

P20



< P20 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を微量含む。
　地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　還元化した地山混在。

P36



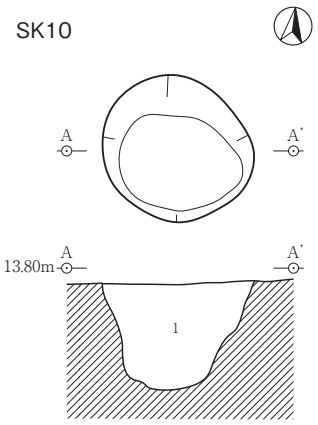
< P36 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を含む。
　地山混在。
2　暗青灰色粘質土(5B3/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。

0　断面図（1：40）　2m

0　平面図（1：60）　3m

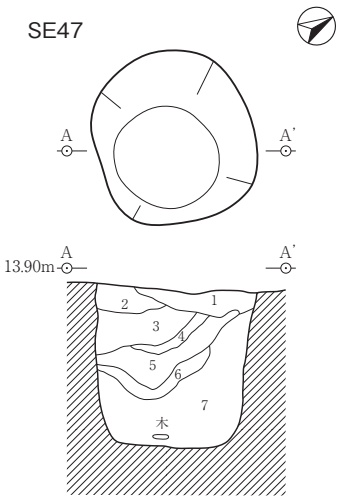
長嶺川田遺跡　遺構個別図 2

SK10



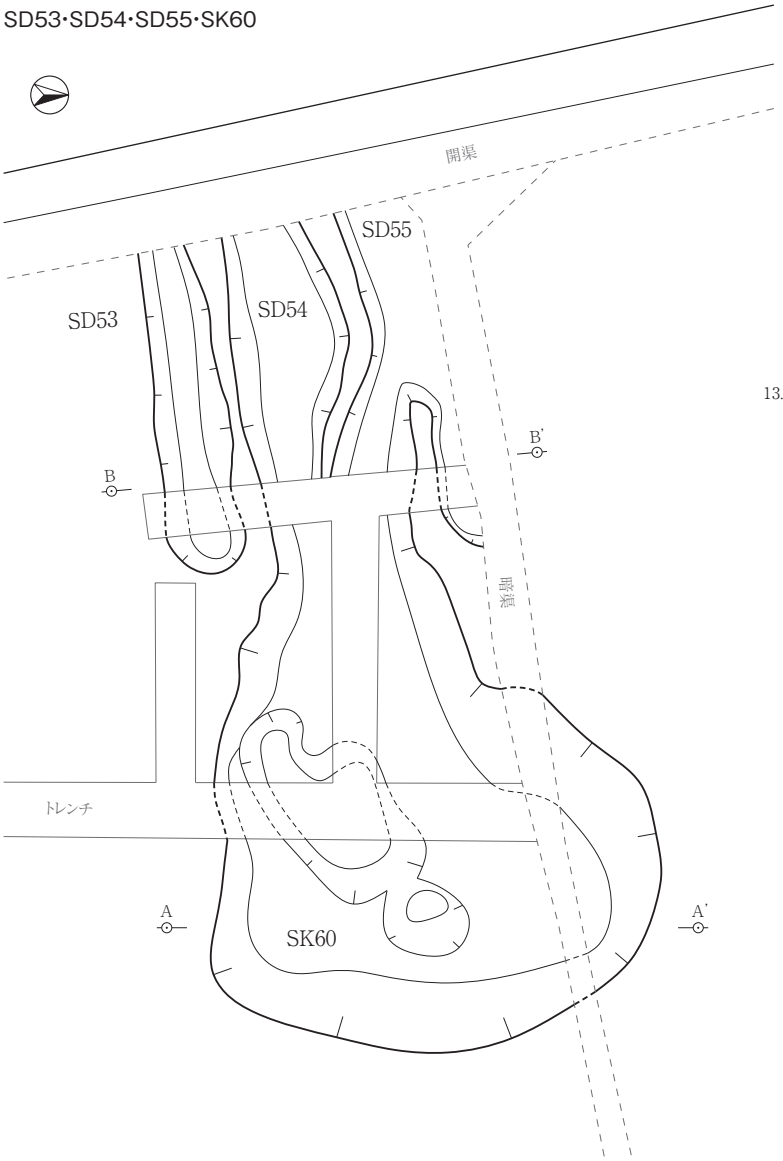
< SK10>
1　暗青灰色粘質土(5B4/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ2～3cmの炭化物ブロック少量含む。
　φ1～2mmの地山ブロック混在。

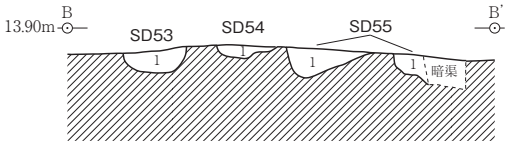
SE47



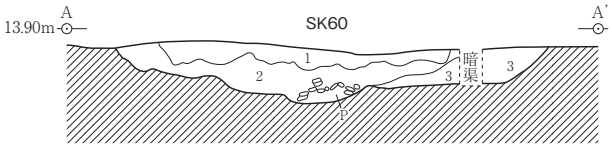
< SE47>
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりがある。
　φ1mmの炭化物を少量含む。地山混在。
2　明青灰色粘質土(10BG7/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　φ1mmの炭化物を少量含む。
　φ1mmの明オリーブ灰色（5GY7/1）の砂を少量含む。
3　青灰色粘質土(10BG5/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　φ1mmの炭化物を少量含む。
4　青灰色粘質土(10BG6/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。φ1mmの炭化物を微量含む。
　φ1mmの緑灰色(10BG6/1) シルト質ブロック多量含む。
5　青灰色粘質土(10BG5/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　φ1mmの緑灰色(10BG6/1) シルト質ブロック少量含む。
6　暗灰色粘質土(N3/)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。炭化物集積層。
7　青灰色粘質土(10BG5/1)
　粘性があり、しまりがかなり弱い。
　φ1mmの緑灰色(10BG6/1)シルト質ブロック少量含む。
　底部に板状木片あり。

SD53･SD54･SD55･SK60





< SD53 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1～3mmの炭化物を少量含む。地山混在。
< SD54 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1～5mmの炭化物を少量含む。地山混在。
< SD55 >
1　紫灰色粘質土(5P6/1)
　粘性があり、しまりが弱い。
　φ1mmの炭化物を少量含む。地山混在。



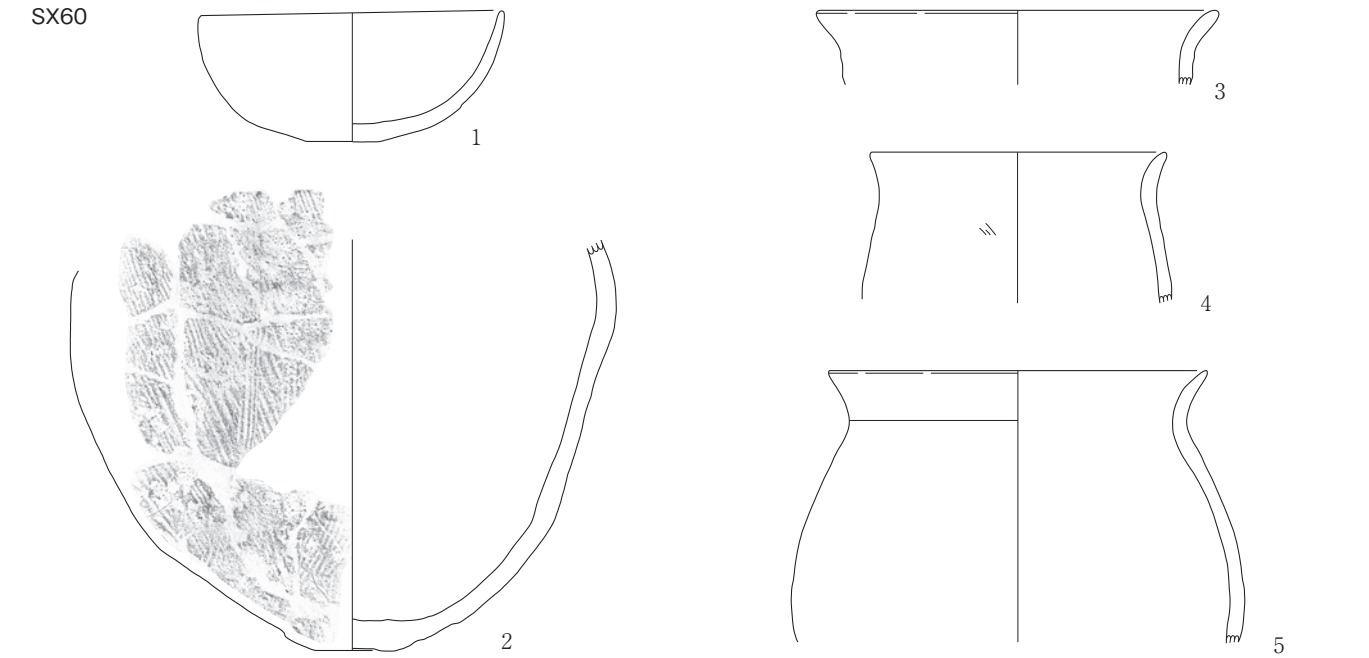
< SK60>
1　灰白色粘質土(10YR8/2)
　粘性があり、しまりがある。
　黒斑を中量含む。φ1mmの炭化物を中量含む。
2　灰白色粘質土(10YR8/2)
　粘性があり、しまりがある。
3　青灰色粘質土(5B5/1)
　粘性があり、しまりがある。

0　(1：40)　2m

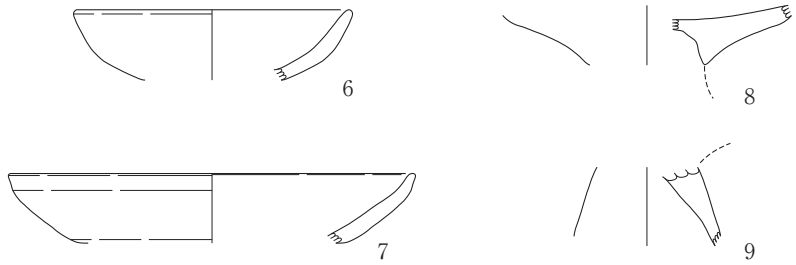
長嶺川田遺跡　出土遺物１

古墳時代の遺物

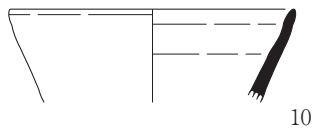
SX60



包含層

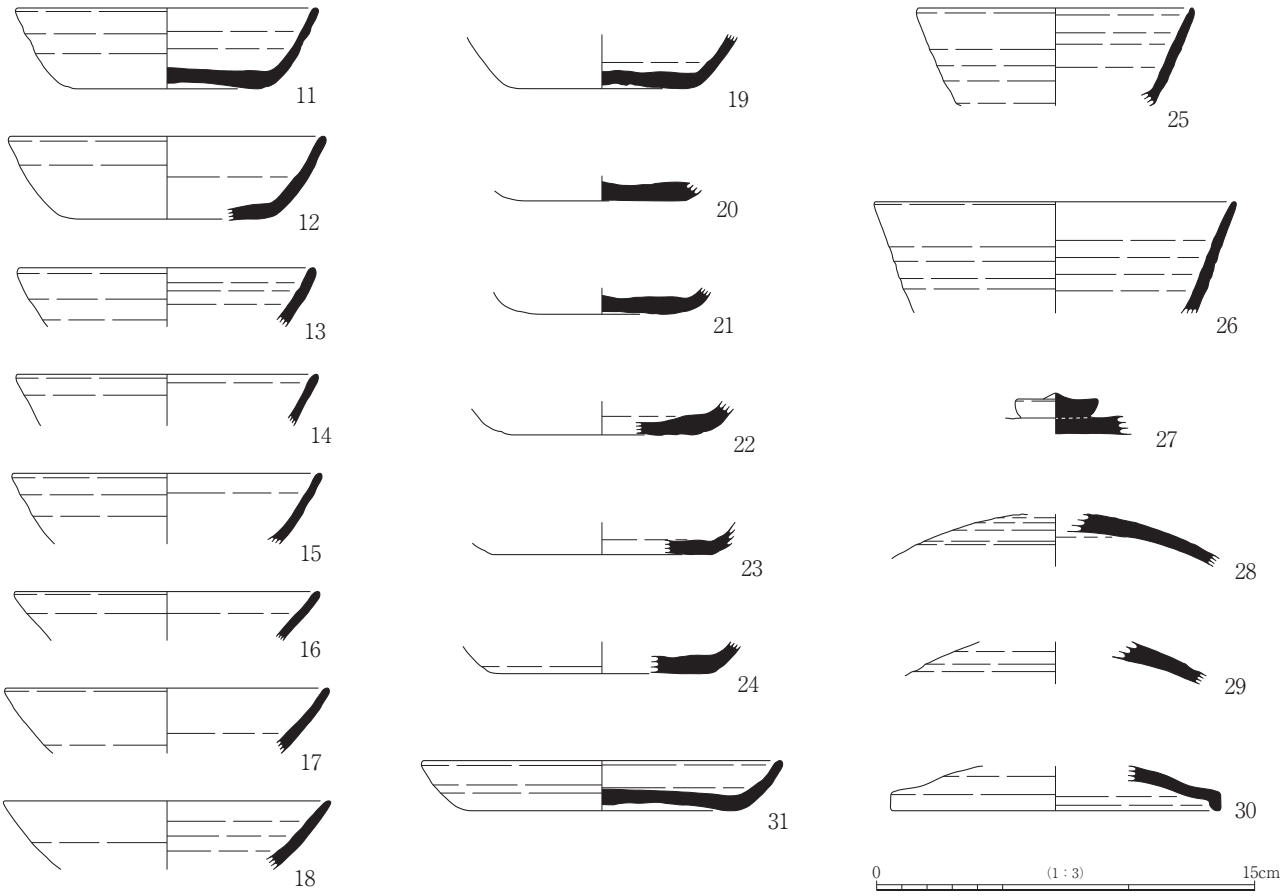


P9

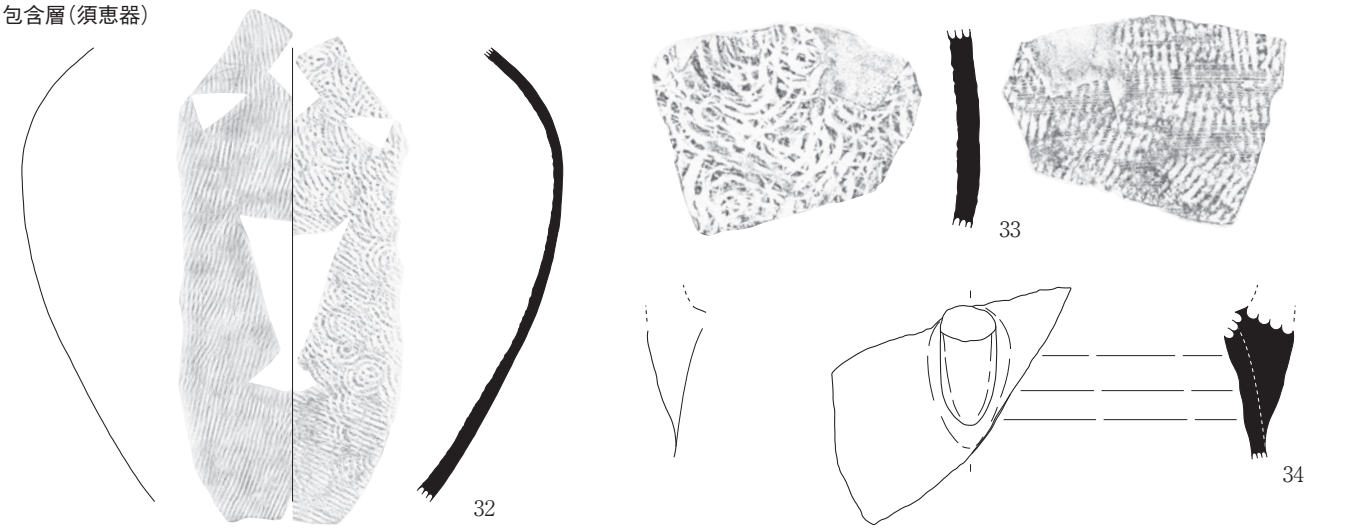


古代の遺物

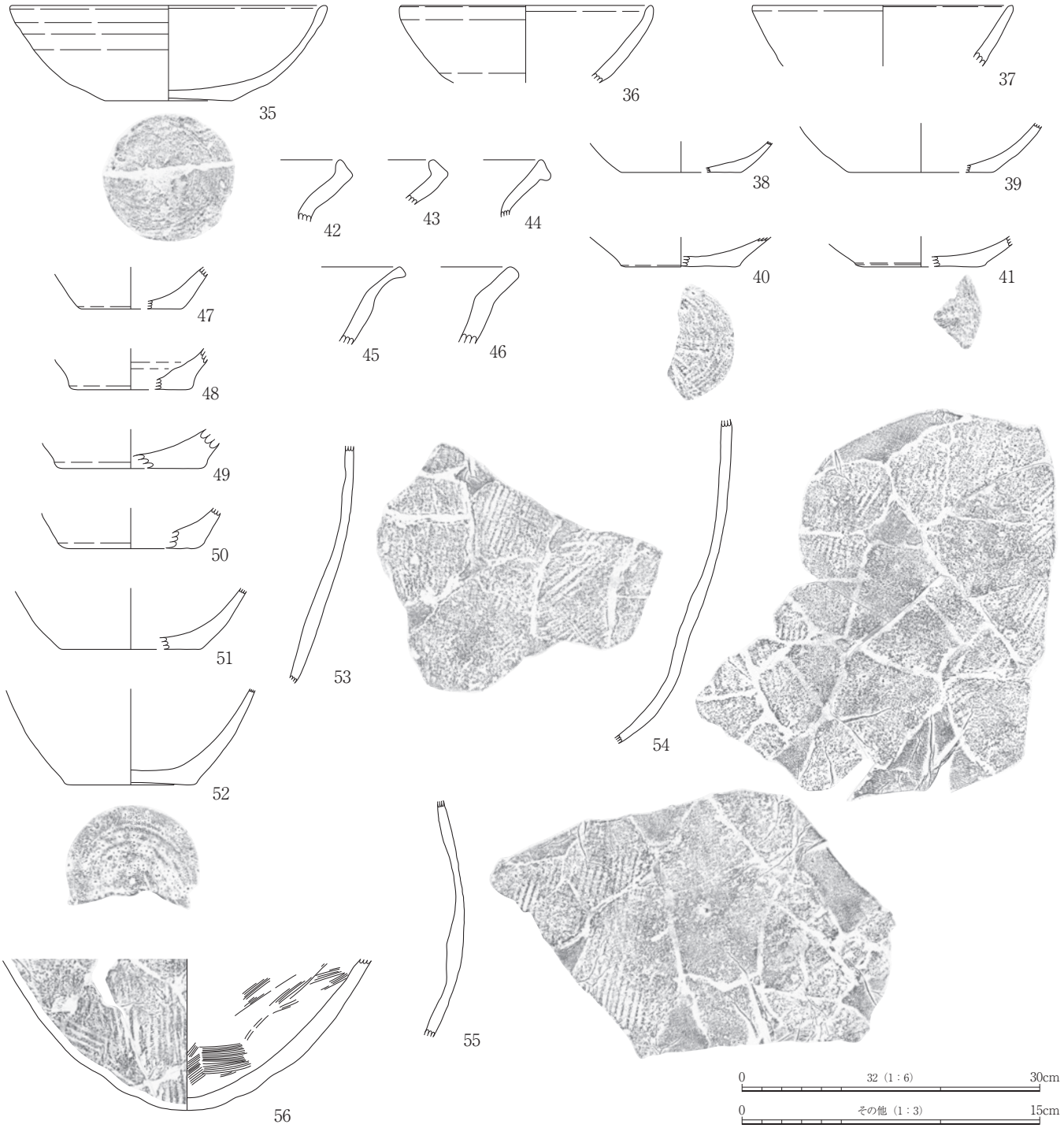
包含層



包含層（須恵器）



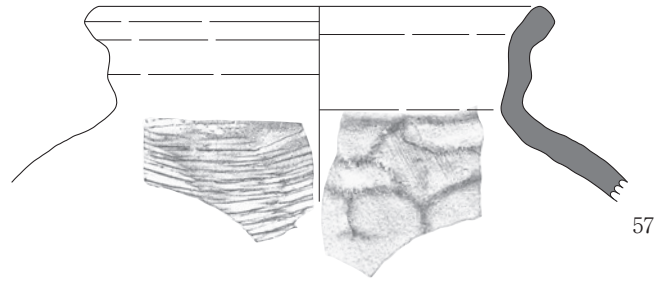
包含層（土師器）



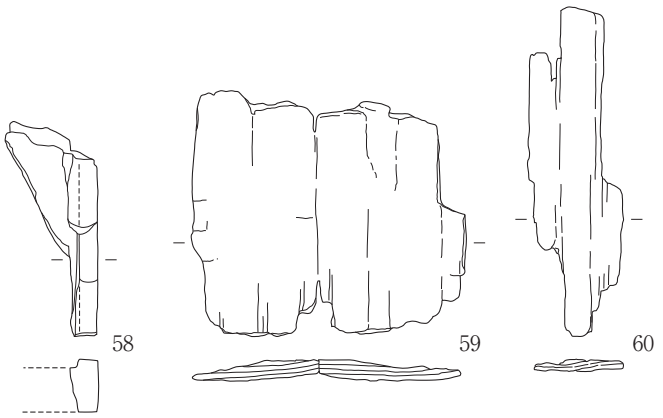
長嶺川田遺跡　出土遺物 3

中世の遺物

SE47

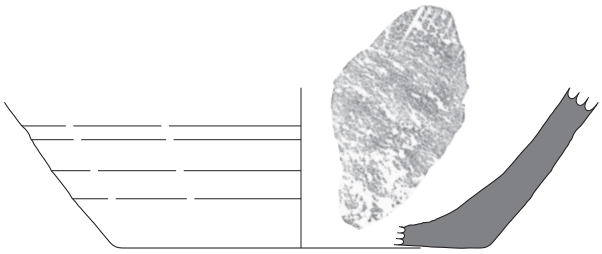


57

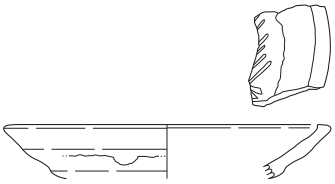


58　59　60

包含層

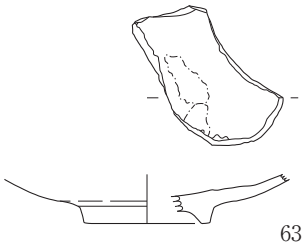


61



62

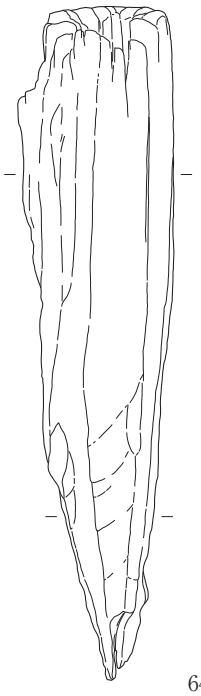
近世の遺物



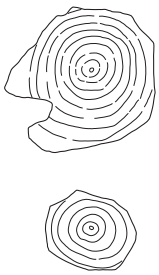
63

時期不明の遺物

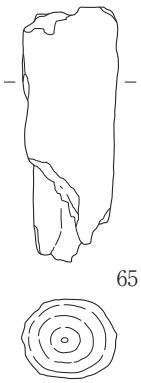
P1



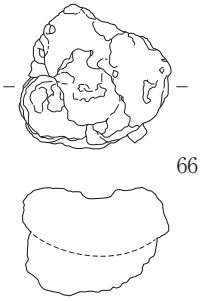
64



包含層



65



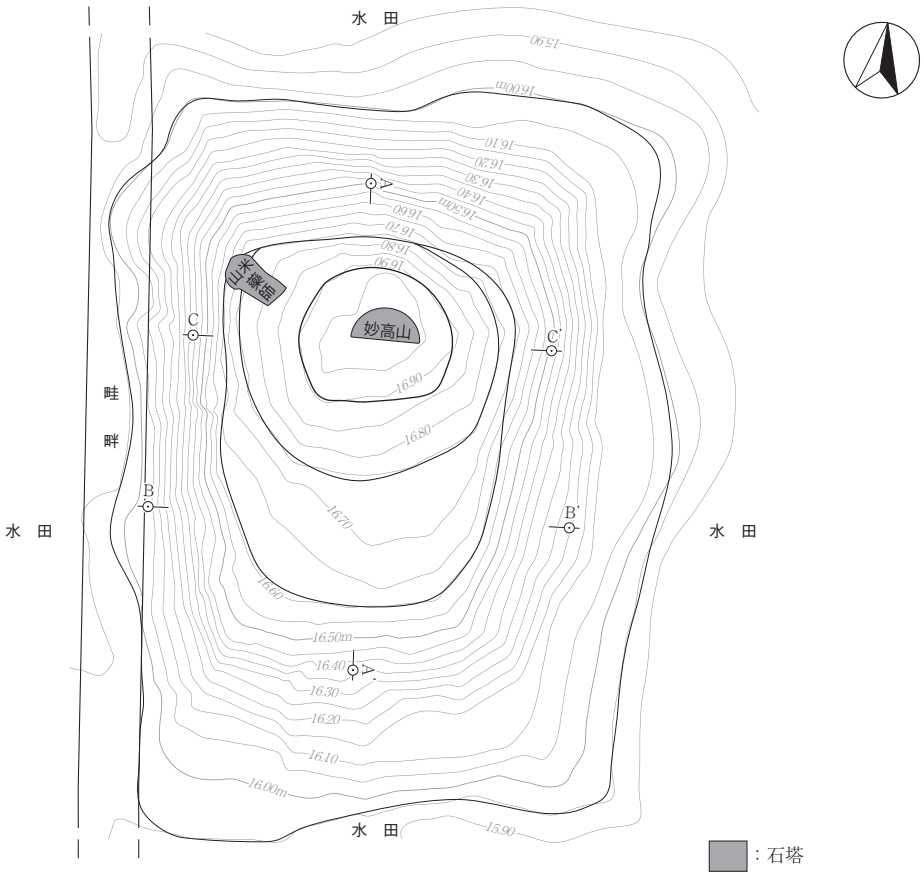
66

0　木1（1：6）　30cm

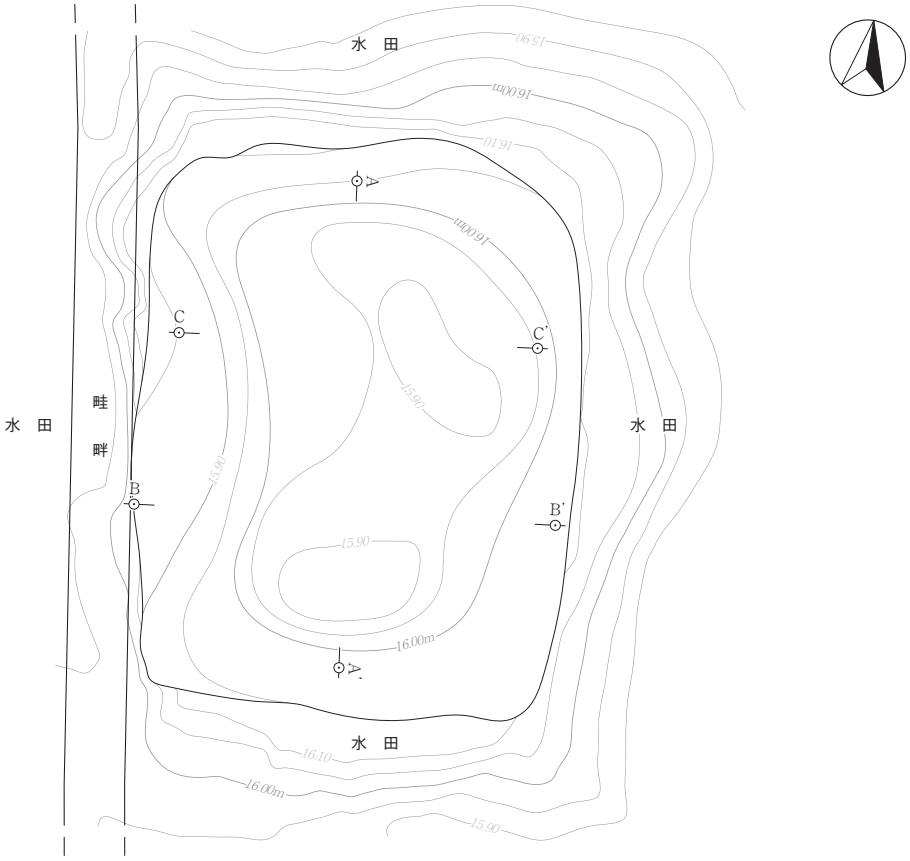
0　その他（1：3）　15cm

長嶺江添の塚　位置図

長嶺江添の塚　遺構個別図 1



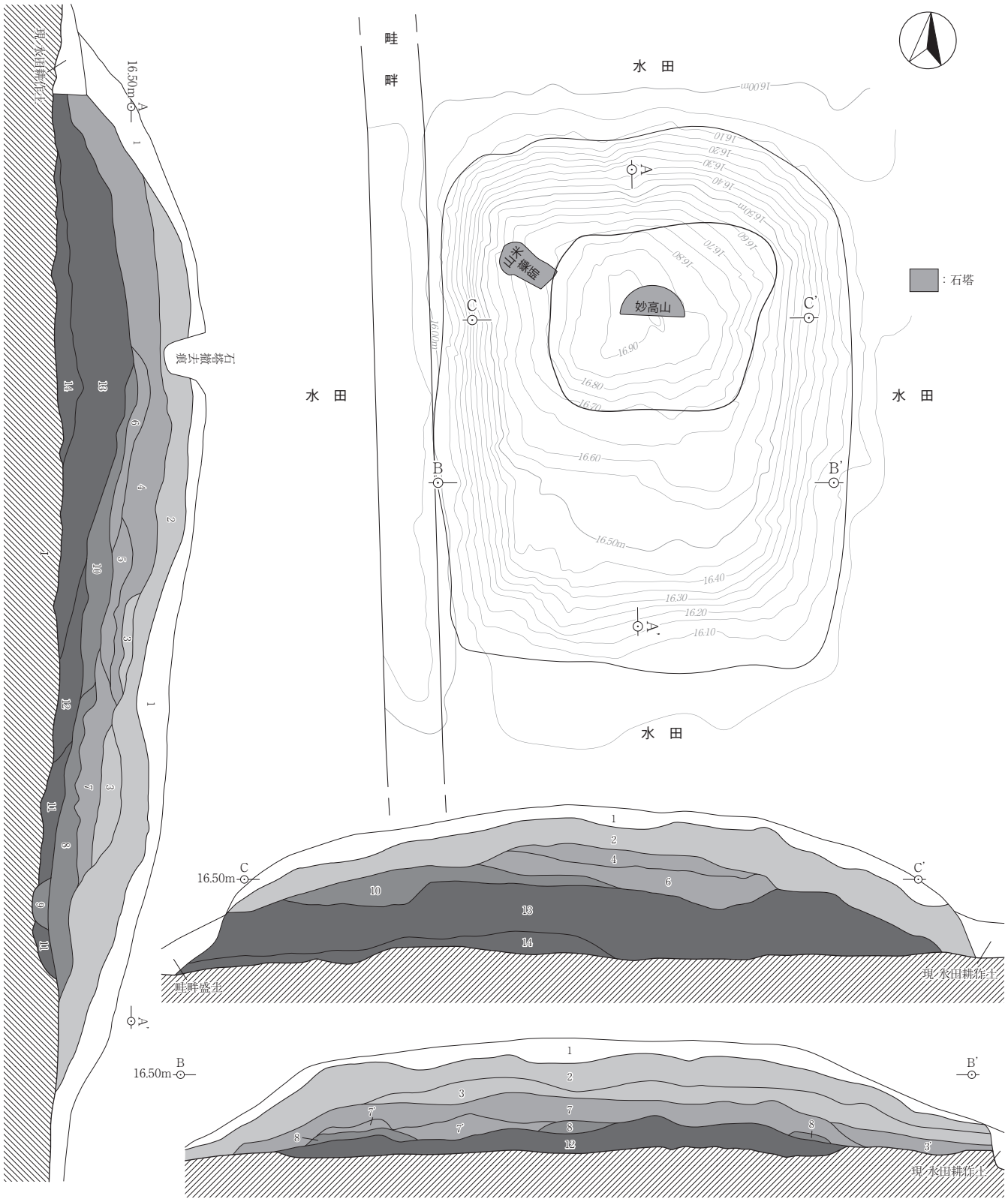
現　況



基 盤 面

0　(1：100)　5m

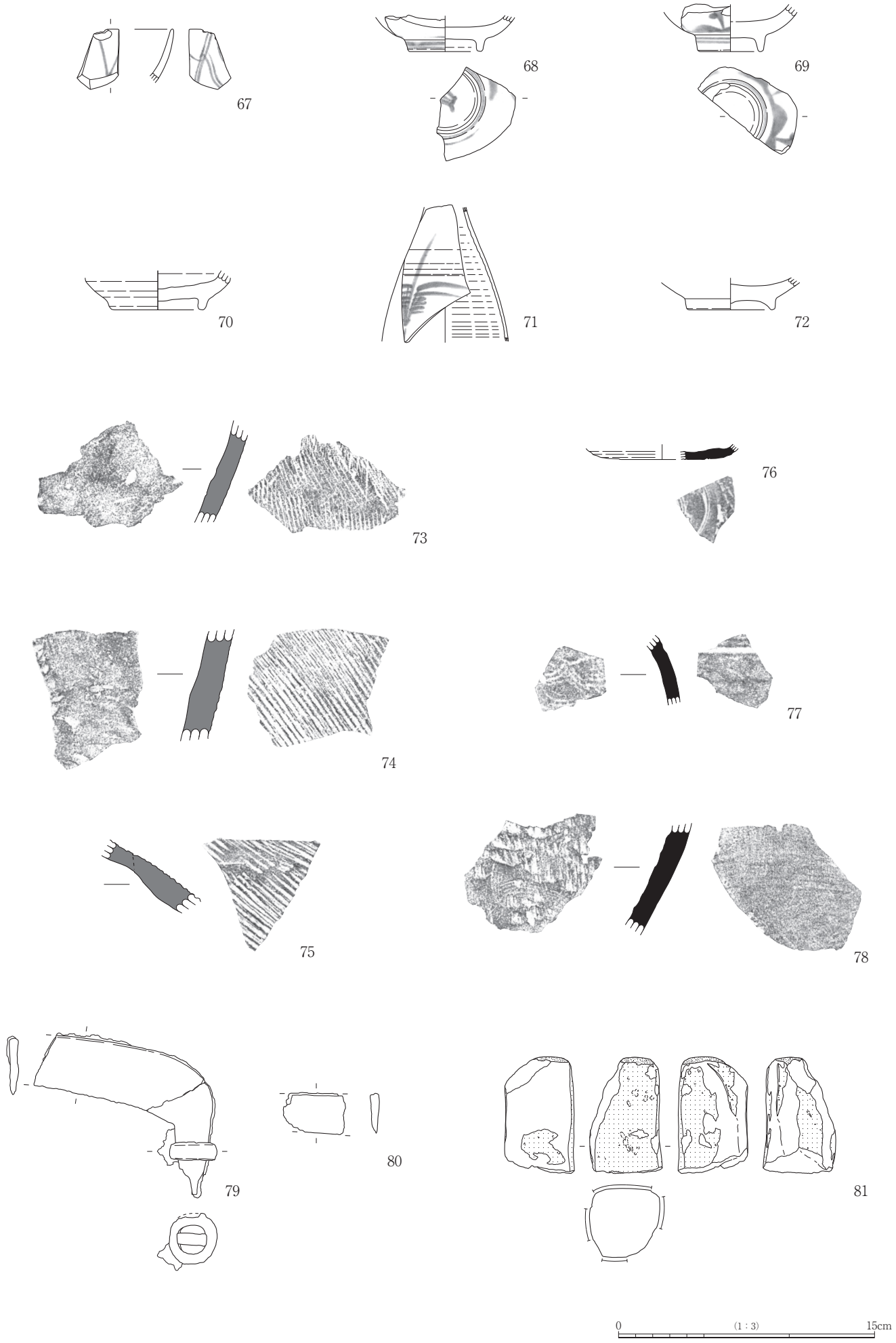
長嶺江添の塚　遺構個別図２

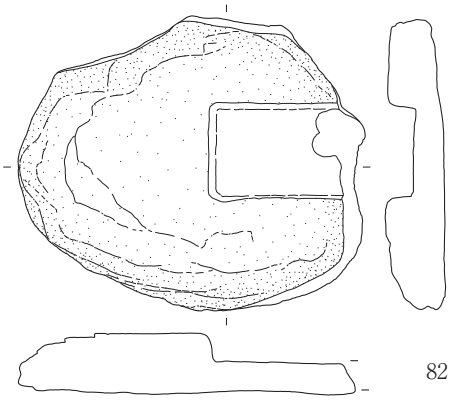


1　褐灰色土（10YR4/1）しまり、粘性共やや弱。塚表土。古代・中世、現代遺物を含む事から、植栽に伴う客土と思われる。
2　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり、粘性あり。φ2～3mmの粘土ブロック、炭化物粒子などを少量含む。塚構築土。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり、粘性やや強。φ5～10mmの粘土ブロックをやや多く含む。塚構築土。
3'　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり、粘性やや強。φ5～10mmの粘土ブロックを3層より多く含む。塚構築土。
4　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりあり、粘性やや強。φ5mm程度の粘土ブロックをわずかに含む。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり、粘性やや強。φ2～3mmの粘土ブロックを小量含む。
6　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりやや強、粘性強。φ2～3mmの粘土ブロックをわずかに含む。
7　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりあり、粘性やや強。粘土を主体にφ5mm程度の粘土ブロックを多量に含む。塚構築土。
7'　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりあり、粘性やや強。φ5mm程度の粘土ブロックを7層より多く含む。塚構築土。
8　褐灰色土（10YR4/1）しまりあり、粘性やや強。φ2～3mmの粘土ブロックをやや多く含む。塚構築時の地表堆積土か。
9　暗褐色土（10YR3/3）しまりあり、粘性やや強。φ2～3mmの粘土ブロックを少量含む。遺構覆土か。
10　褐灰色土（10YR4/1）しまりあり、粘性やや強。φ2～10mmの粘土ブロックを多量含む。
11　にぶい黄橙色土（10YR7/4）しまりあり、粘性強。φ2 ～ 3mmの粘土ブロックをやや多く、φ2～3mmの炭化物粒子をわずかに含む。
12　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり、粘性共強。φ5～10mmの粘土ブロックを小量、φ2～3mmの炭化物粒子をわずかに含む。
13　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり、粘性共強。φ2～3mmの炭化物粒子をわずかに含む。均質でしまり強く、7層との境界は不明瞭である。
14　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり、粘性共強。φ5～10mmの粘土ブロックをやや多く含む。
Ⅰ　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり、粘性共強。グライ化したφ5 ～ 20mmの粘土ブロックをやや多く、φ2 ～ 3mmの炭化物粒子をわずかに含む。
塚構築時の基盤層。現在の水田下にも延伸しており、土色はグライ化して褐灰色（10YR6/1）を呈する。

0　平面図（1：80）　4m　　0　断面図（1：40）　2m

長嶺江添の塚　出土遺物 1





82

83

84

0　(1：6)　30cm

長嶺川田遺跡　調査区 1

調査区近景（西から）

調査区近景（北東から）

調査区全景（上が北）

ＳＢ１・ＳＡ１・ＳＡ２　完掘（上が北）

長嶺川田遺跡　遺構 2

P26　土層断面（南から）

P26　完掘（南から）

P30　土層断面（南から）

P30　完掘（南から）

P33　土層断面（南から）

P33　完掘（南から）

P64　土層断面（南から）

P64　完掘（南から）

P18　土層断面（南から）

P18　完掘（南から）

P19　土層断面（南から）

P19　完掘（南から）

P21・P22　土層断面（南から）

P21・P22　完掘（南から）

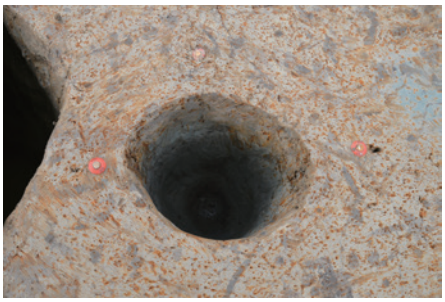
P20　土層断面（南から）

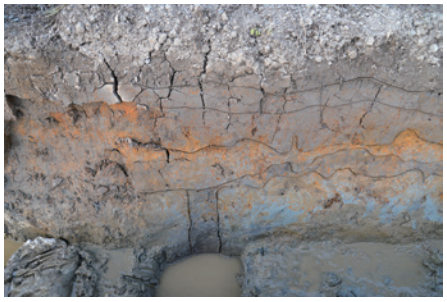
P20　完掘（南から）

P36　土層断面（南から）

P36　完掘（南から）

P39　土層断面（南から）


P39　完掘（南から）


P1　土層断面（南から）

P2　土層断面（南から）

P2　完掘状況（南から）

P8　土層断面（南から）

P8　完掘状況（南から）

P9　土層断面（南から）

長嶺川田遺跡　遺構 4

P9　完掘状況（南から）

P11　土層断面（北から）

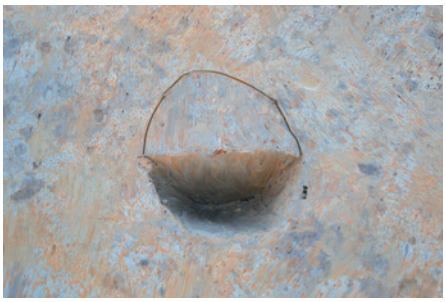
P11　完掘状況（北から）

P16　土層断面（南から）

P16　完掘状況（南から）

P24　土層断面（南から）

P24　完掘状況（南から）

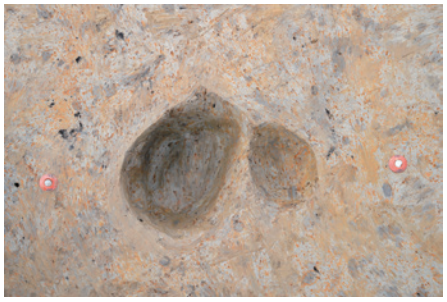

P29　土層断面（南から）

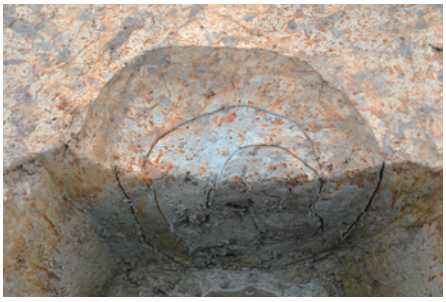
P29　完掘状況（南から）

P34　土層断面（西から）

P34　完掘状況（西から）

P37・38　土層断面（南から）


P37・38　完掘状況（南から）


P41　土層断面（南から）

P41　完掘状況（南から）

P43　土層断面（南から）

P43　完掘状況（南から）

P63　土層断面（南から）

SK10　土層断面（南から）

SK10　完掘状況（南から）

SE47　土層断面（東から）

SE47　完掘状況（東から）

SD53・54・55　土層断面（東から）

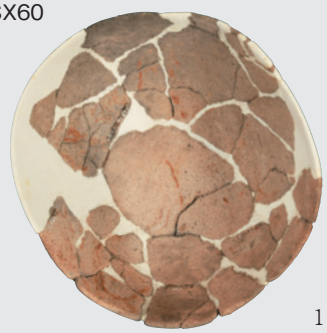
SK60　土層断面（東から）

SK60・SD53・54・55　完掘（上空から　上が西）

長嶺川田遺跡　出土遺物 1

古墳時代の遺物

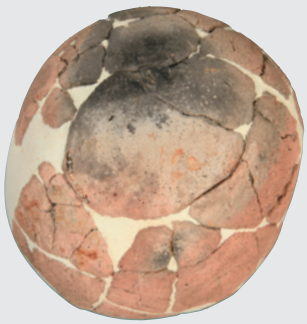
SX60


1

2

3

4

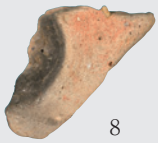


5

包含層

6

7


8

9

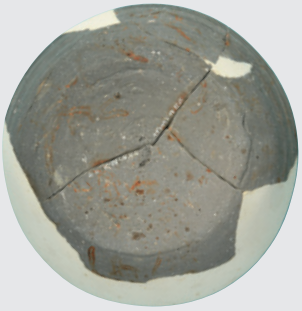
古代の遺物

P9

10

包含層（須恵器）

11



12

13

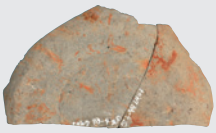
14

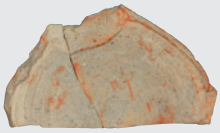
15

16

17

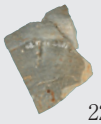
18




20

19

21


22

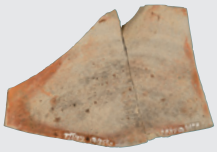
23

24

25

26

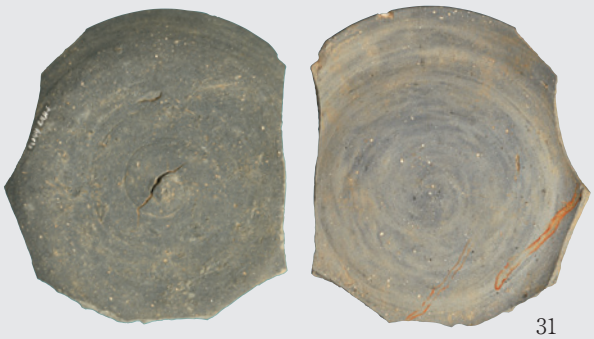
27

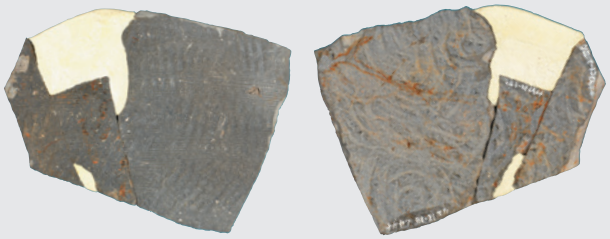

28

29

30

包含層（須恵器）


31

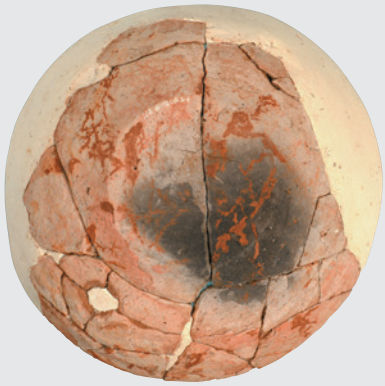

33

32

34

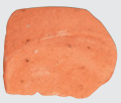
包含層（土師器）

35

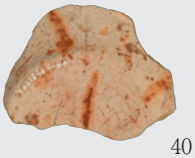


36

37


38

39


40

41

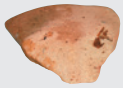
42

44

43

45

46


47

48

49

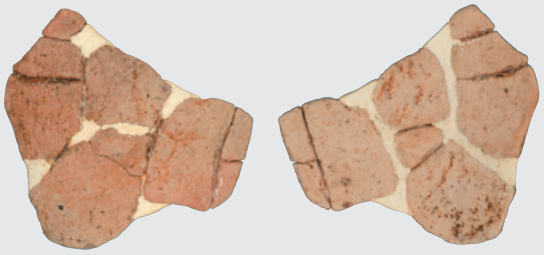
50

52

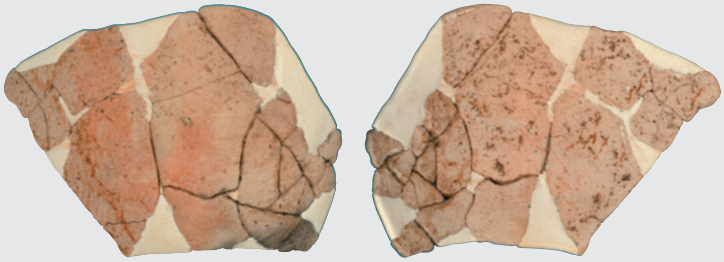
51

長嶺川田遺跡　出土遺物 3

土師器（包含層）


53

54


55

56

中世の遺物
SE47

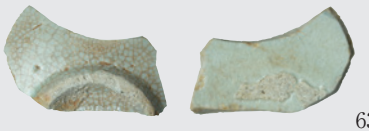
57

58

59

60

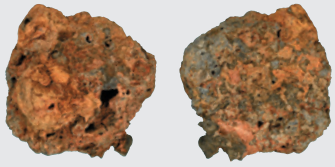
近世の遺物


63

時代不明の遺物
P1

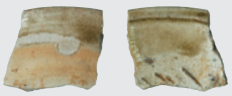
64

65

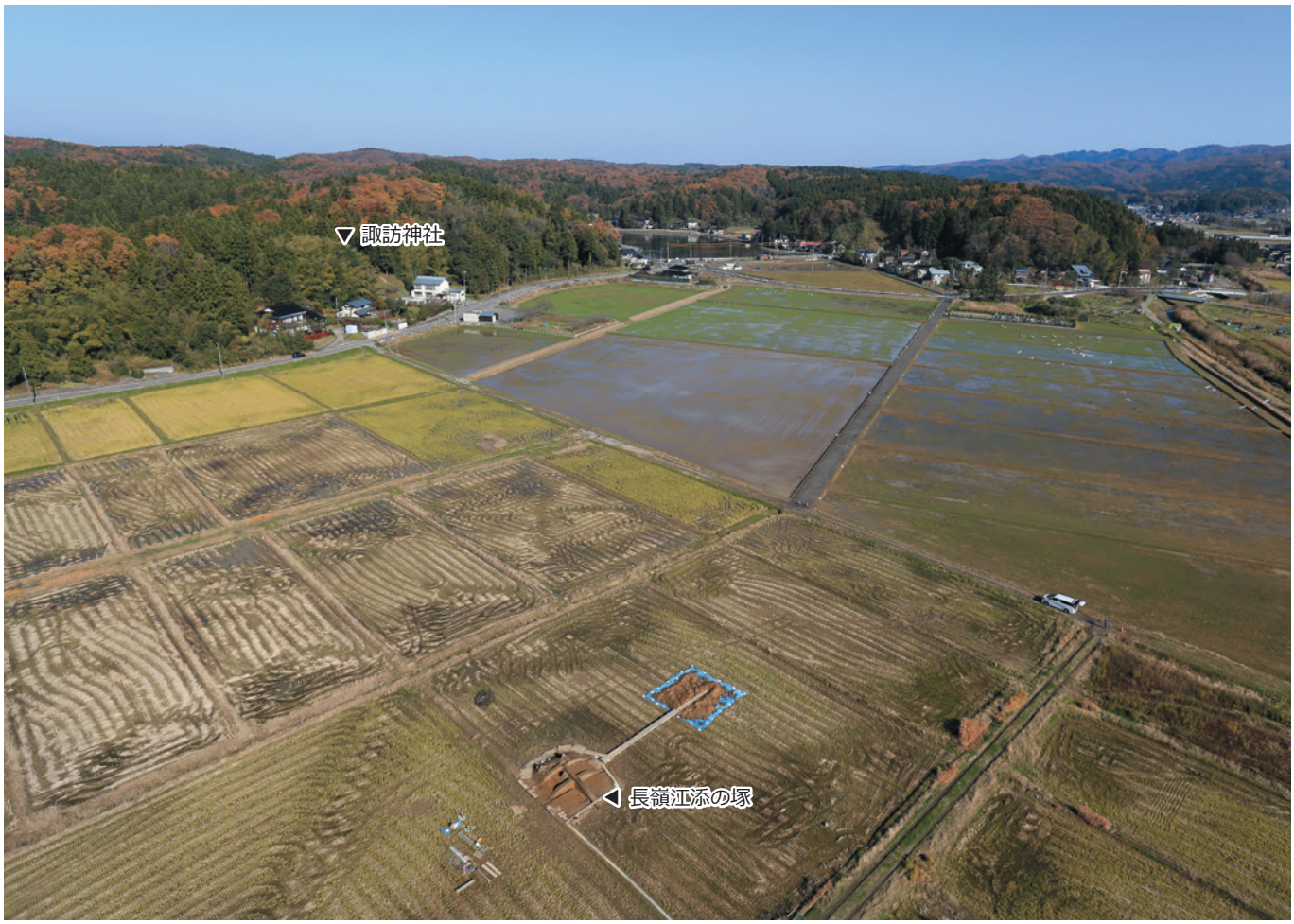

66

包含層

61


62

遺跡近景（北東から米山方向）



遺跡近景（南東から長嶺集落方向）

長嶺江添の塚　遺構 1

塚　調査前近景（南から）

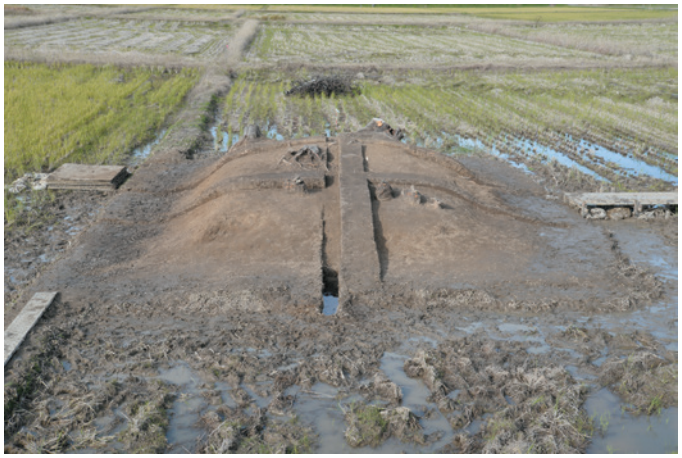
塚　調査前近景（西から）

頂部の山岳信仰塔（米山塔・妙高山塔）（南西から）

塚　調査前全景（南から）

塚　検出状況（南から）

塚　検出状況（東から）

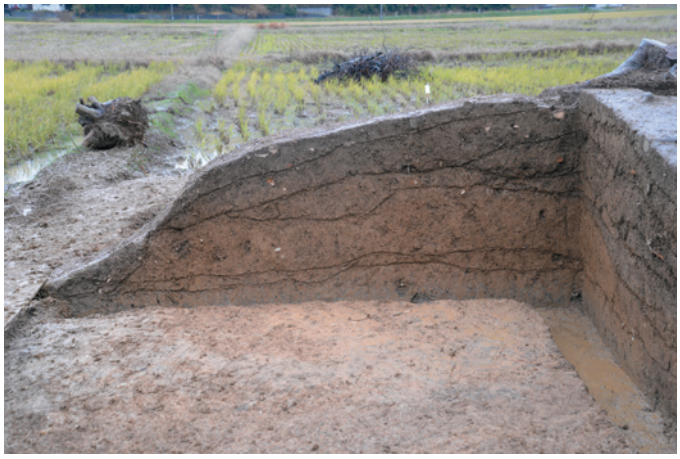


塚　表土除去段階全景（南から）

塚　表土除去段階全景（東南から）

土層断面（SPB-B′ 西半）（南から）

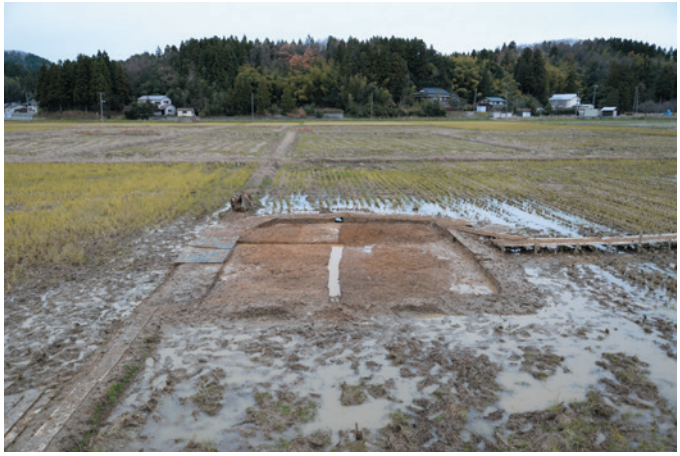
土層断面（SPB-B′ 東半）（南から）


土層断面（SPC-C′ 西半）（南から）

土層断面（SPC-C′ 東半）（南から）

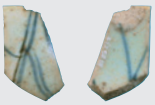
土層断面（SPA-A′）（西から）

土層断面（SPA-A′ 北側アップ）（西から）


塚　完掘状況（南から）

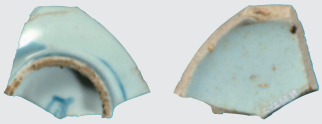
作業風景

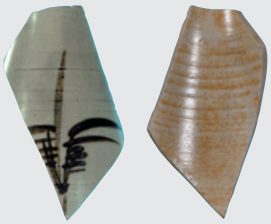
長嶺江添の塚　出土遺物

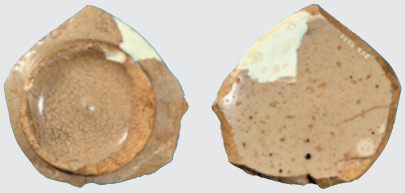

67

69

70


68


71


72

73

76

77

74

78

75

81

79

80

82

報告書抄録

ふりがな	ながみねかわだ・ながみねえぞえのつか
書名	長嶺川田・長嶺江添の塚
副書名	新潟県柏崎市 長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第97集
編著者名	中島 義人（柏崎市教育委員会） 継 実・長谷川 知美・丹 俊詞（藤村クレスト株式会社）
編集機関	柏崎市教育委員会（担当：博物館）
発行者	柏崎市教育委員会
所在地	〒945－8511　新潟県柏崎市中央町5番50号　　TEL　0257－23－5111
発行年月日	西暦　2020（令和2）年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 西暦年月日	調査面積 ㎡	調査原因
ながみねかわだいせき 長嶺川田遺跡	にいがたけん かしわざきし 新潟県柏崎市 にしやまちょうながみねあざかわだ 西山町長嶺字川田 2075・2076-1	15205	1027	37度 27分 05秒	138度 38分 37秒	20181004 ～ 20181203	508	記録保存調査
ながみねえぞえのつか 長嶺江添の塚	にいがたけん かしわざきし 新潟県柏崎市 にしやまちょうながみねあざえぞえ 西山町長嶺字江添 2135-3	15205	1031	37度 27分 13秒	138度 38分 56秒	20181109 ～ 20181212	104.9	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長嶺川田遺跡	集落	古墳時代 古代（平安時代） 中世	掘立柱建物・柵列 溝・土坑・ピット・井戸	土師器・須恵器・珠洲	
長嶺江添の塚	塚	近世	塚	石塔・陶磁器・土師器・須恵器・鉄製品・石製品	

要約	長嶺川田遺跡は平安時代（9世紀中葉頃）の土師器や須恵器などの遺物が出土し、掘立柱建物1棟、柵列2列、ピット、柱穴、土坑、溝などの遺構を検出することができた。また、古墳時代の土師器の鉢や甕が出土した土坑や中世の珠洲が出土した井戸も確認できた。 長嶺江添の塚は出土遺物や石塔の年代から18～19世紀に構築されたと考えられ、塚本体や基底部に付帯遺構や埋納遺物といったものは認められず、墳墓や経塚などのように塚自体が固有の性格を持つものではない。

※　緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第97集

長 嶺 川 田・長 嶺 江 添 の 塚

― 新潟県柏崎市 長嶺川田遺跡・長嶺江添の塚発掘調査報告書―

令和2（2020）年　2月 14日　印　刷
令和2（2020）年　2月 28日　発　行

発　行　柏崎市教育委員会
〒945-8511　新潟県柏崎市中央町5番50号
印　刷　株式会社　小　田
〒945-1352　新潟県柏崎市安田4153-1